

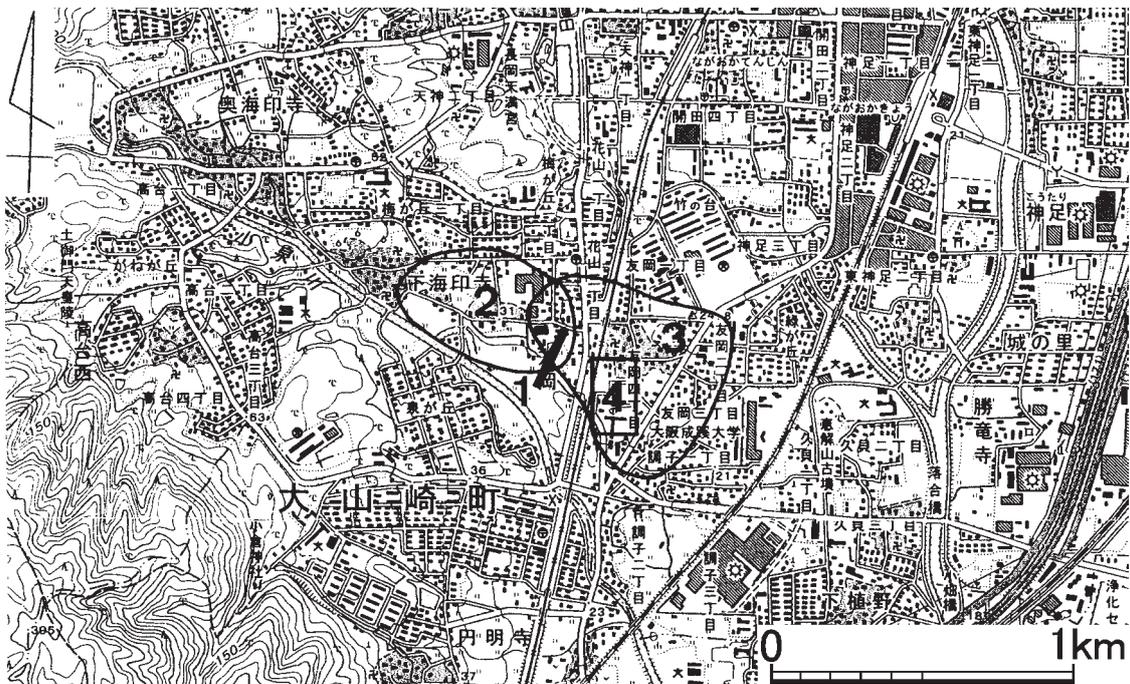
3.長岡京跡右京第941次(7ANOOD-5 ・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡 ・伊賀寺遺跡発掘調査報告

1. はじめに

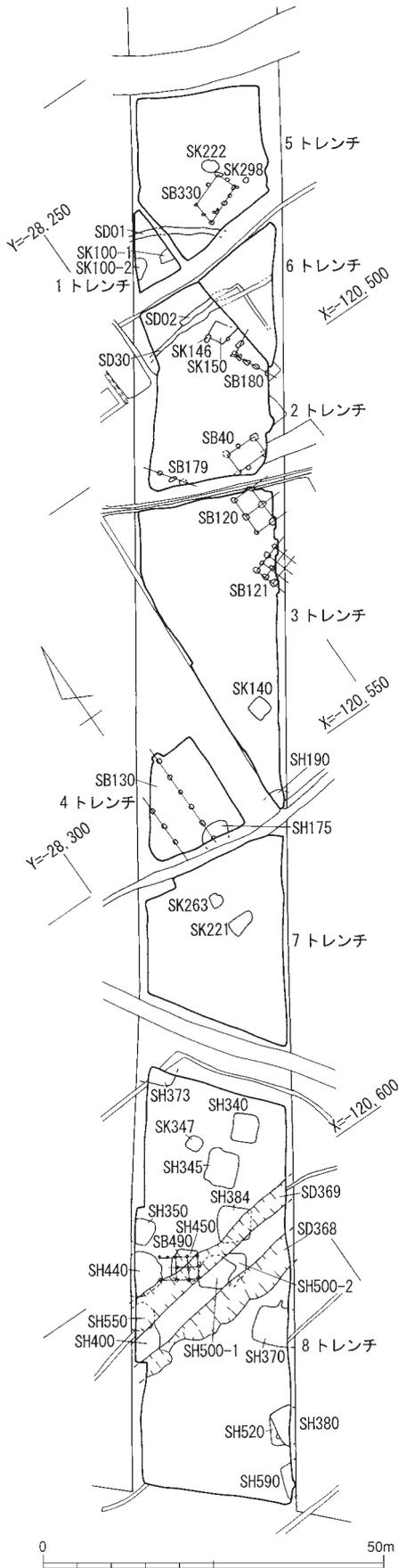
本報告は、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて、平成20年度に実施した石見下海印寺線地方道路交付金(街路)事業に伴う発掘調査のうち、8トレンチに関するものである。

調査地は、長岡京市下海印寺伊賀寺・下内田に所在する。小泉川左岸の河岸段丘上に立地しており、付近の標高は、27.1~28.1mである。8トレンチは、長岡京の条坊復原によると、八条三坊九・十五・十六町(新条坊では七条三坊十二町、八条三坊九・十町)にあたり、八条条間北小路、西三坊坊間小路が想定される位置にあたる。また、旧石器時代から中世にかけての集落遺跡である友岡遺跡、伊賀寺遺跡の範囲にも含まれる。

周辺の調査状況は、北側に広がる低位段丘縁辺部では調査地北西側100mの現NTT建物建設に伴い昭和56年度(右京第70次調査)^{注1}に実施された調査では、旧石器時代から近世に至る遺物が出土し、古墳時代後期~飛鳥時代にかけての竪穴式住居跡7基、土坑1基、七条坊間小路北側溝の可能性が指摘されている溝、鎌倉時代の掘立柱建物跡6棟・土坑3基・柵列が検出されている。昨



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)
1. 調査地 2. 伊賀寺遺跡 3. 友岡遺跡 4. 鞍岡廃寺



第2図 トレンチ配置図

年度調査報告した友岡西畑地区(右京第910・941次調査)^{注2}では、縄文時代草創期と考えられる尖頭器、縄文時代中期の竪穴式住居跡1基、縄文時代晩期と考えられる石冠、飛鳥時代の竪穴式住居跡1基、長岡京期の掘立柱建物跡3棟・溝2条・土坑3基、中世の掘立柱建物1棟・溝1条・土坑5基が、時期不明の掘立柱建物跡3棟が検出されている。

南側の河岸段丘上では、道路予定地内や第二外環状道路建設に伴う右京第907・943・947次調査^{注3}で、縄文時代中期末～後期後葉の遺物とともに竪穴式住居跡・土坑・火葬人骨を埋納した墓壇や、古墳時代前期・後期の竪穴式住居跡、長岡京期の区画溝など多くの遺構が検出されている。

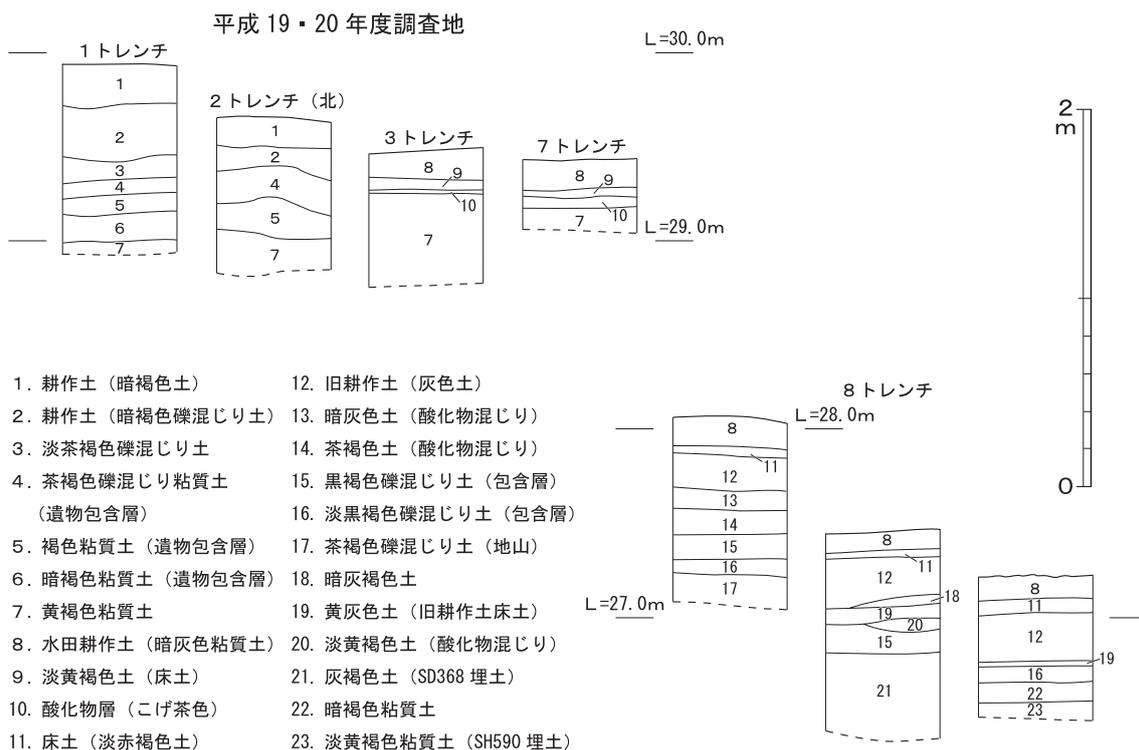
調査は、平成19年度に1～4トレンチまでを、平成20年度に5～8トレンチの調査を実施した(第2図)。現地調査期間は平成20年4月24日～10月31日である。調査面積は合計2,200㎡で、このうち8トレンチは1,267㎡である。1～7トレンチまでの調査結果は、平成20年度に報告している^{注4}。

平成21年度は、遺物が多量に出土した8トレンチの整理・報告作業を行い、調査第2課調査第2係長森正、同主任調査員増田孝彦が担当した。原稿執筆は、縄文土器を京都大学生木村啓章、石鏃を除く石器類を当センター専門調査員黒坪一樹、それ以外を増田が執筆した。

調査にあたっては、長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・京都府教育委員会・京都府乙訓土木事務所をはじめとする関係諸機関からご指導・ご協力をいただいた^{注5}。整理作業については、整理員の参加・協力を得た^{注6}。記して感謝したい。

なお、調査に係る経費は、全額、京都府乙訓土木事務所が負担した。報告に使用した座標は日本測地系第6座標系である。

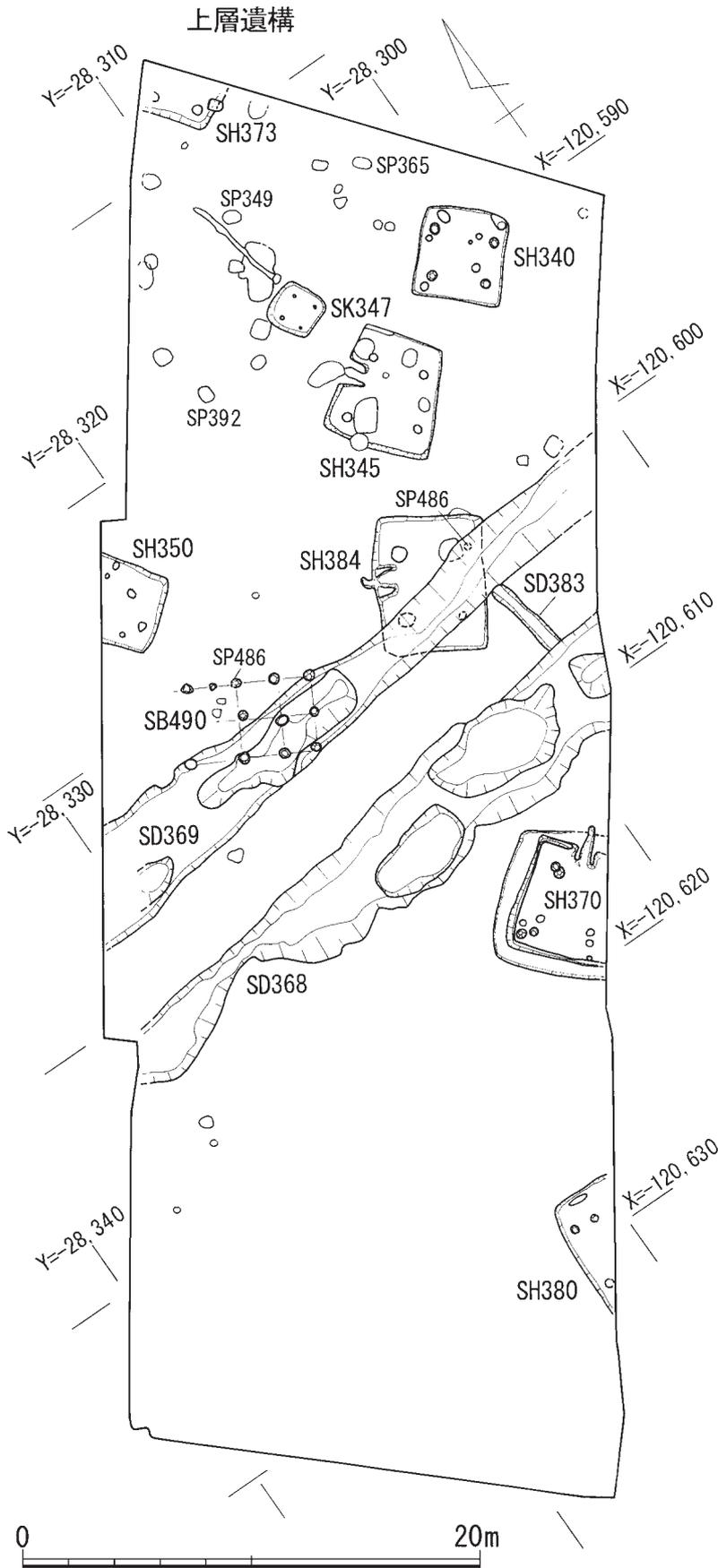
2. 調査概要(第2・3図)



第3図 土層柱状図

8 トレンチの現況は水田であるが、中央付近でトレンチに対して45°北に傾く畦畔があり、これを境に北側と南側の水田面は約1mの比高差がある。台地上の地山であった黄褐色粘質土は、調査地ではトレンチ北端で一部確認したのみで、8 トレンチ内には広がっていない。

調査地の土層(第3図)の堆積状況は、トレンチ北東壁高位側にあたる北側では、現水田耕作土(第8層)の下に床土(第11層)があり、さらに旧耕作土(第12層)が堆積し、その下位に酸化物を多く含む第13層の暗灰色土、同様に酸化物を多く含む第14層の茶褐色土がある。この第13・14層からは若干の須恵器、土師器、縄文土器が含まれる。この下には多くの遺物を含む第15層の黒褐色礫混じり土、第16層の淡黒褐色礫混じり土の包含層が存在する。長岡京期の溝・土坑はこの第7層から掘り込まれる。この下位は、縄文時代検出面となる茶褐色礫混じり土(第17層)のベース面となる。この土層はトレンチ中央部分の畦畔付近を境にして南側検出面は淡黄褐色粘質土となる。トレンチ南端側の堆積状況は、現水田耕作土(第8層)の下に床土(第11層)、旧耕作土・床土(第12・19層)が堆積しており、その下位に第16層の淡黒褐色礫混じり土の包含層ある。この第16層以下は、縄文時代の遺構検出面である淡黄褐色粘質土のベース面となる。この淡黄褐色粘質土は全面に広がるのではなく、北側は竪穴式住居跡S H440・450・500-1・2、西側はS H400、墓S T620、土坑S K544、南側は竪穴式住居跡S H590、東側はトレンチ東壁に囲まれた範囲にのみ認められ、この部分を除く北側は前述した茶褐色礫混じり土、西側は淡黄褐色粗砂礫混じり土ない粘質土となっている。この西側の土層は、隣接する右京第943次調査の淡茶褐色砂質土、灰白色砂礫層に相当するものである。中央部分に広がる淡黄褐色粘質土は、部分的に上下2層からなる部分も認められた。結果的に上下2層に分かれる部分は自然地形の起伏に浅く炭や遺物が



第4図 上層遺構平面図

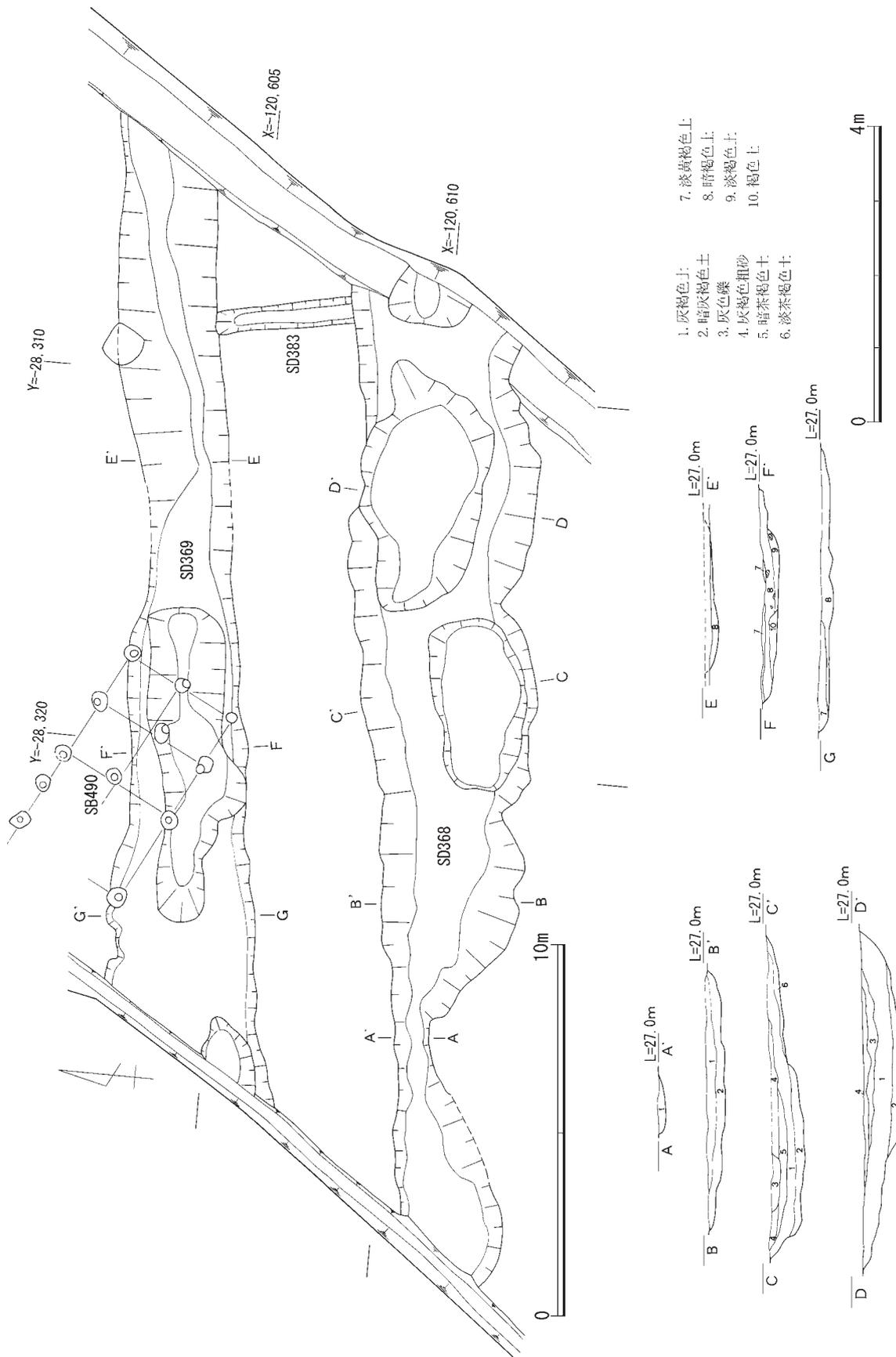
堆積したものであると判断した。

3. 検出遺構

検出された遺構は、上層の遺構として、長岡京期の溝3条、土坑1基、古墳時代後期の竪穴式住居跡8基、掘立柱建物跡1棟がある。下層遺構としては、縄文時代の竪穴式住居跡8基、土坑・柱穴約220基がある。上層・下層から検出された柱穴は、建物跡を特定するまでには至らなかった。

古墳時代の竪穴式住居跡の規模については、方向を入れた長辺×短辺、深さを記し、部分的な検出にとどまった住居跡については検出した長辺×短辺、深さとした。主軸方向については、竈のつく辺に直行する辺とし、竈のないものについては、住居の長辺側、部分的な検出にとどまった住居跡については検出できた長辺側で記した。

縄文時代の竪穴式住居跡の規模は、全体が分かるものが少なく、不整形なものが多い、主軸方向については、北西から南



第5図 溝 S D 368・369平・断面図

西方向に並んでいるが、住居支柱穴の長軸方向で記した。

1) 上層の遺構(第4図、図版第2)

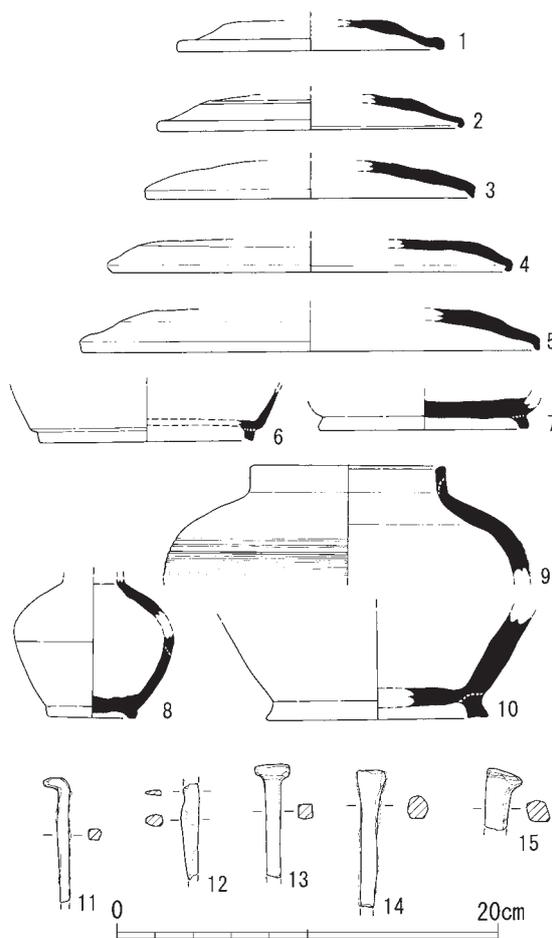
(1) 奈良時代の遺構・遺物

溝S D 368・369(第5図、図版第3・17) トレンチ中央部を東西に平行して延びる溝を検出した。北側溝(S D 369)と南側溝(S D 368)の間は約3.2~3.5m幅をもつ。溝S D 369は中央部分が削平を受けやや幅が狭くなっているが、東端で幅約2.6m、深さ約0.2m、西端で幅約4.0m、深さ0.2mを測る。全体的に東側から西側に向かってゆるい傾斜をもつ。長さ約31mを検出した。溝中央部より西側では、溝底面が長さ8.6m、幅2.2m、深さ0.15mにわたって一段掘り下げられている。埋め土中より、長岡京期と考えられる須恵器・平瓦片・丸瓦片が出土している。

溝S D 368の規模は、東端で幅4.5m、深さ0.4m、西端で幅2.6m、深さ0.15mを測る。溝S D 369同様、底面が3か所で一段大きく掘り下げられている。また、溝西端近くでは、南側の掘形が北側に向かって、基部幅6.2m、先端幅2.2m、長さ2mが突出している。この部分のみ、溝幅が1m、深さ0.1mとなっている。この狭くなる部分を除き、東側・西側については滞水するような状況である。溝を渡る入り口部分である可能性も考えられるが、溝S D 369側に同様な突出部分は認められない。埋土中より長岡京期と考えられる須恵器・平瓦片・土馬片が出土した。この

両溝に挟まれた空間には柱穴等は認められなかった。区画を目的とした築地等の施設が考えられる。この溝の延長部分は、右京第927次調査地で確認されているが、小泉川の流路痕跡の残る崖面以西は失われている。

埋土中からは多くの須恵器、土師器、平・丸瓦片、土馬片、鉄製品等が出土したが、図化できたものは少ない(第6図、図版第17)。溝S D 368からは2・5・7~10、溝S D 369からは1・6が出土した。1~5は須恵器杯B蓋である。1~5はいずれも口縁端部が下方へ屈曲する。6・7は須恵器杯Bである。高台が底部端近くに付される。8は須恵器壺Lである。9は須恵器短頸壺である。肩部付近にカキ目が施される。10は壺底部片である。内面底部に自然釉が付着する。11は鉄釘。12は刀子片で、刃部に磨ぎ減りが認められる。これらの遺物は、長岡京期と考えられる。



第6図 溝S D 368・369出土遺物実測図

溝S D 383(第5図、図版第3) 溝S D 368・369を繋ぐように直交するもので、幅0.6~0.8m、

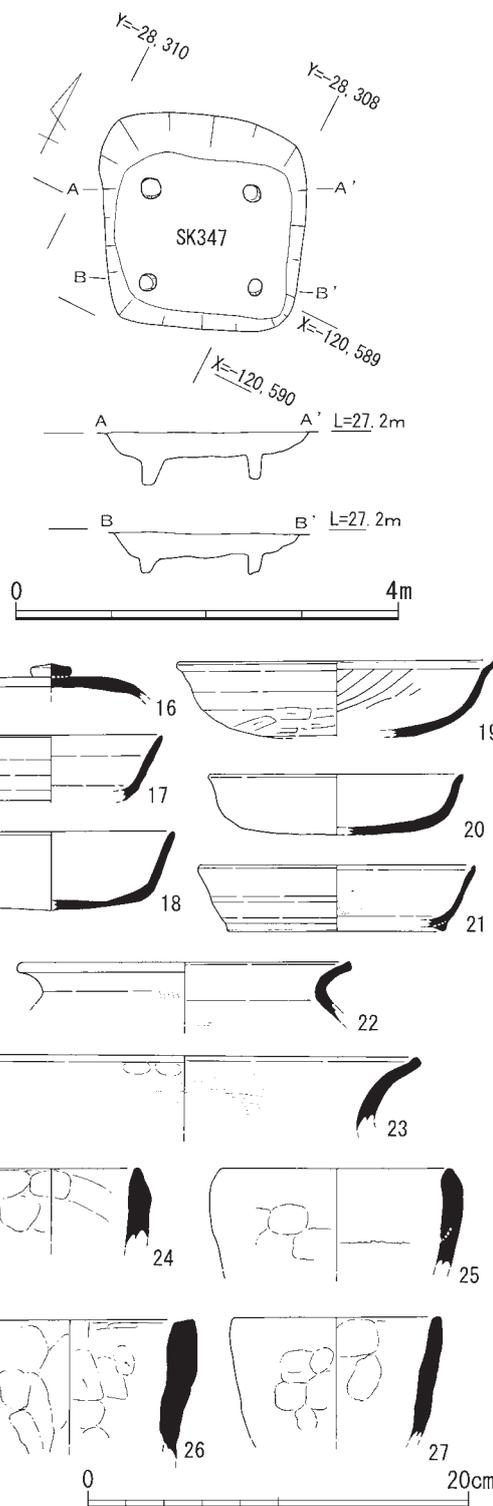
深さ0.12mを測る。溝S D369から溝S D368に向ってゆるやかに傾斜しており、排水溝とも考えられる。溝東側掘形には排水溝を覆っていた板材の固定に使用されていたと考えられる鉄釘3本が直立した状態で検出されたが、板材の痕跡は確認されなかった。

第6図13~15は、鉄釘である。トレンチが滞水した際に先端部分を欠損した。溝S D368より検出された釘11に比べて太いものである。残存状況が最も良いもので、14は厚さ1.2cm、長さ7.5cmを測る。

土坑S K347(第7図、図版第4) 竪穴式住居跡S H345の北側で検出した。一辺2.2×約2mの方形の平面形を呈し、深さ0.3mを測る。主軸方向はN27°Wである。底面は、中央部が浅いレンズ状に凹む。これを囲む形で柱穴が4か所検出された。柱穴の規模は直径0.18~0.22m、深さ0.24~0.38mを測る。柱穴は杭状のもので、先端が尖り、やや内傾気味に打ち込まれる。くみ取り式のトイレ遺構を想定し、土坑底面に堆積する土砂を採取し寄生虫卵分析を行った^{注7}。

その結果、『…花粉化石はわずかに認められたのみで、多くは分解・消失している可能性が高いと推察される。こうしたことから寄生虫卵も同様に分解・消失している可能性も考えられよう。』と結果が出た。分析結果からトイレ遺構と断定することはできなかったが、否定もできないものとなった。

埋土中からは多くの須恵器(第7図16~18)・土師器(19~23)・製塩土器(24~27)が出土した。16は須恵器杯B蓋である。扁平な宝珠つまみが付く。17・18は須恵器杯Aで、平坦な底部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。18は口径12.75cm、器高4.2cmを測る。19・20は土師器杯である。19は内面立ち上がり部分に放射状の暗文を施す。外面はヨコナデ、底部付近はヘラ削りを施す。20は口径13.2cm、器高3.25cmを測る。21は土師器杯B



第7図 土坑S K347平・断面図、出土遺物実測図

である。貼り付け高台を有するもので口径14.4cm、器高3.5cmを測る。22・23は土師器甕で、口縁部が「く」の字状に屈曲するもので、粗いハケ目調整が残る。22は口径17.2cm。23は口縁端部を上方につまみあげる。口径24.2cmを測る。24～27は製塩土器である。上半のみ依存し、砲弾型の体部に尖底をもつものと思われる。調整はユビオサエとナデが主体である。25は、体部に比して口径が狭いものである。口縁部は緩やかに外上方に広がるものと、やや内傾するものがある。26は口径12.8cmを測る。器壁は厚さ1cm以上と分厚い。これらの遺物は長岡京期と考えられる。

(2) 古墳時代の遺構・遺物

竪穴式住居跡 S H340 (第8図、図版第4) トレンチ北東壁近く、竪穴式住居跡 S H345の東側で検出した住居跡で、検出した住居跡のうち規模がわかるものの中で最も小形の住居跡である。住居跡の規模は、4.2×4.0m、深さ0.1m、主軸方向はN42°Eである。竈・周壁溝は認められなかった。支柱穴は住居角付近から4か所で検出した。柱穴の規模は直径0.5～0.6m、深さ0.18～0.2mを測る。埋土中より細片化した須恵器・土師器が少量出土したが、図化できるものはなかった。

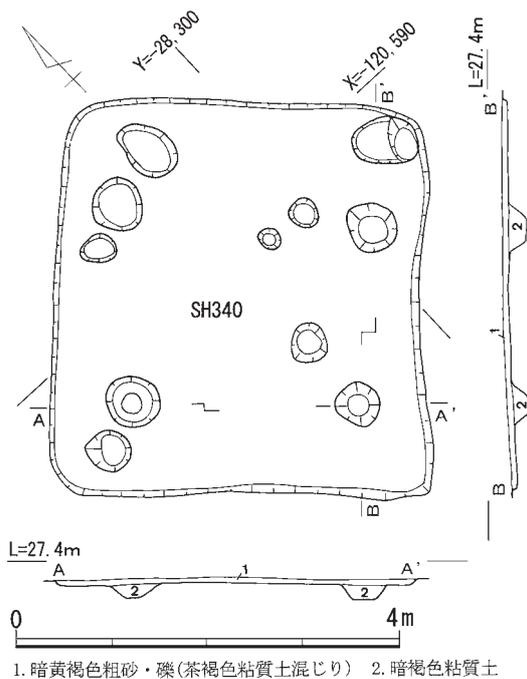
竪穴式住居跡 S H345 (第9図、図版第4・5) 竪穴式住居跡 S H340の南側で検出した住居跡で、南西辺中央付近と北東辺の竈煙道付近が後世の遺構により削平されている。住居跡の規模は、5.0×3.5m、深さ0.2m、主軸方向はN36°Wである。支柱穴は住居角付近から4か所で検出した。柱穴の規模は直径0.38～0.45m、深さ0.22～0.26mを測る。周壁溝は北辺の竈部分を除き北西側と南西辺、北東辺の一部に幅0.2m、深さ0.15mが設けられている。北側の支柱穴そばには長径1.08m、短径0.8m、深さ0.53mの貯蔵穴と考えられる土坑が設けられている。竈は、住居北西辺の中央部に付く。本体の規模は、両焚口間の内法が55cm、高さ14cm、長さ0.9mを測る。燃焼部は平坦で炭が堆積し、中央に支脚が1石立つ。支脚周辺に小形の土師器甕が認められたが、図化

できなかつた。煙道部は後世の遺構に削平されている。

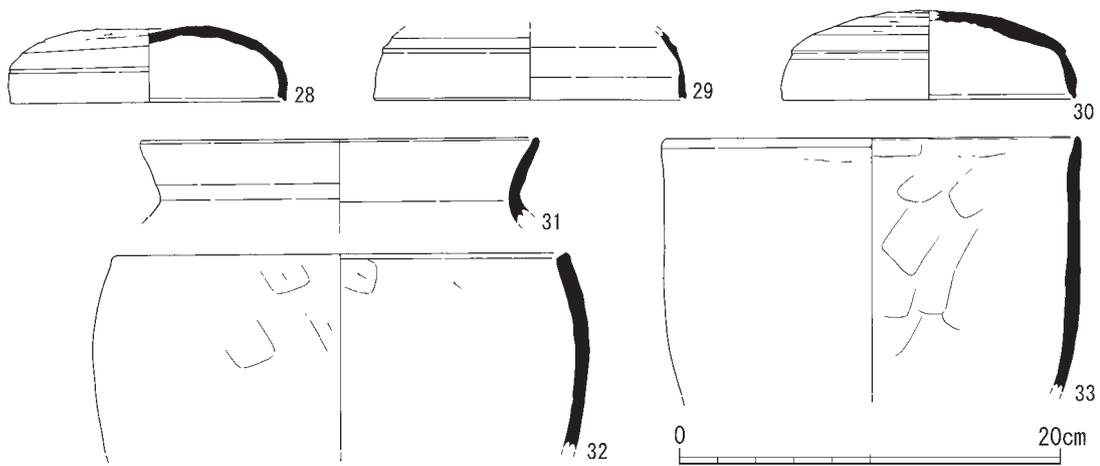
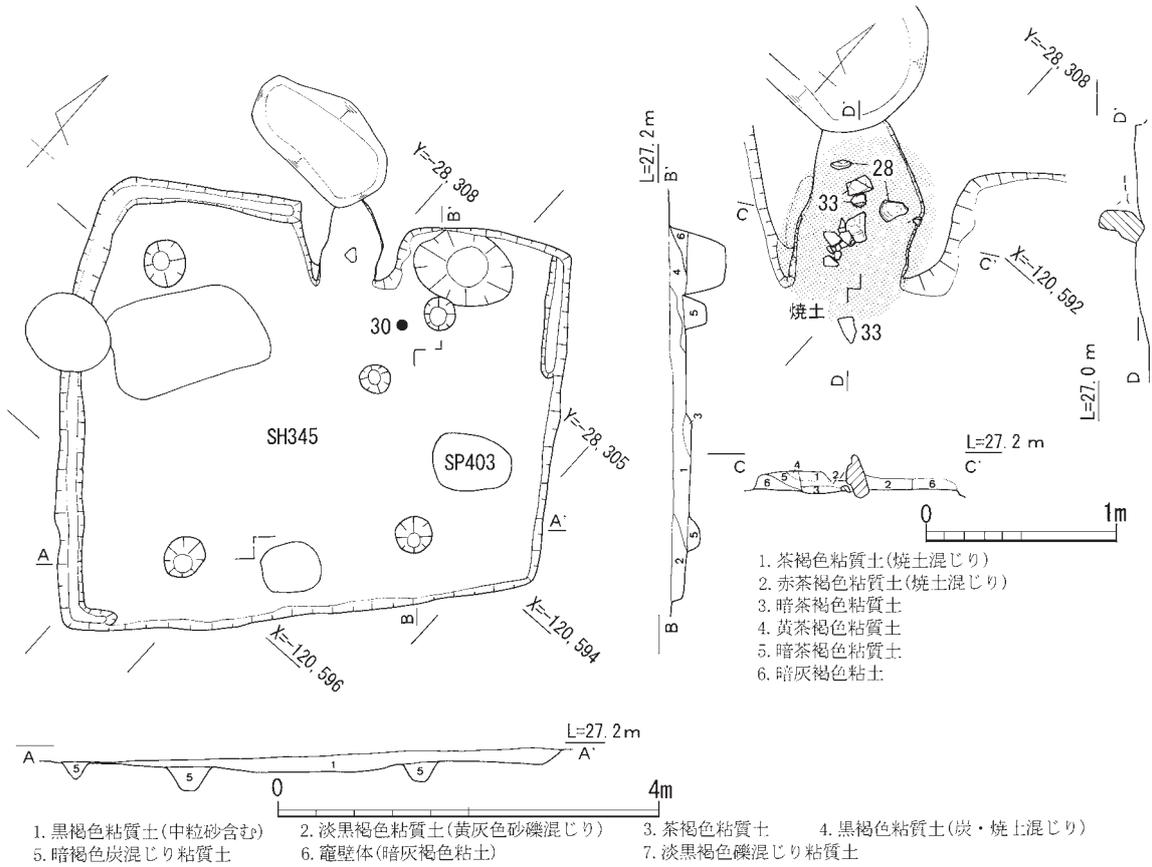
出土遺物(第9図・図版第17)には、埋土中より29・31・32、竈内から28・33、竈周辺からは30が出土した。28～30は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。杯蓋の形態から、住居の時期は陶邑編年TK10併行期と考えられる。31は土師器甕である。32・33は土師器甕である。32は口縁部がやや内傾し、内外面ともケズリ調整が施される。33は、内面はナデ仕上げしている。

竪穴式住居跡 S H350 (第10図、図版第5)

トレンチ北西壁中央付近で検出した。西側に拡張した際に北東辺が長く、南西辺が短い住居跡



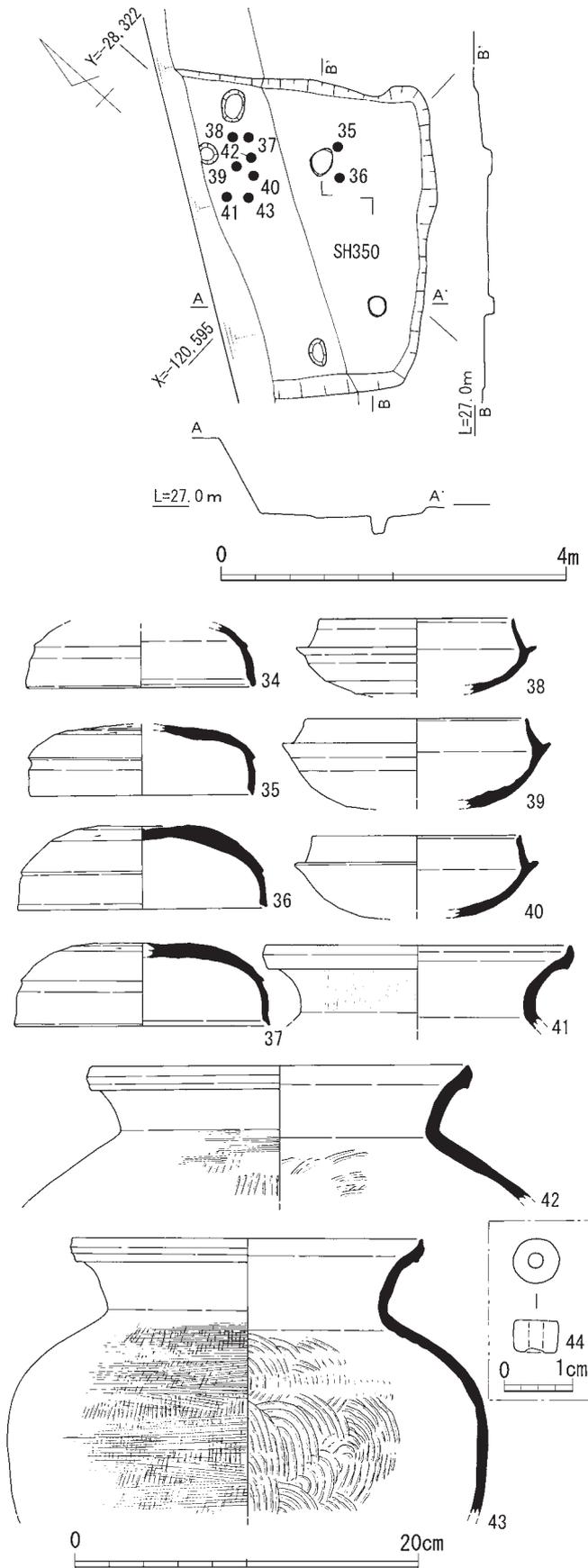
第8図 竪穴式住居跡 S H340実測図



第9図 竪穴式住居跡SH345実測図、出土遺物実測図

であることが判明した。住居跡の規模は不明であるが北東辺が3m以上、東西3.7m、深さ0.16mを確認した。主軸方向はN34°Wである。主柱穴は住居跡南角付近から1か所を検出した。柱穴の規模は直径0.2m、深さ0.1mを測る。周壁溝は存在しない。竈は検出されなかった。

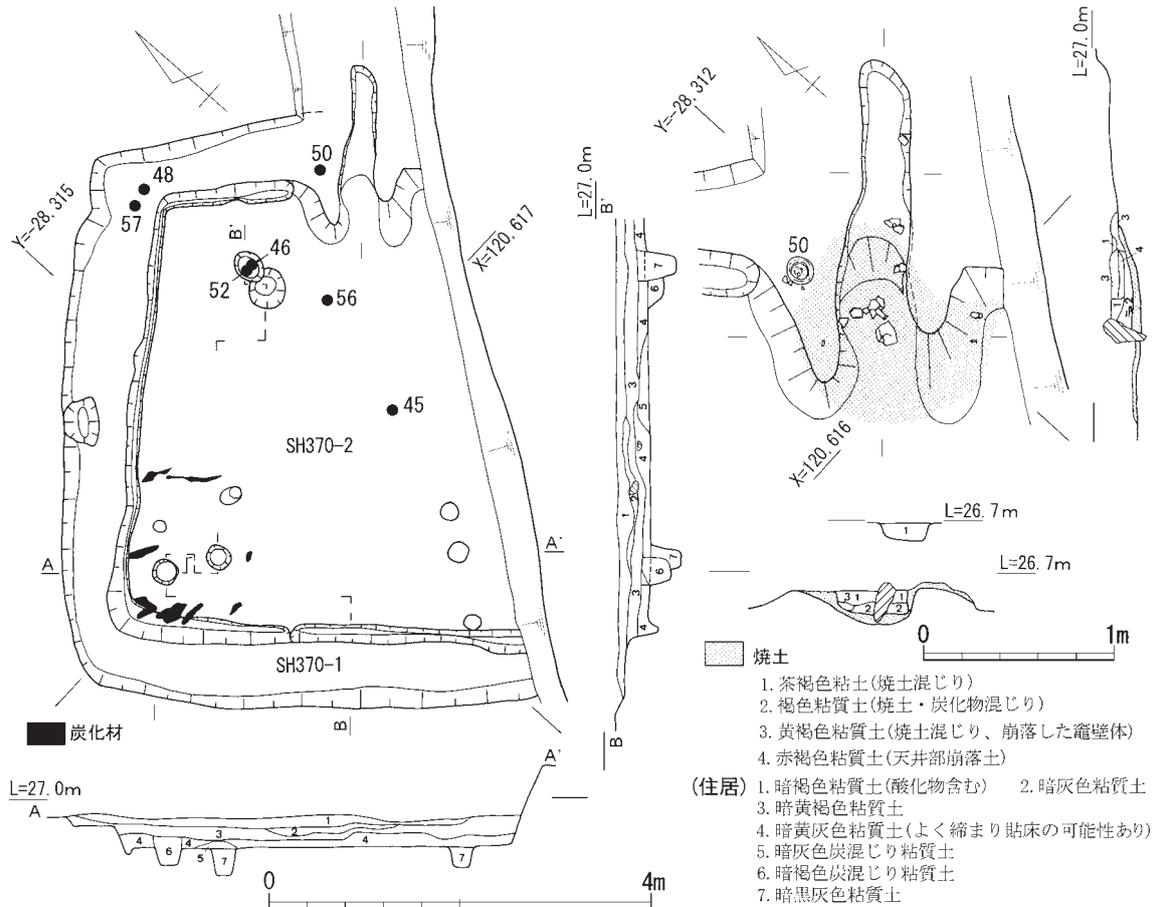
出土遺物(第10図)としては、住居西角付近、床面付近より34~43、埋土中より滑石製白玉44が出土した。34~37は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。36は口径14.3cm、器高4.9cmである。38~40は須恵器杯身である。丸みを帯びた底部と内上方に立ち上がる口縁部からなる。底部外面はヘラ削りを施す。杯身・杯



第10図 竪穴式住居跡 S H350実測図、出土遺物実測図

蓋の形態から、住居の時期は陶邑編年 T K10併行期と考えられる。41～43は須恵器甕である。口縁部は回転ナデ、外面は平行タタキ、内面は同心円文タタキである。41は口径17.6cm、42は口径21.8cm、43は口径20.3cmを測る。44は滑石製白玉である。直径6.5～7mm、口径2mm、厚さ4.9mm、重さ0.4gを測る。

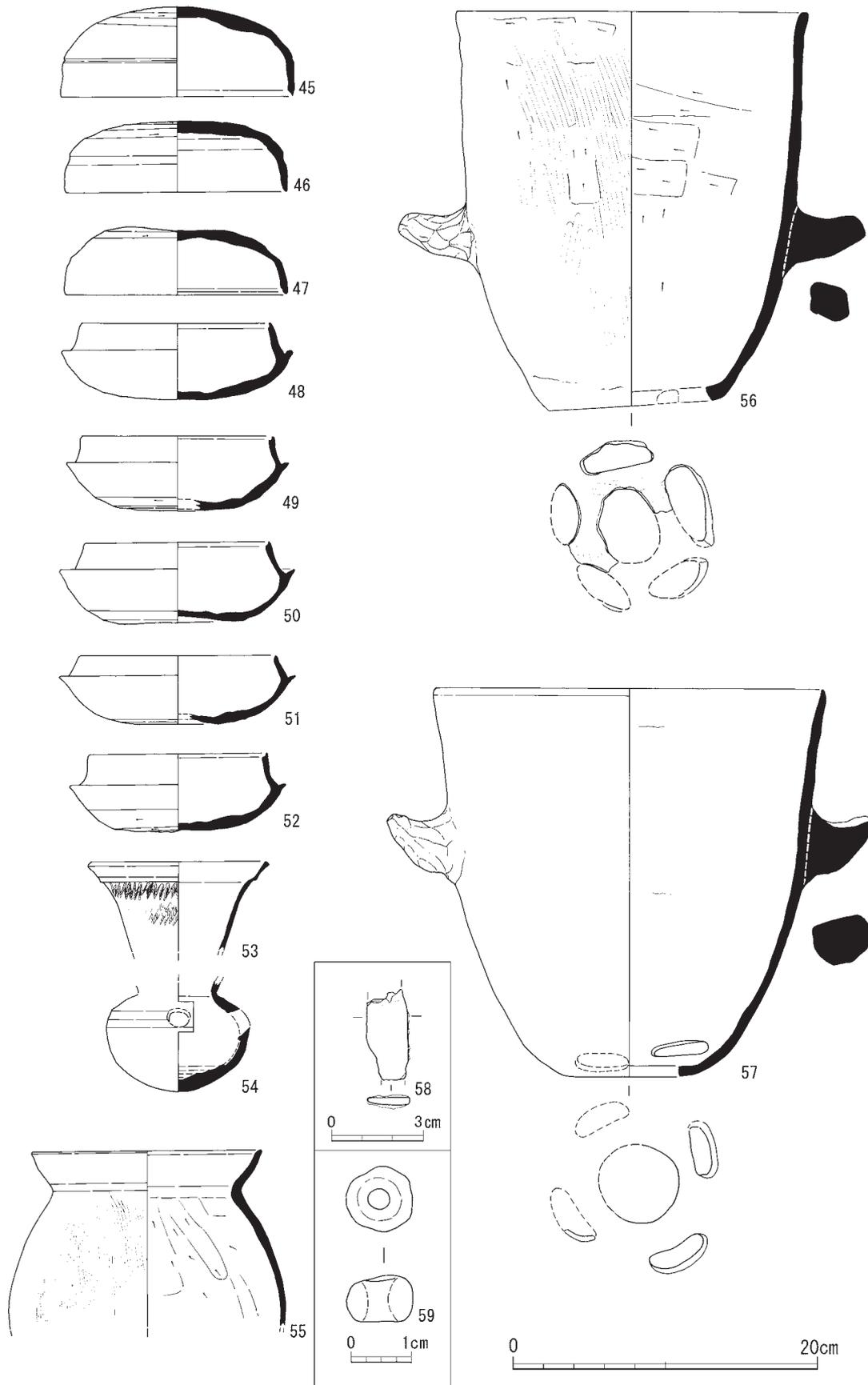
竪穴式住居跡 S H370 (第11図、図版第5・6) トレンチ南東壁中央付近で検出した住居跡で、約1/2が調査地外となる。2基の住居が重なり合っており、火災に伴い小さい住居 (S H370-2) から大きな住居 (S H370-1) へと建て替えが行われたようで、竪穴式住居跡 S H370-2 の西側角付近の床面には多くの炭化材が認められた。両住居とも北西辺は確認できたが、北東・南西辺は約半分の検出にとどまった。竪穴式住居跡 S H370-1 は北西辺5.6m、南西辺4.8m、北東辺3.4mを検出し、深さ0.25m、主軸はN50°Eである。主柱穴は直径0.28m、深さ0.45mである。竪穴式住居跡 S H370-2 は北西辺4.7m、南西辺4.3m、北東辺2.8m、深さ0.2mを検出した。主軸はN48°Eである。主柱穴は、建て替え前後とも、近い場所に設けられており、直径0.25～0.28m、深さ0.22～0.3mである。また、竪穴式住居跡 S H370-1 には竈が設置されている北東辺を除き、幅15cm、深さ6cmの周壁溝が設けられている。竪穴式住居跡 S H370-2 の竈は残存状況が非常に良く、住居北西辺の中央部に付く。本体の規模は、



第11図 竪穴式住居跡SH370実測図、出土遺物実測図

両焚口間の内法が35cm、高さ15cm、燃焼部は平坦で炭が堆積し長さ0.8mを測る。中央に支脚が1石立つ。煙道部は緩やかな勾配で幅約20cm、長さ95mを測る。

出土遺物(第12図、図版第17・18)には、竪穴式住居跡SH370-2の竈左側より須恵器杯身50、中央付近より須恵器杯蓋45、竈周辺の住居床面から須恵器杯蓋46、杯身52、土師器甌56が出土した。竪穴式住居跡SH370-1では住居北角付近の床面より須恵器杯身48、その南側で土師器甌57が出土した。45~47は杯蓋である。いずれも天井部外面はヘラ削りを施す。45は口径15.1cm、器高5.95cm、46は口径14.3cm、器高4.75cm、47は口径14.4cm、器高4.5cmを測る。48~52は杯身である。底部外面はヘラ削りを施し、52の内面には叩き痕が残る。48は口径12.3cm、器高5.1cm、50は口径12.0cm、器高5.35cm、52は口径11.6cm、器高5.1cmを測る。杯身・杯蓋の形態から、住居の時期は陶邑編年TK10併行期と考えられる。53・54は礎である。同一個体と考えられる。頸部には櫛描波状文が認められる。55は土師器甕である。外面はハケ目調整、内面はヘラ削りを施す。口径14.9cmを測る。56・57は土師器甌である。56は口径23.0cm、器高26.2cm、57は口径25.4cm、器高25.65cmを測る。残存状況の良い56では、外面は粗いハケ目、内面はケズリ調整を施す。底部は、56は6孔、57は5孔あり、56には粗いハケ目調整が認められる。58は刀子片である。残存長3.1cm、刃部の幅1.4cm。59は翡翠製小玉である。淡灰黄色を呈し、直径1.05cm、厚さ6.5~7.5mm、重さ1.3gを測る。両面穿孔で、よく研磨された縄文時代の優品である。



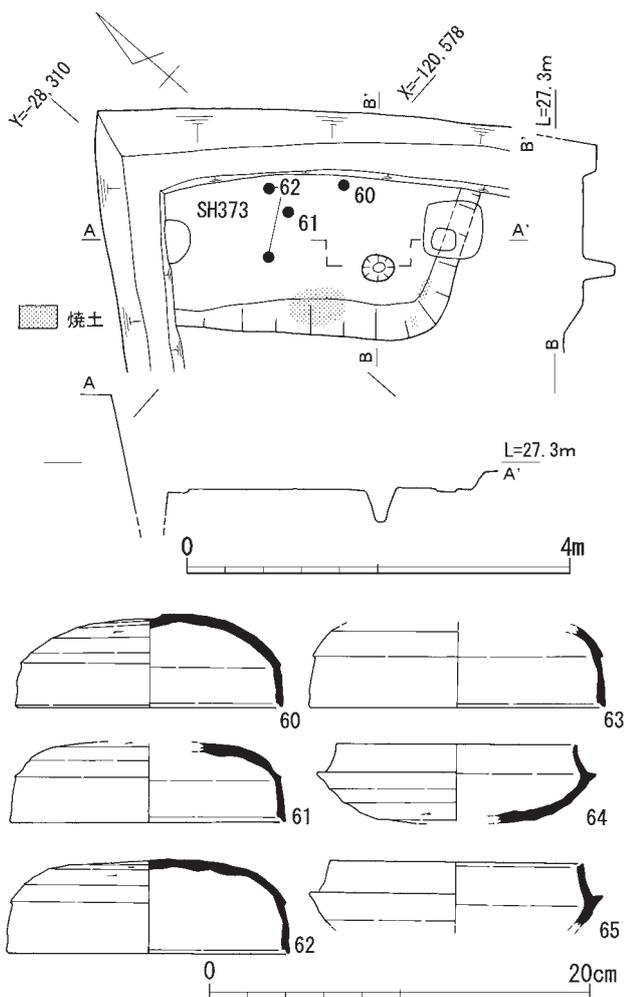
第12図 竪穴式住居跡 S H370実測図、出土遺物実測図

竪穴式住居跡 S H373 (第13図、図版第7) トレンチ北角付近より検出したもので、大半が調査地外に延びる住居跡である。住居跡の規模は不明であるが、南西辺3.0m、南東辺2.1m、深さ0.2mを確認した。主軸方向はN37°Wである。支柱穴は住居南角付近から1か所を検出した。柱穴の規模は直径0.3m、深さ0.34mを測る。周壁溝は存在しない。竈は検出されなかったが、住居南西側掘り込み側壁で赤色に被熱を受けた部分が観察された。

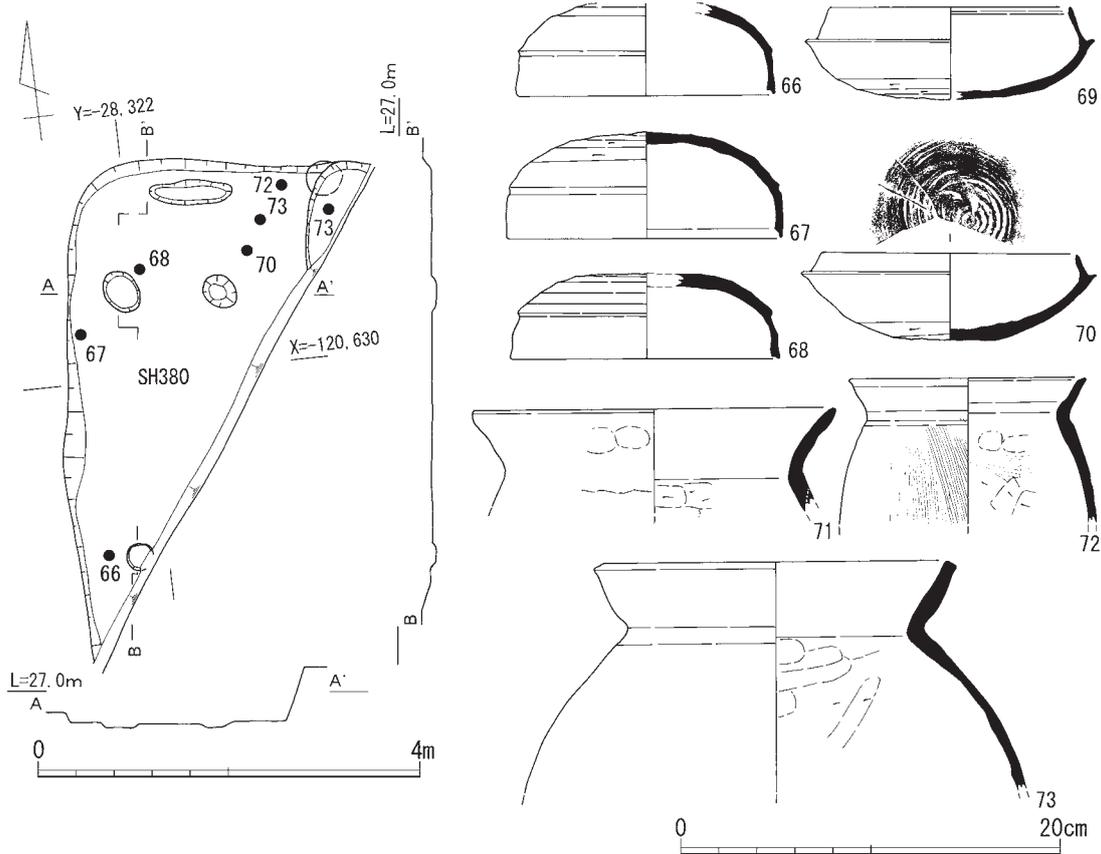
出土遺物(第13図・図版第17)には、埋土中より63~65、床面より60~62が出土した。60~63は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。60は口径13.8cm、器高5.0cm、62は口径14.3cm、器高4.75cmである。64・65は須恵器杯身である。丸みを帯びた底部と内上方に立ち上がる口縁部からなる。底部外面はヘラ削りを施す。杯身・杯蓋の形態から、住居の時期は陶邑編年TK10併行期と考えられる。

竪穴式住居跡 S H380 (第14図、図版第7) トレンチ南端の南東壁で検出したもので、住居北側角を確認したのみで、大半が調査地外になる。住居跡の規模は、支柱穴と考えられる柱穴を2か所検出しており、この柱穴位置から復原すると一辺5.5mほどの規模が推定される。床面までの深さ0.12mである。主軸方向はN5°Wである。支柱穴は住居北・南角付近から2か所を検出した。柱穴の規模は直径0.28~0.46m、深さ0.06mを測る。周壁溝は存在しない。住居北辺のトレンチ壁際で焼土・炭混じりの長径1.2m以上×短径0.4m以上、深さ0.05mの楕円形を呈する浅い土坑状の凹みを検出した。竈付近に設けられた土坑と考えられる。

出土遺物(第14図)には、住居北辺・西辺付近の床面から66~69、北辺床面付近より70・72、土坑状の浅い凹みの埋土中から67・73が出土した。66~68は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。67は口径14.3cm、器高5.65cmである。69は須恵器杯身で、丸みを帯びた底部と内上方に立ち上がる口縁部からなる。底部外面はヘラ削りを施す。70の内面底部には叩き痕が残る。杯身・杯蓋の形態から、69は陶邑編年TK10併行期と考えられる。70はやや新しい資料で、混入品の可能性がある。71~73は土師器甕であ



第13図 竪穴式住居跡 S H373実測図、出土遺物実測図

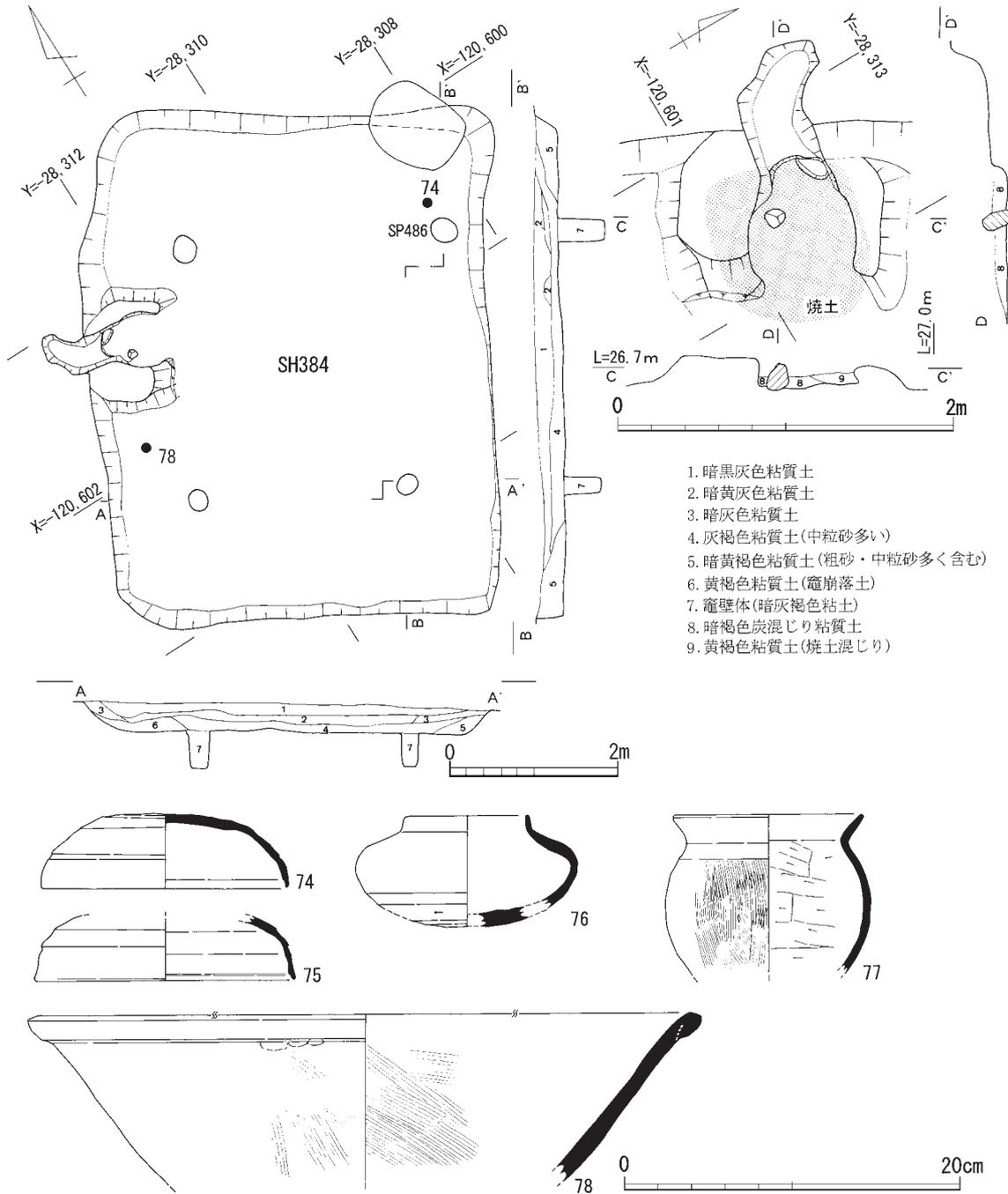


第14図 竪穴式住居跡S H380実測図、出土遺物実測図

る。口縁部は回転ナデ、72の外表面は粗いハケ目調整、内面はヘラ削りを施す。口径12.2cmである。73は口径18cmを測る。

竪穴式住居跡S H384(第15図、図版第7・8) トレンチ中央部付近で検出した住居跡で、北東角と南西角を結ぶ住居南側1/2を溝S D369により削平される。住居跡の規模は、北西辺6.2m×北東辺4.6m、深さ0.44m、主軸方向はN56°Wである。支柱穴は住居角付近よりやや内側の4か所で検出した。柱穴の規模は直径0.3~0.4m、深さ0.55~0.68mを測り、検出した住居跡中最も深いものである。周壁溝は設けられていない。竈は、住居北西辺の中央部に付く。本体の規模は、両焚口間の内法が58cm、高さ28cm、長さ1mを測る。燃烧部は平坦で炭が堆積し、中央に支脚が1石立つ。煙道部は全長0.7m、住居外側に約0.55m延びている。

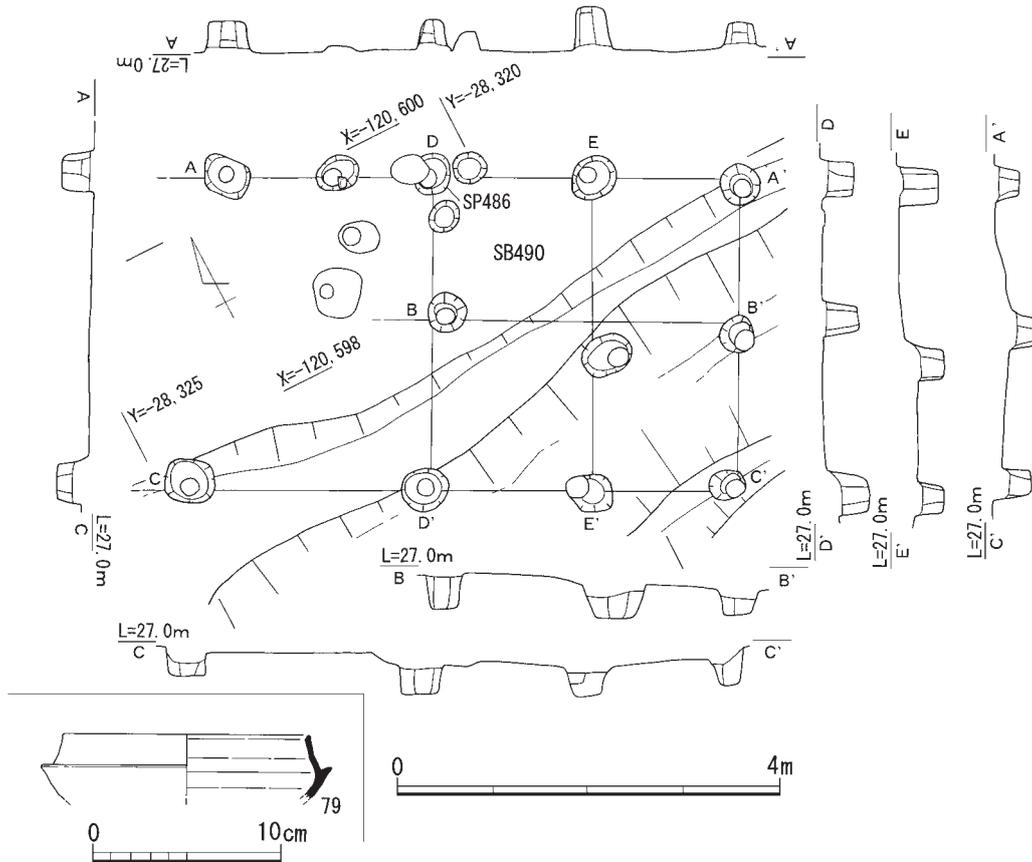
出土遺物(第15図・図版第17)には、埋土中より75~77が、竈付近から78が出土し、住居東端より74が出土した。74・75は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。74は口径14.5cm、器高4.5cmを測る。杯蓋の形態から、住居の時期は陶邑編年TK10併行期と考えられる。76は須恵器短頸壺である。77は土師器甕で、竈内の焚き口付近より出土した。球形の体部と「く」字状に屈曲する口縁部からなる。体部外面は縦方向のハケ目調整、内面はヘラ削りを施す。78は土師器鉢と考えられるもので、口縁端部を肥厚させ、内外面とも粗いハケ目調整を施す。



第15図 竪穴式住居跡SH384実測図、出土遺物実測図

掘立柱建物跡SB490(第16図、図版第8) 調査地中央のトレンチ北西寄りの溝SD369の下層より検出した。桁行2間分(3.2m)×梁間2間(3.3m)の総柱建物である。北東側と南西側に桁行1間分西側に延びており、それぞれ柱間2.2m、2.5mを測る。主軸方向はN62°Wを測る。倉庫と考えられる。柱間は桁行が1.7・1.6m、梁間が1.5・1.9mである。柱掘形は直径0.4~0.5m、深さ0.35~0.45mを測る。柱穴SP486より須恵器杯身(79)が出土した。

出土遺物(第16図)には、須恵器杯身79がある。口縁部は内上方に高く立ち上がる。掘立柱建物跡の時期は、陶邑編年TK10併行期と考えられる。

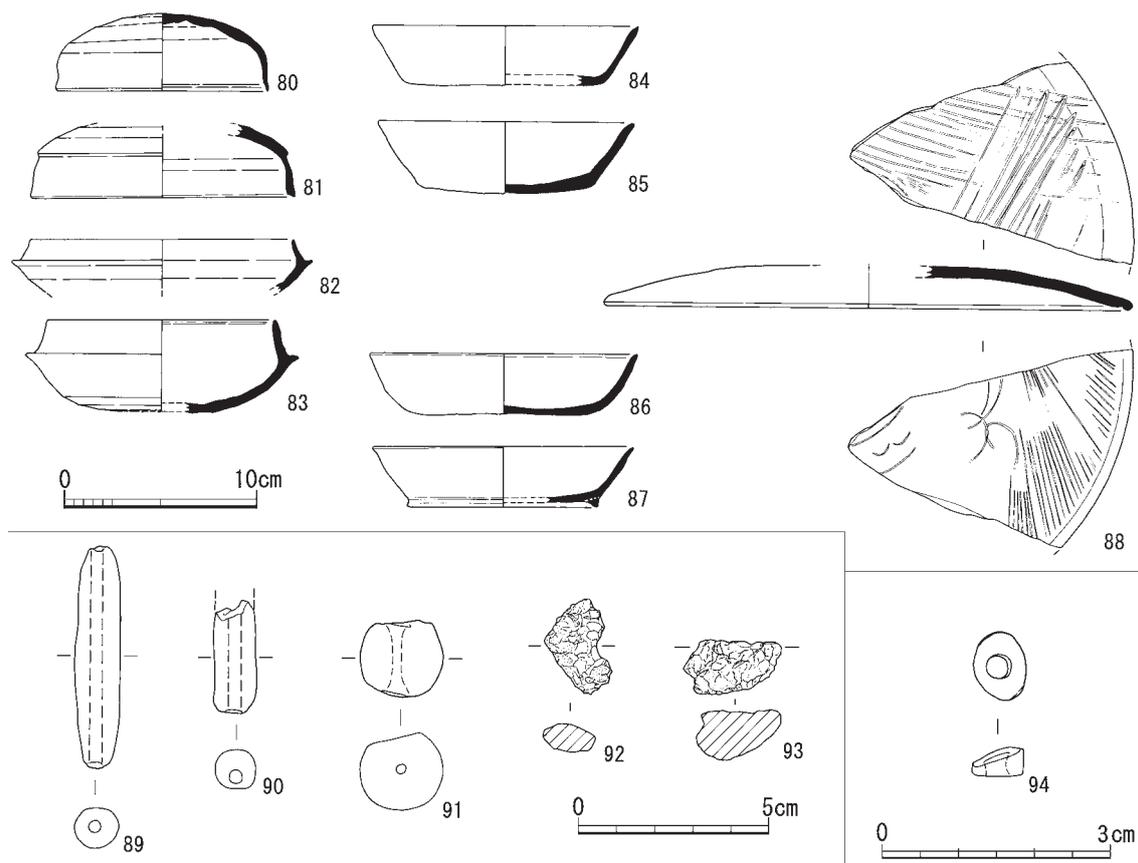


第16図 掘立柱建物跡S B 490実測図、出土遺物実測図

柱穴・包含層出土遺物(第17図、図版第17・18) 柱穴は数多く検出されたが、図化できる遺物が出土したものは少なかった。包含層出土遺物には、瓦・土馬・石器・石製品・金属製品・鍛冶生産関連遺物などがある。84・85・88は柱穴S P 349、86はS P 392、87は柱穴S P 365より出土した。84・85は須恵器杯Aである。底部から口縁部が屈曲して立ち上がる。85は口径13.4cm、器高3.8cmを測る。88は、土師器蓋である。内外面に暗文を施す。いずれも柱穴S P 349より出土した。86は、土師器杯である。全体が磨滅しているが口径13.9cm、器高4.2cmを測る。87は土師器杯Bである。口径13.6cm、器高3.2cmを測る。いずれも、長岡京期と考えられる。

80～83、89～94は包含層中より出土した。80・81は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。80は口径11.0cm、器高4.1cmを測る。杯身・杯蓋の形態から、これらは陶邑編年TK10～43併行期と考えられる。89～91は土師質の土錘である。いずれも焼成は良好である。完形の89は長さ4.9cm、最大幅1.2cm、重さ8.4g、91は最大径2.2cm、重さ9.4gを測る。92・93は、気泡が多く開いた炉壁の一部と考えられるもので、鉄分をほとんど含まずガラス質が残る。94は碧玉製の玉で、径7～9mmの楕円形を呈し、片側が斜めに切断・研磨されており、厚さ1.5～4mmを測る。両側穿孔である。重さ0.3g。縄文時代の遺物であろう。

2) 下層の遺構と遺物(第18図)

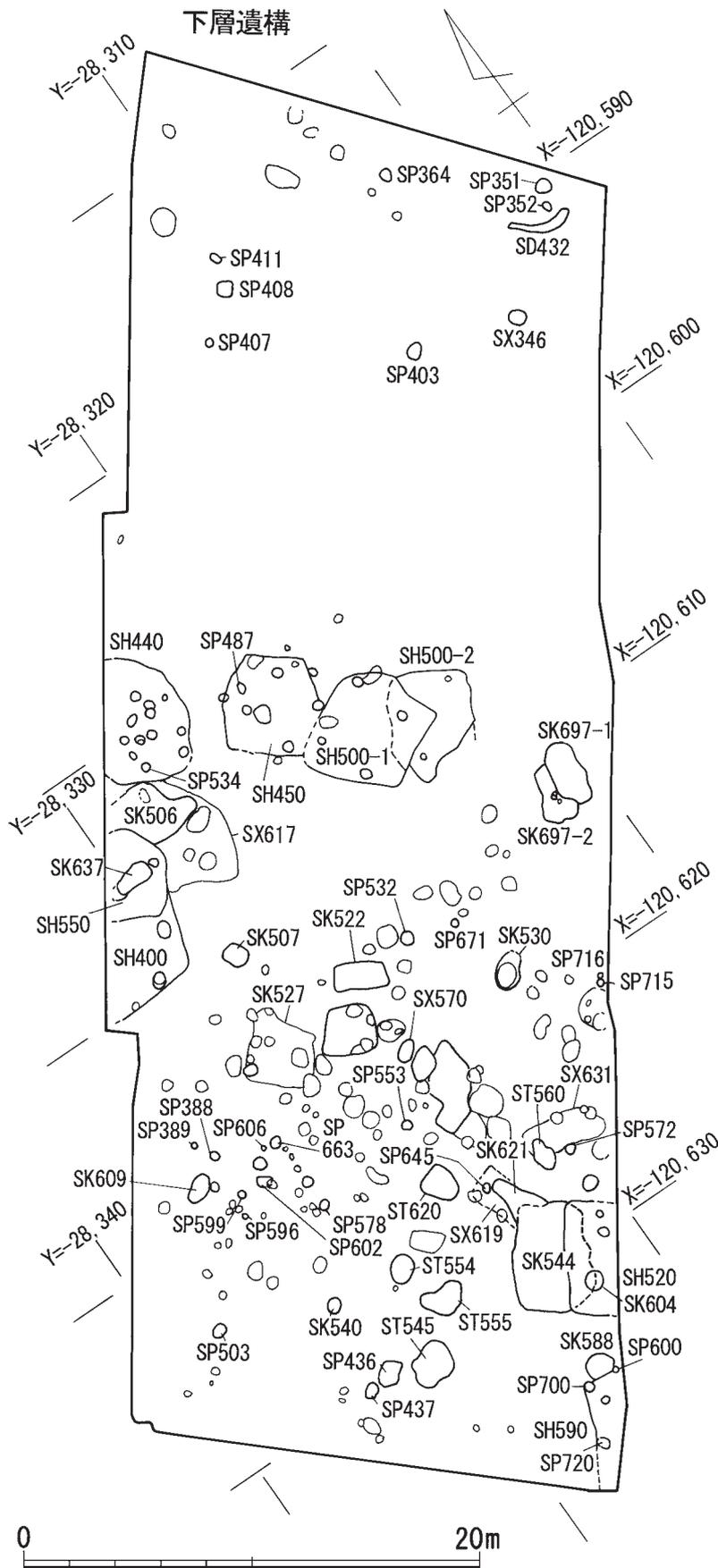


第17図 柱穴・包含層出土遺物実測図

(1) 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡 S H500-1・2(第19図、図版第9) トレンチ中央部で検出した竪穴式住居跡で、3基が重なり合っている。いずれも不整形な平面形をなし、住居跡南側の一部は上層遺構である溝 S D369に削平されている。竪穴式住居跡 S H500-1は、竪穴式住居跡 S H450とも切り合い関係を持ち、最も新しい住居跡となる。方形に近い平面形を持ち北東辺約4.4m、北西辺4.5m、南西辺4.6m、南東辺4m、深さ0.15mを測る。支柱穴は4か所確認した。柱穴の規模は直径0.4~0.5m、深さ0.16~0.3mを測る。住居西側の床面が赤色に被熱を受けており、炉等の存在が想定される。主軸方向は、北東辺側の柱穴2か所を結ぶ線からするとN22°Wである。埋土中より、小片化した縄文土器(24)とともに石鏃1点(333)、楔形石器1点(403)、石斧片1点(464)、剥片等が30点出土した。

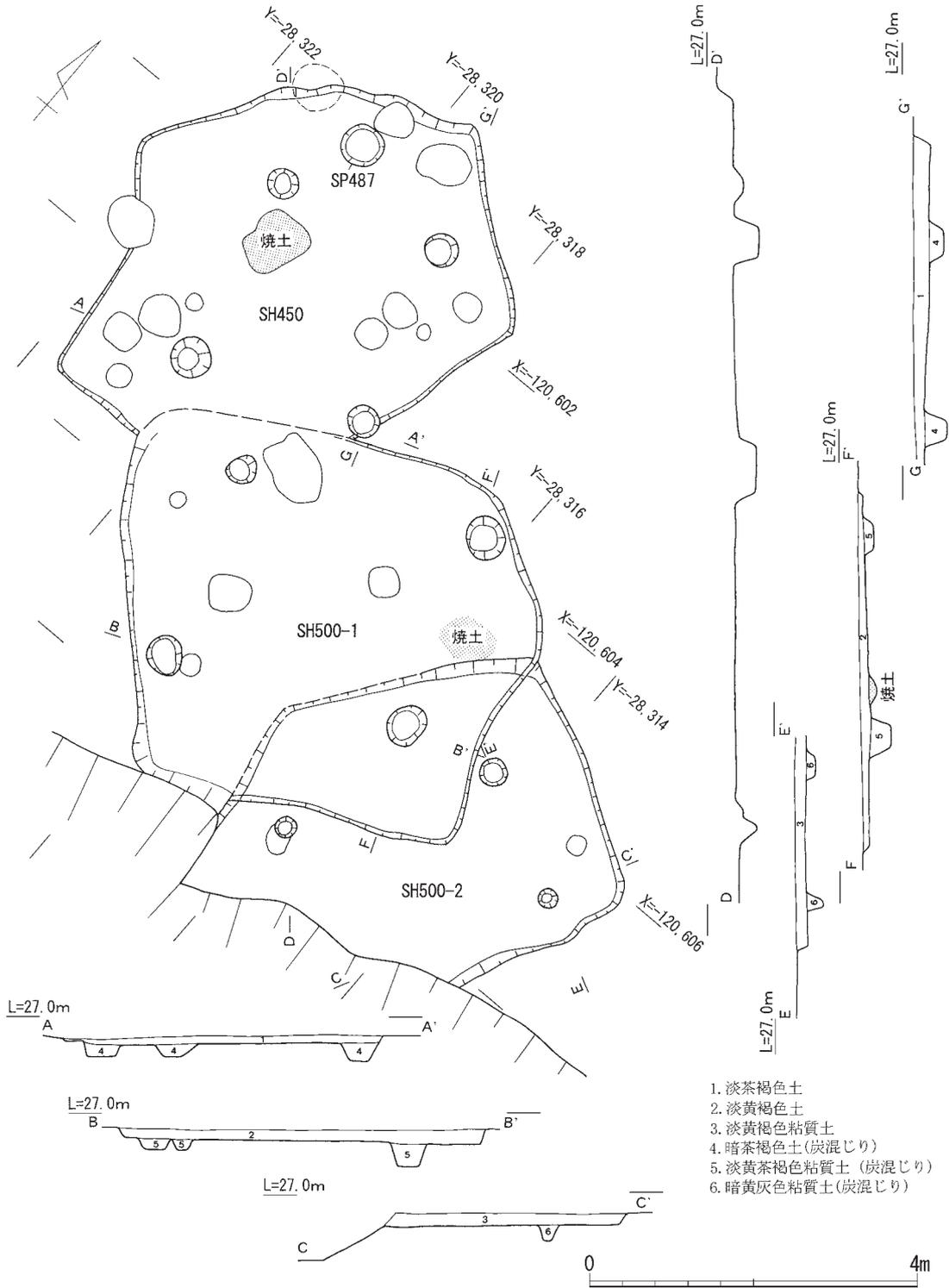
竪穴式住居跡 S H500-2は、五角形に近い平面形となり、長軸約5m以上、短軸3.8m前後、深さ0.15mの規模が復原される。床面からは支柱穴が3か所確認できた。柱穴の規模は直径0.26~0.36m、深さ0.15~0.24mを測る。主軸方向は、東辺側の柱穴2か所を結ぶ線からするとN65°Wである。住居中央付近の床面が赤色に被熱を受けており、炉の存在が想定される。埋土中より、縄文土器深鉢(23)とともに石鏃片1点(A-29類)、チャート剥片1点(440)、サヌカイト剥片(441など)45点が出土した。



第18図 下層遺構平面図

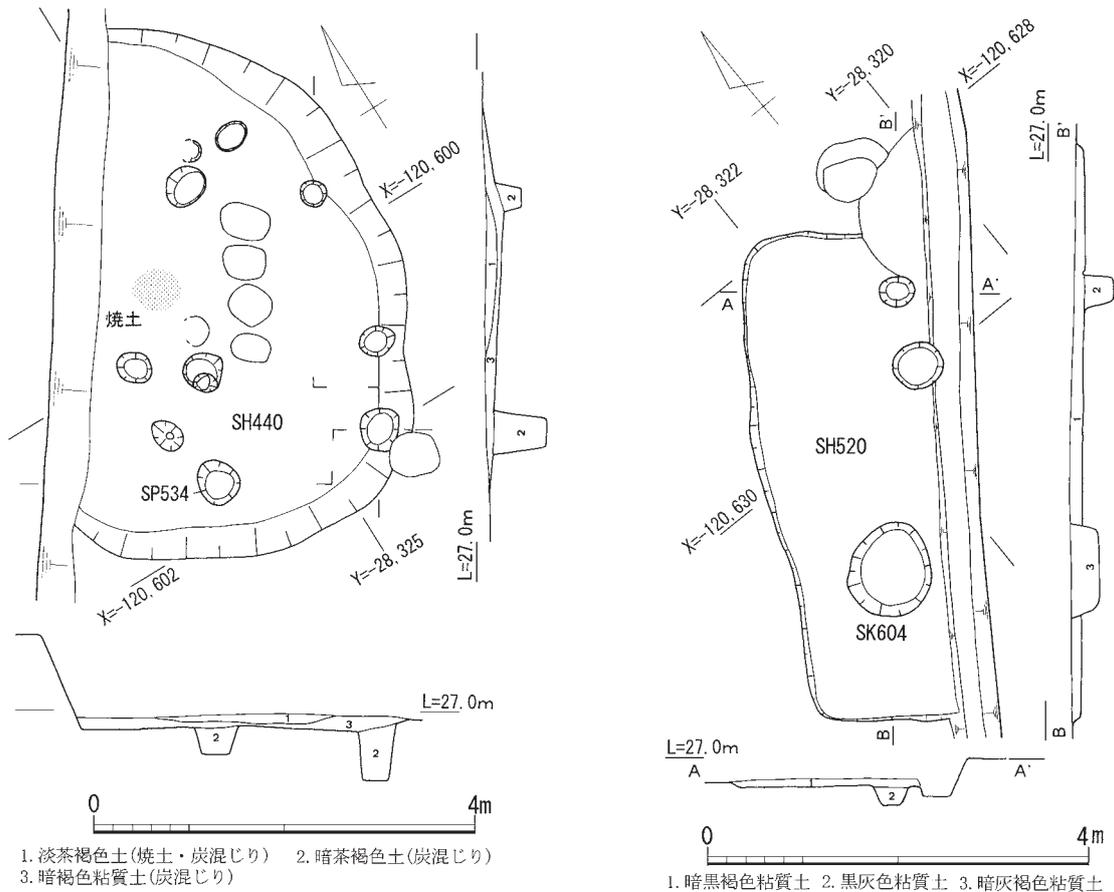
竪穴式住居跡 S H450 (第19図、図版第9) 竪穴式住居跡 S H440の東側、竪穴式住居跡 S H500-1と切りあい関係を有し、竪穴式住居跡 S H500-1に先行する。不整形な六角形状をなしており、長軸5.3m、短軸4.2m程の規模が推定され、深さ0.25mを測る。床面からは支柱穴と考えられる柱穴4か所を確認した。柱穴の規模は直径0.4~0.5m、深さ0.18mを測る。主軸方向は、北東辺側の柱穴2か所を結ぶ線からするとN18°Wである。北東側の柱穴付近の床面で、方形に80cm×60cm、深さ30cmで掘り込まれた炭混じりの焼土が入った土坑があり、炉の存在が想定される。土坑 S P487より無文鉢(151)が出土した。埋土中より、小片化した縄文土器とともに石鏃(A-12類)1点、剥片6点が出土した。

竪穴式住居跡 S H440 (第20図、図版第10) トレンチ中央西壁で検出したもので、住居跡の約1/2が調査地外になる。楕円形ないし隅丸方形をなす



第19図 竪穴式住居跡SH450・500-1・2実測図

と考えられ、レンズ状に約30cm掘り込まれる。トレンチ北東壁で幅5.4mを測る。主軸方向N32°Eである。内部埋土は2層からなり上層は、焼土・炭に混じって縄文土器深鉢・広口深鉢(1~12)や石鏃4点(228・334、A-28類1点、B-1類1点)、石錐未成品1点、楔形石器5点(395・407・412・429・430)、楔形石器剥片1点(424)、貝殻状剥片2点(436・438)、石核2点、削器1点、台石1点(502)、敲石1点(466)など、石器製作に伴うと考えられる遺物が出土した。下層か



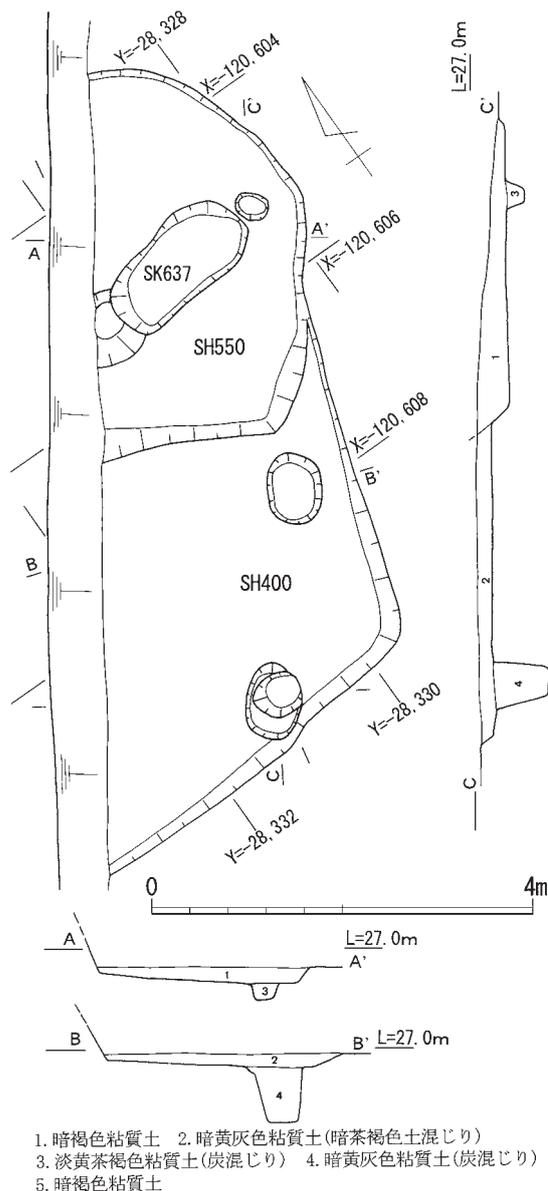
第20図 竪穴式住居跡SH440・520実測図

らは、少量の縄文土器が出土した。

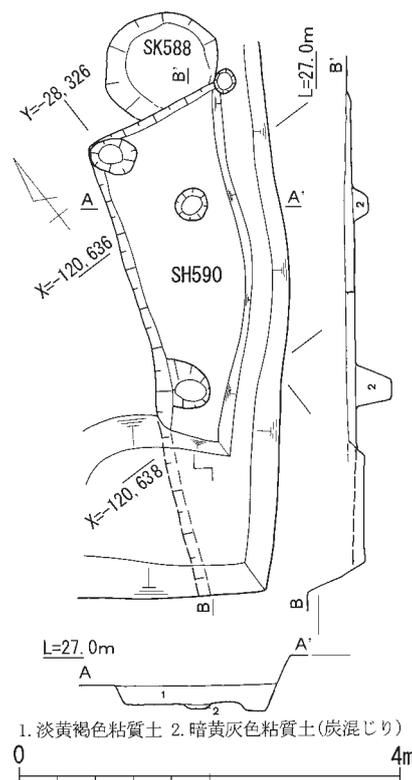
竪穴式住居跡SH520(第20図、図版第11) トレンチ南側の南東壁で検出した。住居跡の大半が調査地外となる。検出できた部分で見る限り方形の平面形をなす。住居跡の規模は不明であるが北西辺5.1m、南西辺1.8m、北東辺トレンチ壁側は土坑に削平されるが1.2mを検出した。深さ0.1mを測る。主軸方向は、住居北西辺でN29°Eである。主柱穴は、北東辺寄りで1か所確認したが、南西辺側では土坑SK604に削平されたか、トレンチ壁寄りに設けられている可能性もある。埋土中より、縄文土器(25)とともに削器(369)、剥片13点が出土した。

竪穴式住居跡SH550(第21図、図版第10) 竪穴式住居跡SH440の南西側のトレンチ中央西壁で検出したもので、住居跡の約1/2が調査地外になる。不整形な方形をなすと考えられ、残存部分の幅4.15m、深さ0.2mを測る。主軸方向は不明である。主柱穴を東辺寄りで1か所検出した。柱穴は楕円形を呈し、長径約0.33m、深さ0.2mを測る。埋土中より縄文土器(16~19)とともに石鏃片2点(A-31類、B-1類)、敲石1点(486)、剥片34点が出土した。また、住居中央部には、埋没後に新たに掘削された土坑SK637と切り合い関係を持ち、縄文時代後期の中でも竪穴式住居跡と土坑の2時期の遺構が存在することが明らかとなった。

竪穴式住居跡SH400(第21図、図版第10) 竪穴式住居跡SH550の下層で検出したもので、竪穴式住居跡SH550に先行する。住居跡の約1/2が調査地外になるとともに、北側は竪穴式住居



第21図 竪穴式住居跡 S H 400・550実測図



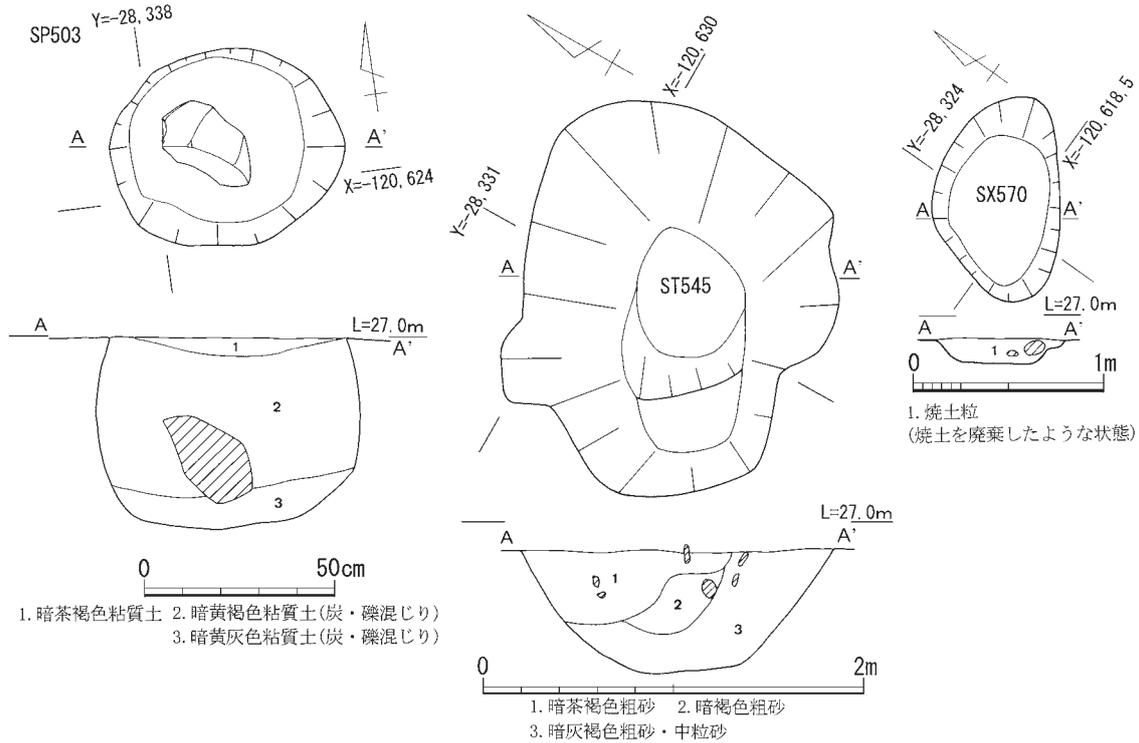
第22図 竪穴式住居跡 S H 590実測図

跡 S H 550に削平される。不整形な方形をなすと考えられ、一辺5.5m前後の規模が想定される。深さ0.2mを測り、主軸方向はN29°Eである。主柱穴は南辺の側壁を掘り込んで1か所、土坑 S K 637の西側で1か所を確認した。柱穴の規模は直径0.5~0.8m、深さ0.19~0.6mを測る。内部の埋土中より縄文土器(20~22)とともに石鏃3点(246・271・315)、剥片16点が出土した。

竪穴式住居跡 S H 590(第22図、図版第11) トレンチ南端の南東壁で検出した。北側の土坑 S K 588に切り勝つ。住居跡の大半が調査地外となる。検出できた部分で見限り方形の平面形をなす。住居跡の規模は不明であるが北西壁で5 m、北東壁で1.9m、深さ0.16mを確認した。主軸方向は住居北西辺でN19°Eである。住居北角付近から主柱穴と考えられる柱穴1か所を検出した。柱穴の規模は直径0.32m、深さ0.17mを測る。埋土中より小片化した縄文土器が出土した。

(2) その他の遺構

調査中は遺構名を表面観察から、土坑(S K)・墓(S T)・柱穴(S P)・不明遺構(S X)として掘削し、遺物の取り上げを行ったが、掘削が終了する段階では名称と合致しないものが多々出てきた。大半のものは土坑であるが、当初の遺構名のまま使用している。これらの土坑には、焼土



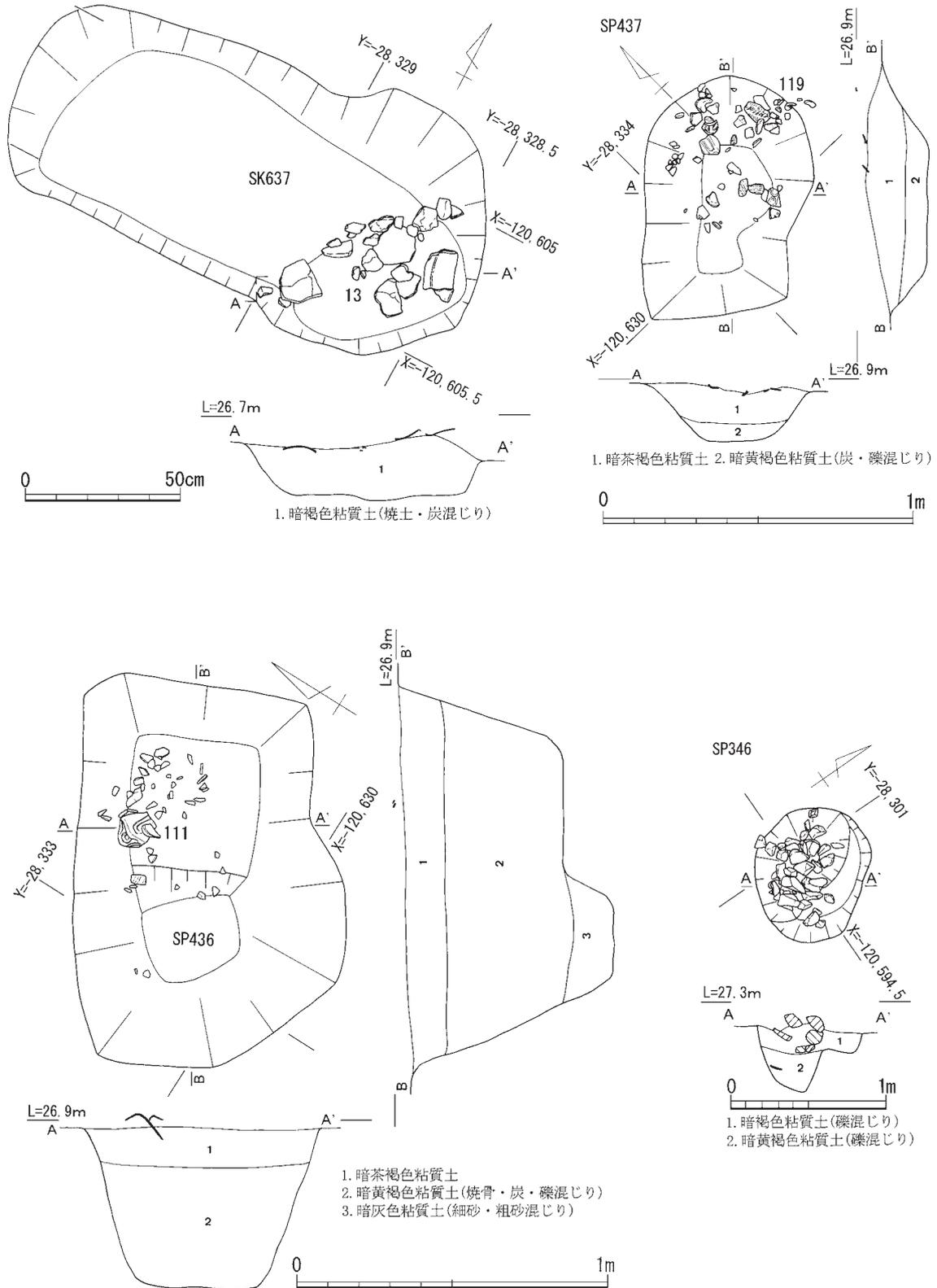
第23図 土坑 S P 503、墓 S T 545、不明遺構 S X 570実測図

が入るもの、焼土・炭混じりのもの、これらとともに、焼骨が混じるもの、礫が充填されたもの、土器が入るものなど様々な土坑が認められた。これらは、大きさ・平面形の違いなどがあるが、代表的なものに説明を加える。

不明遺構 S X 570 (第23図) 土坑 S K 662の北側で検出した。楕円形を呈し長径1.1m、短径0.7m、深さ0.15mを測る。竪穴式住居跡 S H 450内の炉の痕跡と似ている。焼土により内部が詰まった状態ではなく、焼土粒と木炭粒が埋土に混在しており、ここで火を使用したというよりも、焼土を廃棄したものと考えられる。これらに交じって、敲石1点(465)、削器1点(371)が出土している。石器製作にかかわる遺構とも考えられる。

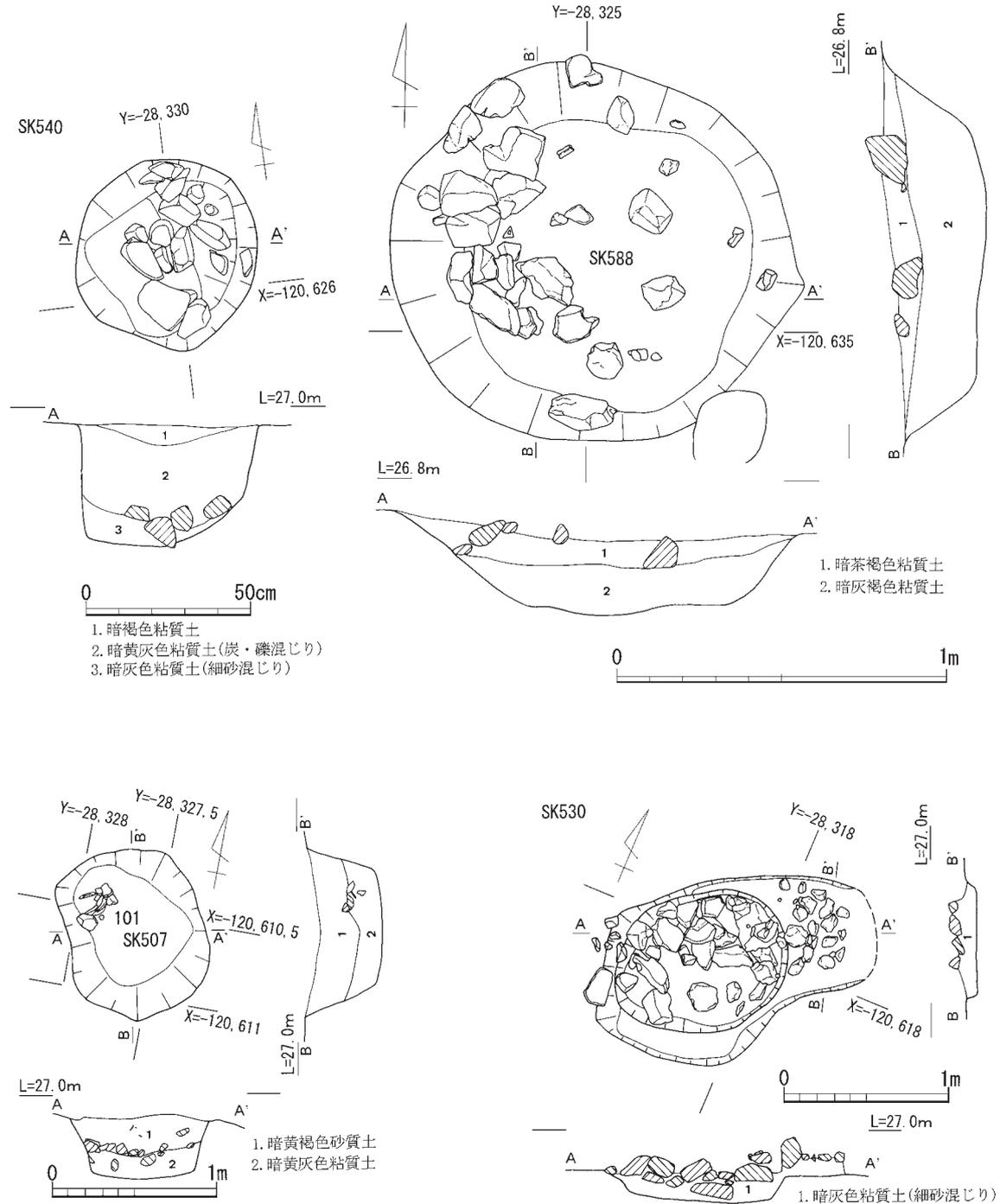
土坑 S K 637 (第24図) トレンチ中央、北西壁の竪穴式住居跡 S H 550と切り合う。西側拡張部においてその延長部を確認したが、土坑西端部分は竪穴式住居跡 S H 400の柱穴に先行し、最も新しい遺構となる。隅丸長方形の平面形を呈し、長辺1.65m、短辺0.8m、深さ0.19mを測る。検出面付近において多くの縄文土器深鉢・注口土器(13~15)が集中して検出された。土器の出土は底に向かうほど少なくなり、底面では全く出土しなかった。埋土中からは、焼土が検出されたが焼骨は認められなかった。

柱穴 S P 437 (第24図、図版第13) トレンチ南端、土坑 S P 436の西側で検出した。平面形は土坑 S P 436を少し小さくした同様の形態をなす。長辺1.6m、短辺0.9m、深さ0.4mを測る。検出面付近において多くの縄文土器深鉢(118~127)が集中して検出された。土器の出土は底に向かうほど少なくなり、底面では全く出土しなかった。埋土中からは焼土・焼骨・サヌカイト剥片の出土は認められなかった。



第24図 土坑S K637、柱穴S P437・436、不明遺構S X346実測図

柱穴S P436(第24図、図版第13) トレンチ南端、土坑S P437の東側で検出した。長方形に近い平面形を呈し、長辺1.25m、短辺0.75m、深さ0.53mを測る。検出面付近において多くの縄文土器深鉢(111~117)が集中して検出されたが、土器の出土は底に向かうほど少なくなり、底面



第25図 土坑SK507・530・540・588実測図

では全く出土しなかった。中位付近において、径5～6mm程度から数mm程度の細かい焼骨片が出土した。埋土中からは石鏃1点(237)が出土した。

不明遺構SX346(第24図、図版第15) 竪穴式住居跡SH340の南側で検出した。平面形は楕円形を呈し、長径0.9m、短径0.75mを測る。北東側の深さは0.15mであるが、南西側はさらに、長径0.7m、短径0.5mにわたり、深さ0.3m掘り下げる。検出面から一段目の掘形底面までは、拳大の角礫を中心に円礫や被熱し赤化・黒化した礫が検出された。これらの礫とともに、少量の縄

文土器無文深鉢(77)と石鏃片1点(A-39類)、剥片59点が出土した。石器製作に伴う廃棄土坑の可能性もある。

土坑 S K 540(第25図、図版第15) 土坑 S P 436の北側で検出した。円形を呈し、直径0.55～0.6m、検出面からの深さ0.38mである。底面近くで5～15cmほどの角礫が集中して検出された。礫検出面付近からは、径5～6mm程度から数mm程度の細かい火葬骨片が出土した。埋土中からは、少量の縄文土器深鉢(140)が出土した。

土坑 S K 588(第25図、図版第16) 竪穴式住居跡 S H 590と切り合い、時期的に先行する。直径1.2m、深さ0.32mを測る。検出面において、鶏卵大～15cm程の角礫を主体として河原石、部分的に被熱した石の集中を検出した。これらの石材は底面までは認められず、浮いた状態となっている。埋土中から縄文土器広口深鉢(142)とともに石鏃1点(329)が出土した。

土坑 S K 507(第25図、図版第13) 竪穴式住居跡 S H 400の東側で検出した。隅丸長方形の平面形を呈し、長辺1.05m、短辺0.8m、深さ0.4mを測る。検出面では細片化した縄文土器が出土し、中位付近からは比較的大きな浅鉢破片の出土(101・102)をみた。中位とこれより下層は明確に土層が異なり、境目には多くの河原石の堆積が認められた。下層からは、遺物の出土は認められない。埋土中より削器1点、サヌカイト剥片3点が出土した。

土坑 S K 530(第25図、図版第16) 土坑 S K 697-1・2の南西側より検出した。長楕円形を呈し、長径1.7m、短径1.1m、深さ0.2mを測る。土坑西寄りにはさらに長径1.1m、短径0.8m、深さ0.15m掘り下げる。東側の一段目掘形検出面には拳大～15cmほどの角礫を中心に河原石混じりの礫が検出された。西寄りの一段下がる部分には検出面から底面まで20～30程の角礫が集中していた。これらの礫の中には部分的に被熱した礫が認められる。埋土中からは、少量の縄文土器と楔形石器1点、剥片(5mm以下4点、5mm以上18点)が出土した。

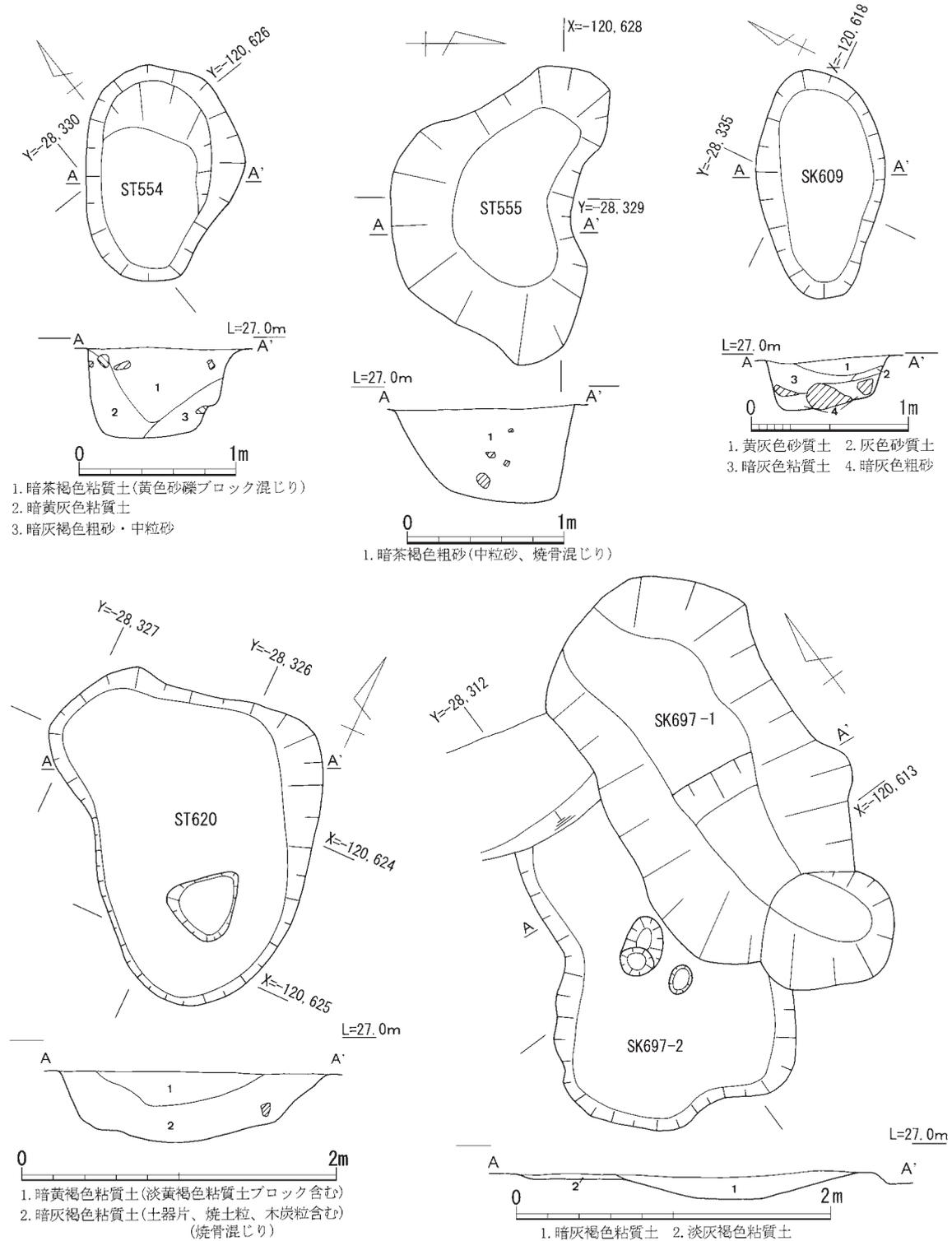
土坑 S P 503(第23図、図版第16) トレンチ西角付近で検出した。円形を呈し、直径52～63cm、深さ0.5mを測る。土坑底面から中位付近にかけては、全体が袋状になっている。底面近くで30×17cm程の角礫をほぼ立位で検出した。埋土中からは、縄文土器浅鉢・深鉢・広口深鉢(105～110)、チャートの剥片1点、黒曜石の剥片1点、サヌカイト剥片27点が出土した。

墓 S T 545(第23図、図版第14) トレンチ南端の土坑 S P 436の東側で検出した。いびつな楕円形を呈し、長径2.1m、短径1.65m、深さ0.65mを測る。南西側がやや浅く中央部が一段深くなる。埋土中より細片化した縄文土器深鉢・広口浅鉢・注口土器(86～93)とともに石鏃1点(A-18類)、サヌカイト剥片1点が出土した。

墓 S T 554(第26図、図版第14) 墓 S T 555の北側で検出した。楕円形を呈し長径1.4m、短径1m、深さ0.6mを測る。埋土中より細片化した縄文土器が出土した。

墓 S T 555(第26図) 墓 S T 545の北東側で検出した。隅丸三角形の平面形を呈する。長辺1.9m、短辺1.2m、深さ0.65mを測る。埋土中より細片化した縄文土器深鉢(78～85)とともにサヌカイト剥片4点が出土した。

土坑 S K 609(第26図) トレンチ南端近くの北西壁寄りで検出した。楕円形を呈し、長径1.5m、



第26図 墓 S T 554・555・620、土坑 S K 609・697-1・2 実測図

短径0.85m、深さ0.35mを測る。中央部底面近くより角礫・河原石が出土した。埋土中より細片化した縄文土器とともに、サヌカイト剥片が1点出土している。

墓 S T 620(第26図、図版第14) 墓 S T 554の北東側で検出した。楕円形を呈し、長径2.2m、短径1.5m、深さ0.47mを測る。底面近くより極少量の焼土とともに、径5~6mm程度から数

mm程度の細かい焼骨片が出土した。埋土中からは、サヌカイト剥片3点、少量の縄文土器深鉢(62～69)が出土した。同様な焼骨を出土した土坑としては、柱穴S P 436、墓S T 560、土坑S K 697-1がある。土坑S K 637からは焼土が検出されたが焼骨は認められなかった。

土坑S K 697-1(第26図) 竪穴式住居跡S H 500-2の南側で検出した。長楕円形を呈し、長径2.5m、短径1.4m、深さ0.13mを測る。底面近くより極少量の焼土とともに、径5～6mm程度から数mm程度の細かい焼骨片が出土した。埋土中より縄文土器(95～99)とともに石鏃3点(225・335、A-9類)、削器1点(372)、敲石1点(474)、剥片2点が出土した。

(増田孝彦)

(3) 出土遺物

① 縄文土器

8トレンチでは、おもに中期末の北白川C式、後期後葉の元住吉山Ⅱ式～宮滝式の遺物が出土した。遺構出土遺物の掲載になるべく努めた。

a. 住居跡出土土器(第27図、図版第18・19)

S H 440 1～3は口縁部が内折し外反する深鉢。口端部直下と内折している部分に凹線が施文される。宮滝式。4は深鉢胴部。5は無文の広口深鉢である。6は内面に一本沈線をもつ広口深鉢。7は太い多条の沈線が描かれ、沈線の端に刺突状の文様が施される。8は横位に多重の沈線をもつ。内湾した口縁をもち浅鉢と考えられる。9は口縁下に細い多条の平行沈線を描き、沈線間を櫛目状の文様と蛇行沈線が描かれている。注口土器と考えられる。10は口縁部が「く」字状に内屈する浅鉢。細い3条の沈線が横位に描かれる。主文様部は摩滅のためやや不明瞭であるが、蛇行沈線が描かれ周囲に6つの刺突が施されている。11は算盤形の器形をし、多条の沈線と蛇行沈線で描かれており、文様意匠から加曾利B1式のものと考えられる。12は底部である。宮滝式と加曾利B式は併行関係になく全体としてやや時期に幅があると考えられる。

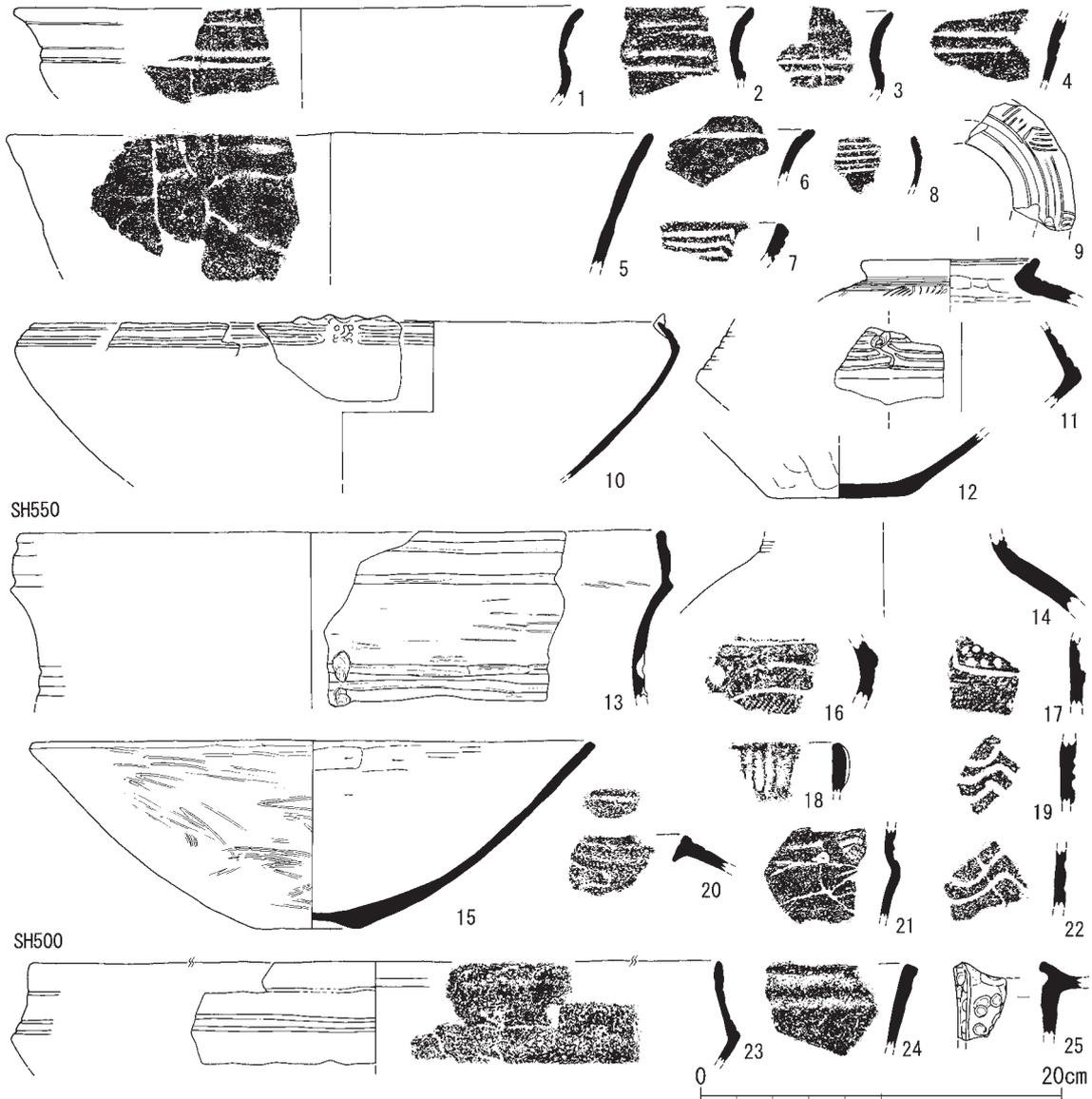
S H 550 凹線文土器期の遺構であるが、資料化する土器片は出土しなかった。一部中期の土器の混入が見られた。16～19は中期末北白川C式の体部片である。

S K 637 13は屈曲部をもつ深鉢である。口縁部に間隔を置いた2条の凹線を描き、胴部にも凹線文様帯をもつ。中心に巻貝の側面を斜位に刺突した文様が施される。器面は巻貝調整後ナデで仕上げられている。14は注口土器。文様意匠の様相から元住吉山期のものと考えられる。15は無文の浅鉢。口縁端部が面取りされ器面は巻貝条痕を強く残す。

S H 400 凹線文土器を中心とした遺構である。20は注口土器。摩滅しているが、口縁に2条の沈線と蛇行沈線で文様が描かれる。21は深鉢の頸部から胴部にかけての破片であり、巻貝扇状圧痕文と刺突文が施される。宮滝式である。22は深鉢の胴部片であり、2条以上の波状文が描かれる。中期末のもので混入したものと考えられる。

S H 500 凹線文土器を中心とした遺構である。23は口縁部が屈曲しやや外反する深鉢である。内面の摩滅が著しい。24は口縁に2条の凹線の巡る広口深鉢である。

S H 520 25は山形の口縁をもつ土器の口縁部片である。丸い棒状工具による刺突によって文



第27図 出土遺物実測図(1) 縄文土器

様が描かれている。中期末北白川C式と考えられる。

b. 遺構出土遺物(第28・29図、図版第18~21)

a) 土坑出土遺物(中期)

S K 544 北白川C式を中心とした遺構である。26・27・29は口縁部文様帯を隆帯で囲む土器である。26は多重の区画文を主文様としている。28は口縁部と胴部の境が外側へ肥厚し、さらに沈線で口縁部と胴部を区画し、縄文を充填している。また胴部には波状文が描かれる。32~37は口縁部から一段下がったところに文様帯をもつ土器である。32は隆帯と刺突文により区画が描かれる。33・34・36は隆帯によってのみ楕円形区画文が構成され沈線は描かれない。35は口縁部から一段下がったところに凸帯をもつものである。凸帯下は2重の「U」字状の文様が描かれる。38~43は山形口縁をもつ土器である。38は「く」字状に口縁が内屈し沈線で文様が描かれる。39は小さな渦巻文が描かれる。40・42・43は沈線によって文様が描かれる。41は棒状工具による刺



第28図 出土遺物実測図(2) 縄文土器

突列によって文様が描かれている。44は口縁部が沈線と刺突文のみによって構成されている土器である。45・46は口縁部が肥厚する土器である。47は「く」字状に内屈し口縁部文様帯をもつ浅鉢の体部片である。口縁部に羽状沈線が充填されている。48は無文の浅鉢と考えられるが口縁と胴部の間に段をもちやや外反するような器形を呈している。49～52は深鉢の体部片であり、円形の区画文あるいは渦巻状の沈線で描かれる。53は底部である。54は凸帯をもつ土器であり、晩期まで時期が下る可能性がある。

S K 621 北白川C式を中心とした遺構である。55・56は口縁部文様帯を隆帯で囲むものである。55は口縁部文様帯が羽状沈線で充填されるが、主文様をもたない。56は口縁部文様帯が2重の区画となっている。57は口縁部から一段下がったところに隆帯による文様帯をもち、斜刻線を充填する。58・59は山形の口縁をもつものである。沈線と円形の区画文によって描かれる。60・61は口縁部が肥厚する土器である。縄文が施されている。

S T 620 北白川C式を中心とした遺構である。62は波状口縁をもつ深鉢である。口縁は内屈しており口縁に沿って2条の沈線が描かれ主文様に多重の円形区画文をもつ。63は沈線で円形の主文様と長方形の区画文を描く深鉢である。65は押し沈線で口縁部文様帯を描く。口縁部がやや肥厚する。66は口縁部一段下がった所に隆帯をもつ。隆帯から垂下沈線を描く。67は磨消縄文で文様が描かれる土器である。64は口縁部が肥厚し、縄文が施される土器である。68・69は深鉢底部で中期末と考えられる。

S X 619 70は浅鉢口縁部片である。細い多重の沈線で主文様が描かれ、その周辺がやや隆起する。71・72は深鉢体部片である。71は縦方向に楕円形の区画をもった文様が描かれている。

b) 土坑出土遺物(後期)

S X 346 77は無文深鉢。巻貝条痕によって内外面が調整されている。後期のものと考えられる。

S K 506 73は無文の広口鉢。口縁部に粘土塊が貼り付けてある。74・75は底部。76は注口土器。細い沈線で文様が描かれている。後期後葉のものと考えられる。

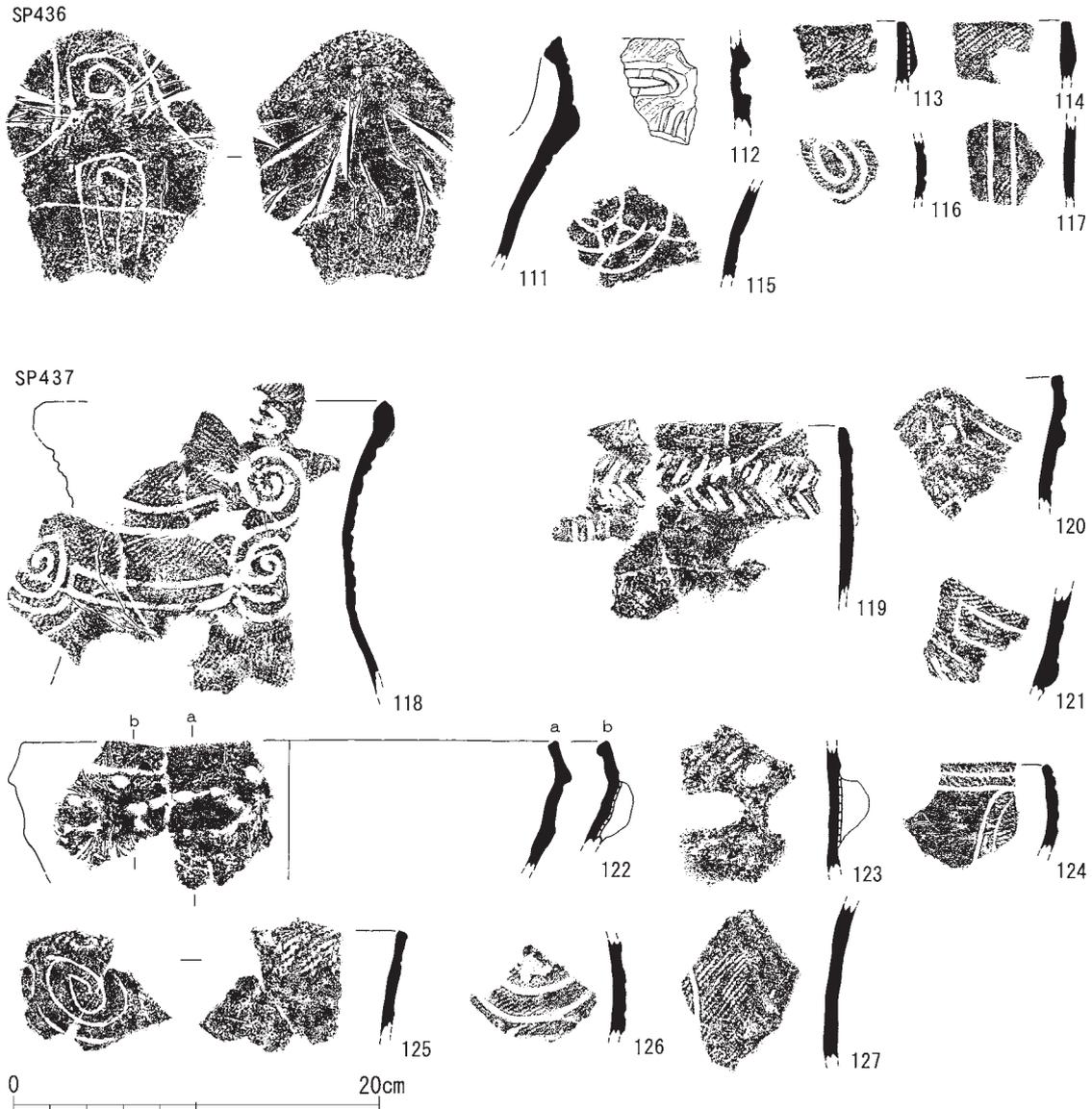
S T 555 凹線土器を中心とした遺構である。78は多条の凹線をもつ広口深鉢である。79～81は深鉢体部片。79は巻貝による圧痕文をもつ。81は上弦の連弧文をもち元住吉山I式の特徴をもつ。82は無文広口深鉢で内面に一本沈線を施す。83は胴部に棒状工具を押し当てた把手をもつものである。84は胴部屈曲部に巻貝による扇状圧痕文をもつ。85は底部である。

S T 545 元住吉山I・II式を中心とする遺構である。86は口縁部2条の凹線を施し内面1本沈線を描く広口深鉢。87は内屈口縁深鉢で3条の凹線をもつ。88は深鉢胴部片。2条の沈線間に二枚貝を押し捺した擬縄文が施される。元住吉山I式。89は波状口縁深鉢の波頂部。元住吉山I式。90は無文広口鉢。91は口縁部が外反するもの。頸部は沈線が描かれていることから、屈曲するものと考えられる。92は注口土器片。斜刻帯や刺突により文様が描かれている元住吉山I式の特徴をもつものである。93は渦巻文を胴部に描くものである。

94は口縁部から一段下がったところに凸帯をもつものである。胴部には垂下沈線が描かれる。



第29図 出土遺物実測図(3) 縄文土器



第30図 出土遺物実測図(4) 縄文土器

北白川C式ものと考えられる。

S K 697-1 中期末の土器と後期の土器が混在していた。95は口縁部文様帯を隆帯で囲むもの。96は口縁部から一段下がったところに隆帯と沈線による楕円区画文をもつ土器である。97は深鉢胴部。98・99は後期凹線文土器。100は凸帯をもつ土器である。

S K 507 101は太い沈線で多重の区画文が描かれた土器である。一般的な北白川C式の土器よりもかなり太い沈線で描かれ、文様意匠もことなることから九州の阿高式の系譜をもつものと考えられる。中期後葉に位置づけられる。同様の器形の土器は中津式にも存在するが、口縁に1本の沈線をもたないことから中津式とは違う系統の土器であると考えられる。102は後期後葉の宮滝式期のものと考えられる。精製された浅鉢である。混入したものと考えられる。

S P 503 多時期にわたって遺物が出土した。105は北白川C式の無文浅鉢の把手。104は北白川C式深鉢の胴部。103は口縁部区画文をもちまた小さな「J」字状の沈線が描かれ、縄文が充填

される。中津式。106は広口深鉢。口縁内面に一本の沈線が巡る。107は凹線文土器の胴部で、「レ」字状凹線が巡る。108は口縁部が内屈し、凹線を施すもので、浅鉢と考えられる。109は内屈した口縁を有する深鉢である。110は外面が巻貝で調整されている。

c) 主要柱穴出土遺物(中期)(第30・31図、図版第18・19)

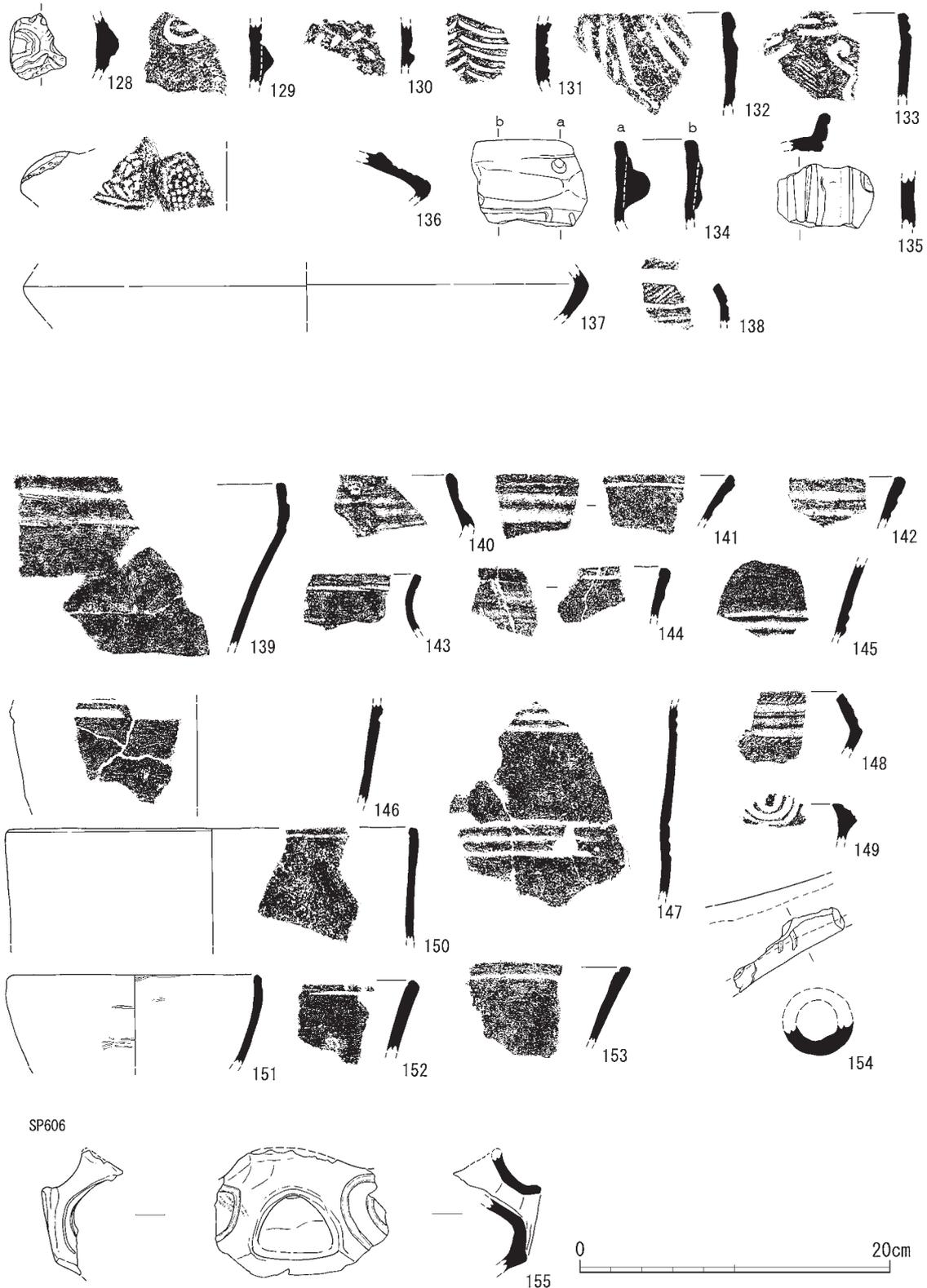
S P 436 北白川C式がまとまって出土した。111は口縁と胴部の境に隆帯をもつ波状口縁の土器である。胴部は紡錘状の文様をもち縄文が充填されている。112は、口縁部から一段下がったところに隆帯と押し沈線で区画した土器である。113・114は口縁部が肥厚する土器で縄文が充填されている。115～117は深鉢胴部である。

S P 437 S P 436に隣接し北白川C式がまとまって出土した。118は口縁端部が丸く肥厚する土器である。口縁部が一部のため全体の器形はわからなかった。文様は押し沈線によって描かれている。119は口縁に羽状沈線が充填される区画文をもつ深鉢。区画の周囲には隆帯が剝離した痕跡がある。120・121は口縁部文様帯が肥厚し波状の口縁を呈する深鉢。主文様はなく区画文が描かれる。120は区画文間に2点の指頭状の圧痕が施される。122・123は口縁部から一段下がったところに楕円形区画文をもつ深鉢。122は押し沈線によって文様が描かれている。123は隆帯のみによって区画文を作っている。124は口縁部文様帯がなく沈線と沈線内を充填する縄文によって文様が描かれる。内湾した器形を呈する。125は口縁部がやや肥厚し、口端部と内面の口端直下に縄文が施されている。また渦巻状の文様が細い沈線で描かれている。126・127は深鉢胴部である。

柱穴出土遺物(第31図、図版第20) 中期末北白川C式期を中心とする。128～130は主文様帯を隆帯で囲むもので、それぞれS P 572、S P 553、S P 645から出土した。131は重弧沈線をもつもので、S P 578から出土した。132～134は山形の口縁をもつもので、132・134はS P 720から、133はS P 663から出土した。135は口縁部から一段下がったところに区画文様帯をもつもので、S P 532から出土した。136は主文様帯をもつ浅鉢で、主文様部は隆帯で囲まれ、刺突文で充填されている。S P 663から出土した。137は無文の浅鉢で、S P 716から出土した。138は口縁部に縄文を施し、その下に2条以上の沈線を描く。浅鉢と考えられる。S P 388から出土した。

d) 柱穴・土坑出土遺物(後期)(第31、図版第21)

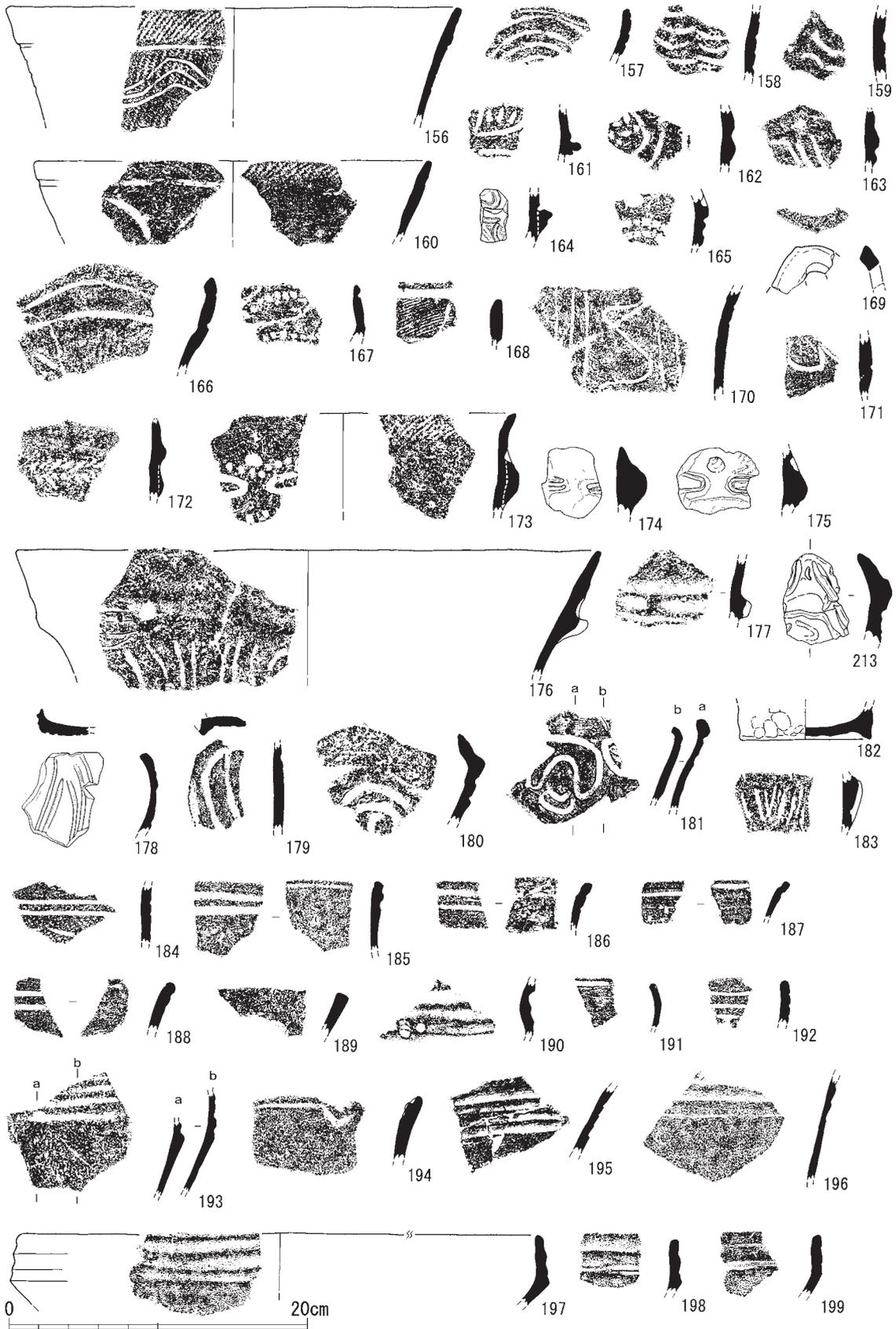
元住吉山Ⅱ式から宮滝式を中心とする。139は口縁が内折する土器である。上下2条の凹線が描かれる。S P 671 から出土した。140は口縁が内折し、やや外反する土器である。上下2つの巻貝による扇状圧痕文と3条の凹線が描かれる。S K 540から出土した。141は口縁部が外反する深鉢である。口縁端部を面取りしている。S P 534 から出土した。142～144は広口口縁深鉢である。142・144は内面沈線と斜刻帯が描かれ、特に144の凹線は通常のものとは較べて幅が広く、よく凹線内が研磨されている。それぞれS K 588、S P 599、S P 715から出土した。145～147は深鉢胴部。147は胴部が屈曲する深鉢で、凹線断面が「レ」字状である。148は内屈する口縁を有する浅鉢。3条の密接した凹線とその上下に刻みが施される。それぞれS K 540、S P 600、S P 534から出土した。149は口縁部に多重の円形の文様をもつ。S P 700から出土した。150・152・



第31図 出土遺物実測図(5) 縄文土器

153は無文広口深鉢。それぞれSP600、S P 602、S P 596から出土した。151は無文鉢で、S P 487から出土した。154は注口土器注口部で、S K 540から出土した。

155は、胴部に横位に粘土版を橋状に取り付けた把手をもち、その両側に区画と渦巻状の文様



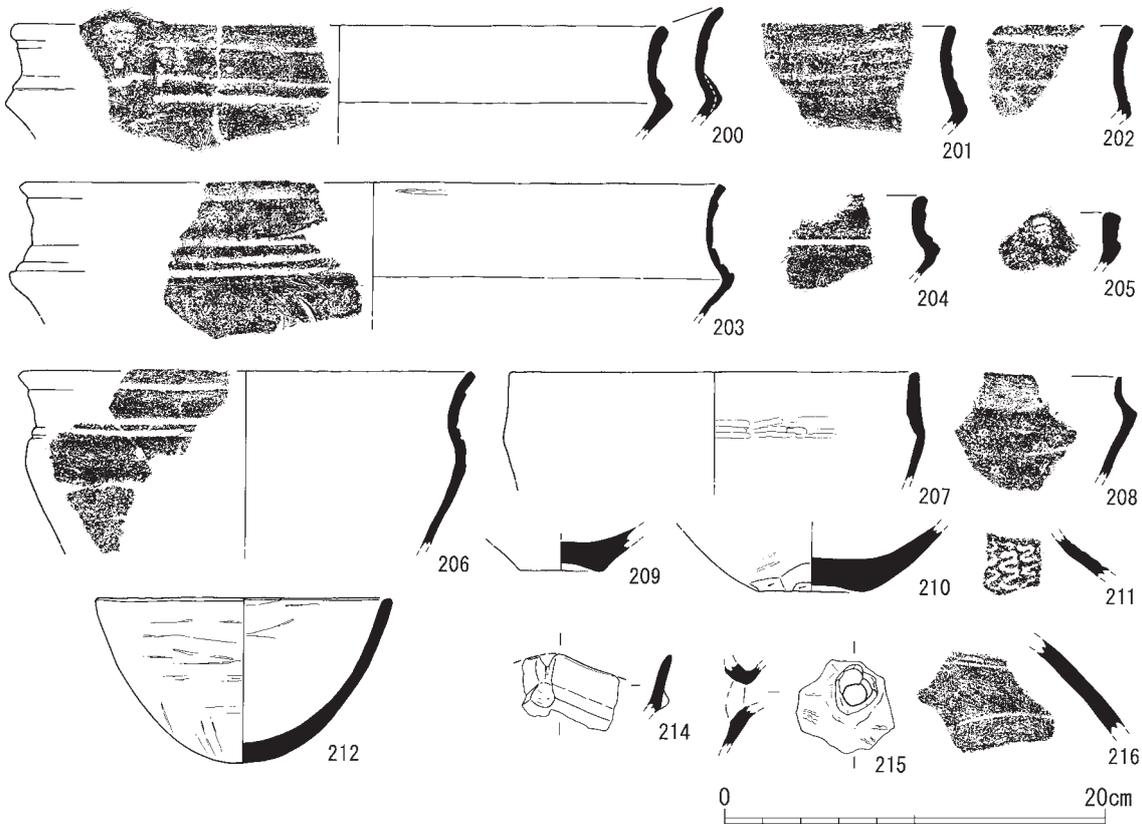
第32図 出土遺物実測図(6) 縄文土器

をもつ。双耳壺のような形をもつが、西日本の後期における一般的な双耳壺よりやや大きく把手のあり方が異なっている。吊手土器のような特殊な器形である可能性も考えられる。中期末のものと考えられる。S P 606から出土した。

c. 包含層出土遺物(第32~34図、図版第18・20・21)

a) 包含層出土遺物(中期)(第32図、図版第20)

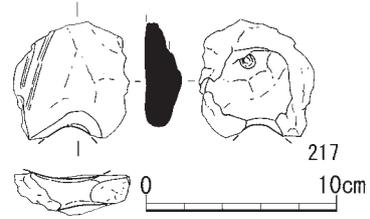
156は口縁部が一本の沈線で区画され口縁部はわずかに肥厚する。157は多重の円形の主文様をもった波状の口縁をもつ土器と考えられる。158・159は多重の連弧文で描かれている。160は口縁部に1本の沈線を描き、胴部に弧状の沈線をもつ土器である。また口縁内面に縄文が施文される。161~165は口縁部文様帯を隆帯で囲むもの。165は押し沈線によって文様が描かれている。166~168は口縁部文様帯を沈線で囲む土器である。169は波状口縁波頂部を穿孔している。170・171は深鉢体部片。172~175は口縁から一段下がったところに文様帯をもつもので、隆帯と沈線によって楕円形区画文を構成している。176・177は口縁から一段下がったところに凸帯をもつ土器である。176は凸帯と指頭圧痕状のもので構成される。177は凸帯による楕円形区画文で構成される。213は口縁部に沿って2本の沈線をもち、波頂部の下に蛇行沈線が描かれる。178~180は山形の口縁をもつ土器である。178・179は波頂部の側面であり区画文で表現される。180は口縁が内屈しており、口縁下の文様が渦巻文となっている。181は特殊な形をしており、口縁に小さな突起をもつ土器である。182は底部。183は船元Ⅲ式と考えられ、中期中葉のものである。



第33図 出土遺物実測図(7) 縄文土器

b) 包含層出土遺物(後期)(第32・33図、図版第21)

元住吉山Ⅱ式から宮滝式の凹線文土器が主体であった。184は上弦の連弧文をもち、沈線間に縄文が充填されている。元住吉山Ⅰ式。185～188は広口深鉢で内面に一本沈線を施すもの。元住吉山Ⅱ式から宮滝式前半期によく見られる。186は斜刻帯をもつ。189は無文広口深鉢。190は胴部に多条の凹線を施すものであり、巻貝側面の圧痕と刺突をもつ。元住吉山Ⅱ式。193



第34図 出土遺物実測図(8)
土製品

は内屈した口縁の深鉢で、口縁に多条の凹線を描く。194は内面に一本の沈線を施し、巻貝殻頂による刺突をもつ土器である。191は口縁に一本の沈線をもつ内湾した浅鉢である。192は口縁に多条の沈線をもち、やや内湾した器形をもつ。やや古手のものである可能性がある。195・196は深鉢胴部である。197～199は内屈口縁浅鉢。口縁部に3条の凹線が施文されている。元住吉山Ⅱ式。200～206は口縁部が内折し外反する有文の深鉢である。扇状圧痕文など宮滝式に盛行する特徴をもっている。207・208は口縁が内折し外反する無文の深鉢である。209・210は底部である。211は波状の沈線が巡る。注口土器の可能性をもつ。212は無文鉢。巻貝によって調整されている。214は波状口縁深鉢の波頂部で、巻貝の圧痕をもつ。215は注口土器注口部。216は注口土器体部片。刻みがみられ元住吉山式期の特徴をもつものと考えられる。

d. 土製品(第34図、図版第18)

217は粘土板状の土製品である。2条の沈線が施され、一部に湾曲した端部をもっている。これら特徴を土偶の手足の一部と考えることが出来るかもしれない。

e. 小結(縄文土器のまとめ)

今回の調査では、おもに縄文時代中期末の北白川C式の土器と後期中葉～後葉期の元住吉山Ⅰ・Ⅱ式～宮滝式期の土器が出土した。全体的に遺存状態は悪く、摩滅した状態や、両時期の土器が混入した状態で出土するものも多かった。比較的まとまった状態で出土した遺構は中期末ではS K 544、S K 621、S P 436、S P 437等があげられ、後期中葉～後葉期ではS H 440、S K 637、S T 555等があげられる。

中期末の土器の全体を泉拓良氏の編年をもとに概観してみると、口縁下に口縁部文様帯をもつA類においては、古い段階の口縁部文様帯や主文様を隆帯で囲むものは全体として少なく、口縁部文様帯が肥厚しただけのものや、口縁部文様帯が消失したものが見受けられた。泉編年でA 4類とされる多重沈線による連弧文が描かれる土器もいくつかみられた。また口縁部の一段下がったところに隆帯で楕円形区画文をもつB類においては、古い段階とされる橋状把手をもつものが見られず、楕円区画文が隆帯と区画文だけで表されるものや、退行し凸帯で楕円形区画をあらわすもの、あるいは凸帯のみになってしまったものも多く見受けられた。突起状山形口縁をもつC類に関して言えば、遺存状態が口縁の一部に限られるものも多いが、主文様部をもつもの、渦巻文様をもつものとともに、口縁部に区画や沈線を施文しているものが見られた。こういった傾向を通して従来の編年上、主にA類、B類から北白川C式の新しい段階の資料がやや優位であり、

特にS P 436・437ではその傾向が見て取れるかもしれない。しかし、遺存状態が悪く確認できなかった資料も考えられるので、推測の段階に留めるとする。

後期中葉～後葉期の土器について丹治康明氏や岡田憲一氏の編年をもとに概観すると、幅の広い断面「U」字状の凹線、内面斜刻帯をもつ広口深鉢・鉢が多くみられ、また内面沈線のみや、沈線のない広口深鉢・鉢や断面「レ」字状を呈する凹線文をもつものもあり、元住吉山Ⅱ式～宮滝式の古段階に比定できるものが主体であった。その一方で、「く」の字状に内屈・内湾し、外反する口縁の深鉢がみられ、またこれらの土器は文様が幅の狭い凹線や、溝の深い沈線で描かれたものであり宮滝式の新段階に比定出来るものもみられる。また連弧文の描かれたものや、匙状突起をもつ深鉢の一部もあり、昨年度の調査区同様、後期の古い時期は後期中葉の元住吉山Ⅰ式に比定できると考えられる。

また異系統と考えられるような土器の出土もみられ、これら土器様相から中期末から後期後葉にかけて他地域との結びつきをもつ京都盆地における拠点的な集落であったと考えられる。

(木村啓章)

②石器

包含層中や遺構内より出土した定形的な石器(剥片石器・礫石器)、その他の石核・剥片などを含めた石器関連資料の総点数は4,485点である。^{注8}

まず、定形的な石器の器種、点数、総点数に占める割合(%)を示したい。

剥片石器は、石鏃244点(5.4)、石錐11点(0.2)、削器19点(0.4)、加工痕ある剥片38点(0.85)、使用痕ある剥片3点(0.07)、搔器1点(0.02)、楔形石器50点(1.1)、同碎片38点(0.85)の内訳である。石鏃・石錐は未成品を含み、楔形石器(ピエス・エスキュー、裁断面のある石器ともいう)は定形的な石器に含めた。

礫石器は、石斧3点(0.07)、敲石類36点(0.8)、台石・石皿8点(0.2)、石錘1点(0.02)、砥石1点(0.02)となる。^{注9}敲石類の多さが特徴である。

定形的な石器以外のものには、石核、剥片、サヌカイト礫素材、搬入礫がある。加工痕のない搬入礫については数えていないが、それら以外の点数と総点数に占める割合(%)を示すと、石核29点(0.6)、剥片4,003点^{注10}(89.3)である。

石材については、礫石器以外の剥片石器および剥片・碎片のほとんど(99.96%)はサヌカイトである。^{注11}石器類の時期であるが、当地区から今回検出された竪穴式住居跡や土壙墓群には共伴しないが、縄文土器以外の土器がみられないことから、一部のものを除き、^{注12}大部分は元住吉山Ⅱ式～宮滝式期に該当するとみられる。

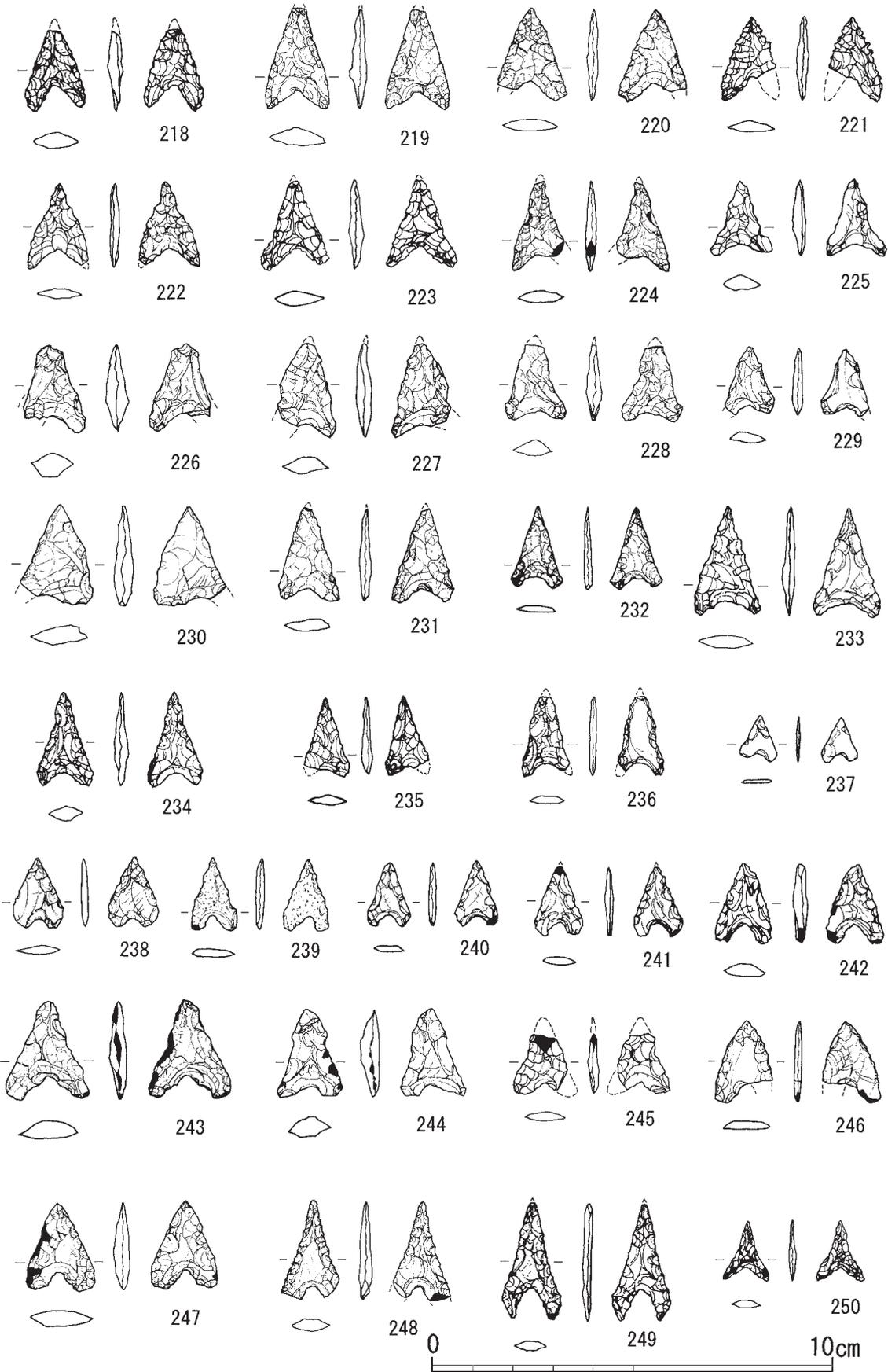
(黒坪一樹)

a. 剥片石器・石核・剥片

a) 石鏃(図版第35～38、図版第22・23)

出土点数244点には、未成品17点を含む。このうち、形態の変化を捉えた122点を網羅的に図示し、未成品は9点を図示した。

大半のものは包含層中より出土している。破損品は、先端や脚部・脚部先端を欠損するものが



第35図 出土遺物実測図(9) 石鏃

多い。石材は、チャート2点、不明1点で、サヌカイト製が大半である。黒曜石の剥片が1点出土しているが、黒曜石製の石鏃は出土しなかった。

石鏃は、基部の形態により以下に分類した。

A類：凹基式、B類：平基式、C類：円基式、D類：無茎式の4大別した。形態が多種ある凹基式は1～39、平基式は1～3、円基式は1～3に細分した。表記は、A-1類とし、個々の数値については、末尾の一覧表に記載している。欠損品は()内に、残存する大きさ(cm・g)を表記した。

A-1類(第37図218～225、図版第22) ほぼ二等辺三角形の平面形を呈し、基部にやや深い三角形状の抉りをもつものである。側縁は直線的なものが多いが、221のように内湾気味で鋸歯状のものや、222のように先端部付近で急に細くなり尖るもの、223・225のように側縁がやや外反し、脚部も外に開くものがある。調整加工は、225を除いて丁寧な調整が周縁に施される。総数14点出土した。後述するA-29類に次ぐ出土数である。

A-2類(第35図226・227、図版第22) 二等辺三角形を呈し、側縁は直線的で、やや厚みがあるものである。先端は226は尖らず、227は尖る。抉りは三角形状でやや深い。2点のみ出土した。

A-3類(第35図228・229、図版第22) 脚が外側に開き気味で、側縁中央付近でやや反り気味となる。抉りは浅い弧状をなすものである。2点出土した。

A-4類(第35図230、図版第22) 二等辺三角形を呈し、やや厚みがある。基部中央に浅く幅の狭い弧状の抉りをもつものである。1点出土した。

A-5類(第35図231～236、図版第22) 細身の二等辺三角形を呈し、先端は尖る。脚部先端は236を除いて比較的丸い。抉りは231が浅い三角形、他はやや深い弧状である。10点出土した。

A-6類(第35図237～242、図版第22) 基部は内湾気味で先端は丸いものやよく尖っているものがある。全長1.15～2.0cmを測り、比較的小型なものが主である。7点出土した。

A-7類(第35図243～245、図版第22) やや大ざっぱな作りをしており、大型の243・244と小型の245がある。244・245は脚先端は外側に尖り、243は内湾気味に丸い。抉りは243が深い三角形状、244・245は浅い。3点出土した。

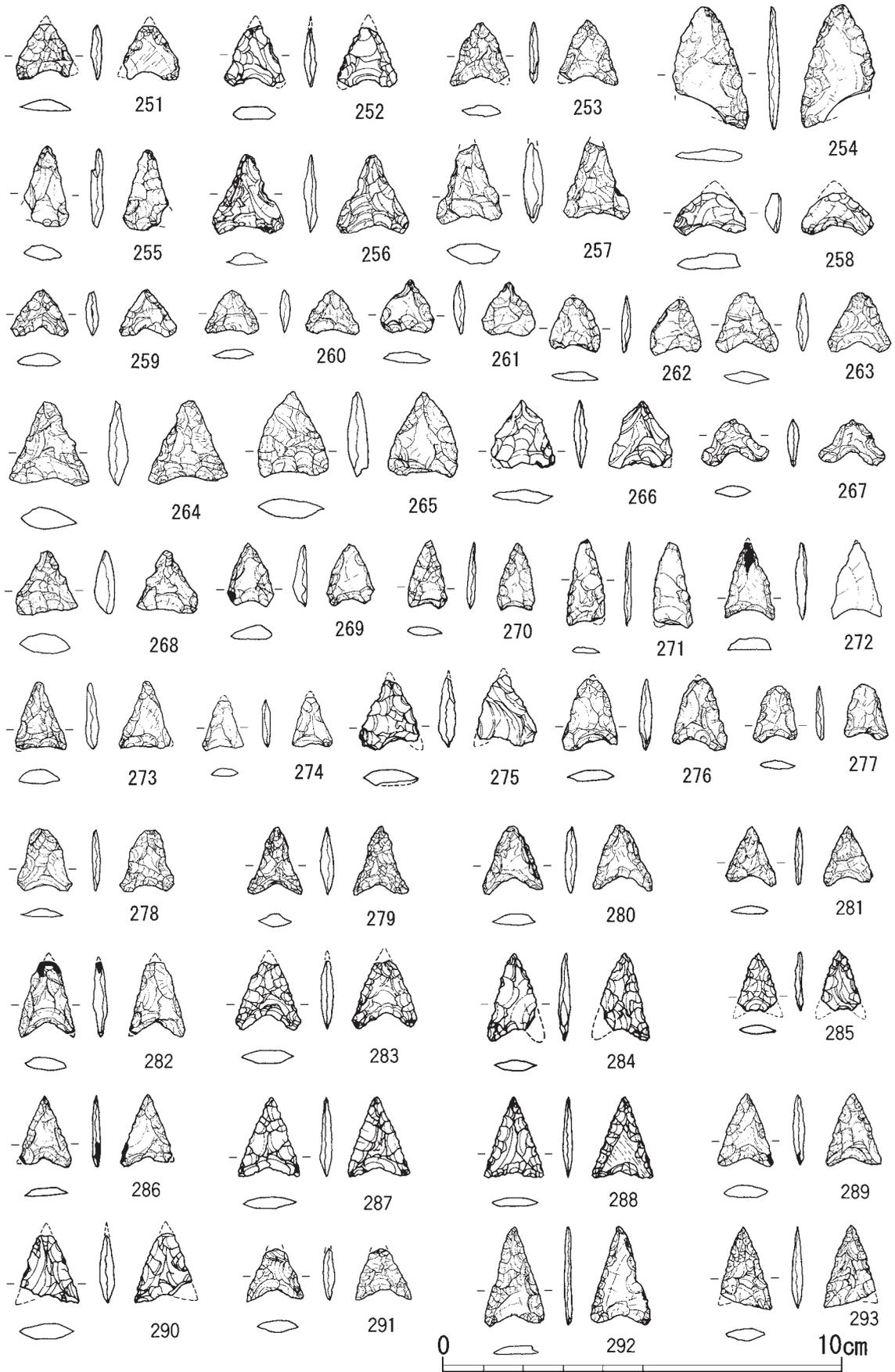
A-8類(第35図246・247、図版第22) ずんぐりと丸みを帯びた二等辺三角形を呈し、側縁が内湾する。基部の抉りは、やや深い三角形状である。2点出土した。

A-9類(第35図248・249、図版第22) 先端が鋭い二等辺三角形の平面形を呈する。側縁の調整は細かい。脚部はやや外側に突出し、端部は内向する。抉りは、深い「U」字状のものが施される。4点出土した。

A-10類(第35図250、図版第22) 先端、脚部とも鋭く尖る。調整剝離は非常に細かい。脚部は、側縁中央より外側に広がる。抉りは、深い三角形状に施す。1点出土した。

A-11類(第36図251～253、図版第22) ほぼ正三角形に近いもので、抉りは浅く緩やかな弧状をなす。3点出土した。

A-12類(第36図254、図版第22) 大型品である。二等辺三角形を呈し、抉りはやや深い三角



第36図 出土遺物実測図(10) 石鏃

形状をなしていたとみられる。2点出土した。

A-13類(第36図255) 二等辺三角形を呈し、基部中央にごく浅い「U」字状の抉りを施すものである。脚部両端は丸い。2点出土した。

A-14類(第36図256・257、図版第22) ほぼ正三角形に近く、側縁は左右非対称である。抉りは広く浅い。ゆるやかな弧状をなす。2点出土した。

A-15類(第36図258・259、図版第22) 長さに対して幅の広いものである。258は幅1.8cmを測る。抉りは浅い弧状のもの258と三角形状のもの259である。2点出土した。

A-16類(第36図260～262、図版第22) 小型で幅広のもの260と、正三角形に近いもの261がある。脚端部は丸い。262は側縁がやや内湾する。抉りは広く浅い弧状である。262が三角形状を呈する。3点出土した。

A-17類(第36図263、図版第22) 正三角形に近い平面形を呈し、先端部は尖らず丸いものである。抉りはやや深い三角形状をなす。1点出土した。

A-18類(第36図264、図版第22) A-7類を大型化したような形状をなし、抉りは浅い三角形状をなすものである。3点出土し、うち、1点を図化した。

A-19類(第36図265・266、図版第22) 側縁が膨らみ不定形なものである。265は片側がやや内湾気味で、266は五角形に近い平面形を呈する。ともに浅い弧状の抉りである。265は厚手である。2点出土した。

A-20類(第36図267、図版第22) 長さに対して幅が広く、脚部も外側に大きく広がる。A-15のように先端が尖らず丸い。抉りは先端が丸く深いものである。1点出土した。

A-21類(第36図268) ほぼ正三角形を呈するものである。基部にごく浅い弧状の抉りを施す。1点出土した。

A-22類(第36図269～272、図版第22) 身幅の狭い二等辺三角形を呈し、基部に浅い弧状の抉りを施すものである。脚部両端が尖るが、271はやや丸く作り出される。272は薄い剝片を素材とし、裏面は素材の剝離痕のみで、加工痕はない。5点出土した。

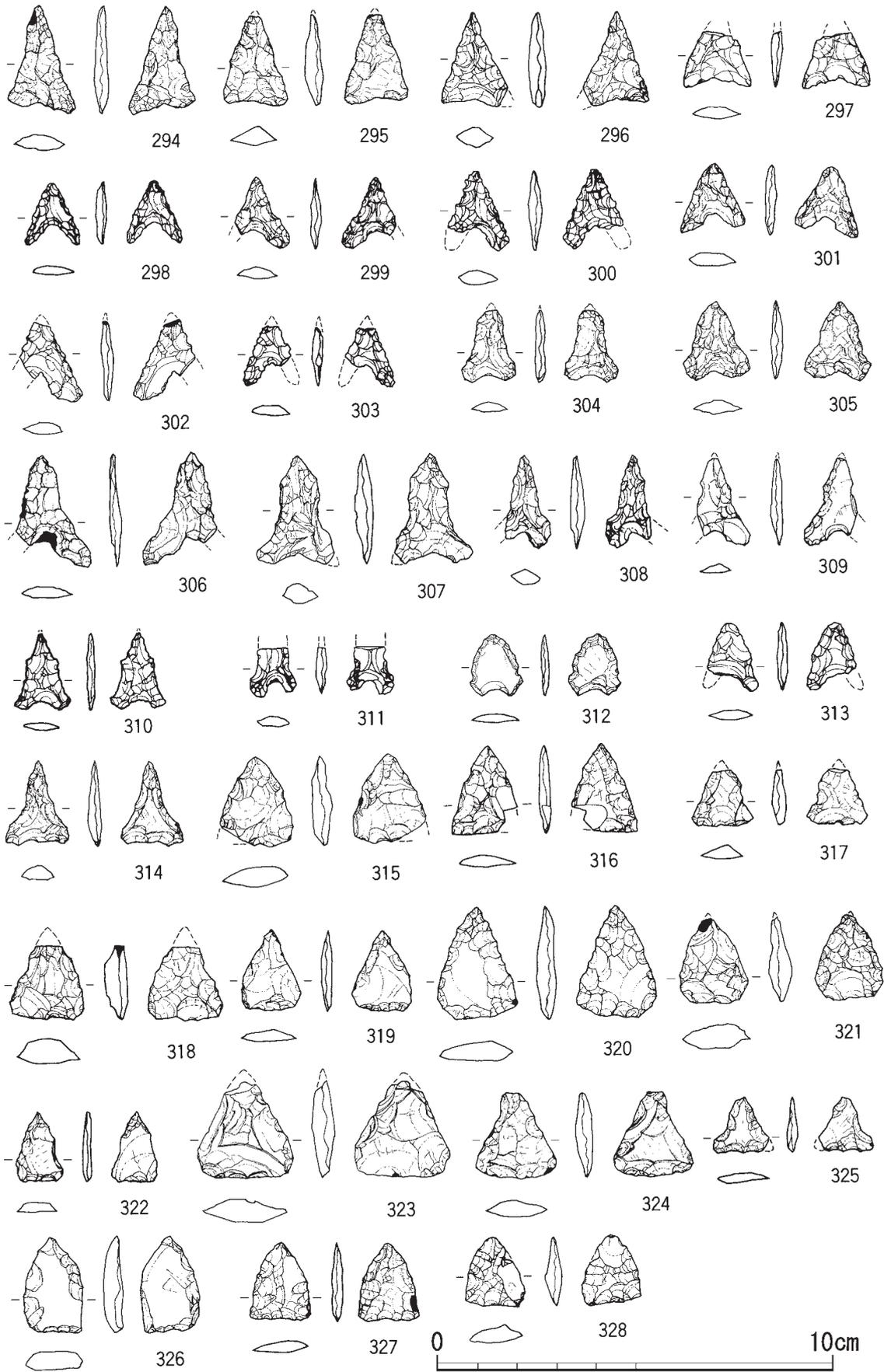
A-23類(第36図273・274、図版第23) A-22類に比べ短い二等辺三角形を呈し、基部に浅い弧状の抉りを施すものである。側縁は直線的で、脚部の両端は尖るが、274はやや丸く作り出される。273は素材の剝離面を残す。4点出土した。

A-24類(第36図275・276) 二等辺三角形を呈するが、やや脚が不整形で均整がとれていない。基部に浅い弧状の抉りを施す。2点出土した。

A-25類(第36図277・278、図版第23) 五角形を呈し、脚部は外へ広がり気味である。先端、脚両端とも丸く作り出される。基部に、やや深い弧状の抉りを施す。2点出土した。

A-26類(第36図279、図版第23) 細身の五角形状を呈し、脚部は外側に向かって広がる。先端、脚両端とも尖る。抉りはやや深い三角形状である。連続する丁寧な加工が全体に認められる。チャート製で1点出土した。

A-27類(第36図280・281、図版第23) A-28類よりも正三角形に近く、側縁は左右非対称で



第37図 出土遺物実測図(11) 石鏃

ある。先端は尖り、脚端部は内湾しやや丸い。基部に先端の丸い三角形の抉りを施す。3点出土した。

A-28類 (第36図282～285、図版第23) やや細身の二等辺三角形を呈し、側縁は直線的なものである。先端は尖り、脚端部は尖るものと丸いもの(283)がある。長さ2.2cm前後のもので、285は小型品である。基部にやや深い三角形の抉りを施す。8点出土した。

A-29類 (第36図286～291・293、図版第23) 分類したもののうちで最も出土数が多く、均整がとれたプロポーションである。側縁が直線的な二等辺三角形を呈し、周縁は連続する丁寧な加工が全体に認められる。288・291・293は特に典型的なものである。先端、脚端部は尖り、基部に浅い三角形の抉りを施す。2cm前後のものであるが、286・289・291は小型品である。16点出土した。290はチャート製である。

A-30類 (第36図292、図版第23) A-29類をやや細くした二等辺三角形を呈する。薄い剥片を素材とし、表面は周縁に連続した丁寧な加工が施されるが、裏面は素材の剥離面が広く残り、側縁のみ加工を施す。1点出土した。

A-31類 (第37図294～297、図版第23) A-30類に比して、均整がとれたものではない。脚端部の長さも左右均等でなく、基部の抉りも浅く広い三角形を呈する。7点出土した。

A-32類 (第37図298～303、図版第23) 二等辺三角形を呈し、側縁は直線的である。脚部は丸いものが多いが、298・301は尖る。総数10点出土した。

A-33類 (第37図304～309、図版第23) 二等辺正三角形を呈し、先端から広がってきた側縁が、中央で内湾気味にくびれたあと、脚部が外側に広がり五角形状を呈するものである。306・307は大型のもので2.8cm前後、304は小型のものである。305はややズングリとし、308・309は細身の中型品である。基部の抉りは、浅い弧状のもの304と、浅い三角形のもの305、深い三角形のもの306、「U」字状のもの308がある。11点出土した。

A-34類 (第37図310、図版第23) 先端が極端に鋭い五角形状のもので、側縁中央から脚部に向かって外反する。脚端部は丸く、基部は浅い弧状の抉りを施すものである。1点出土した。

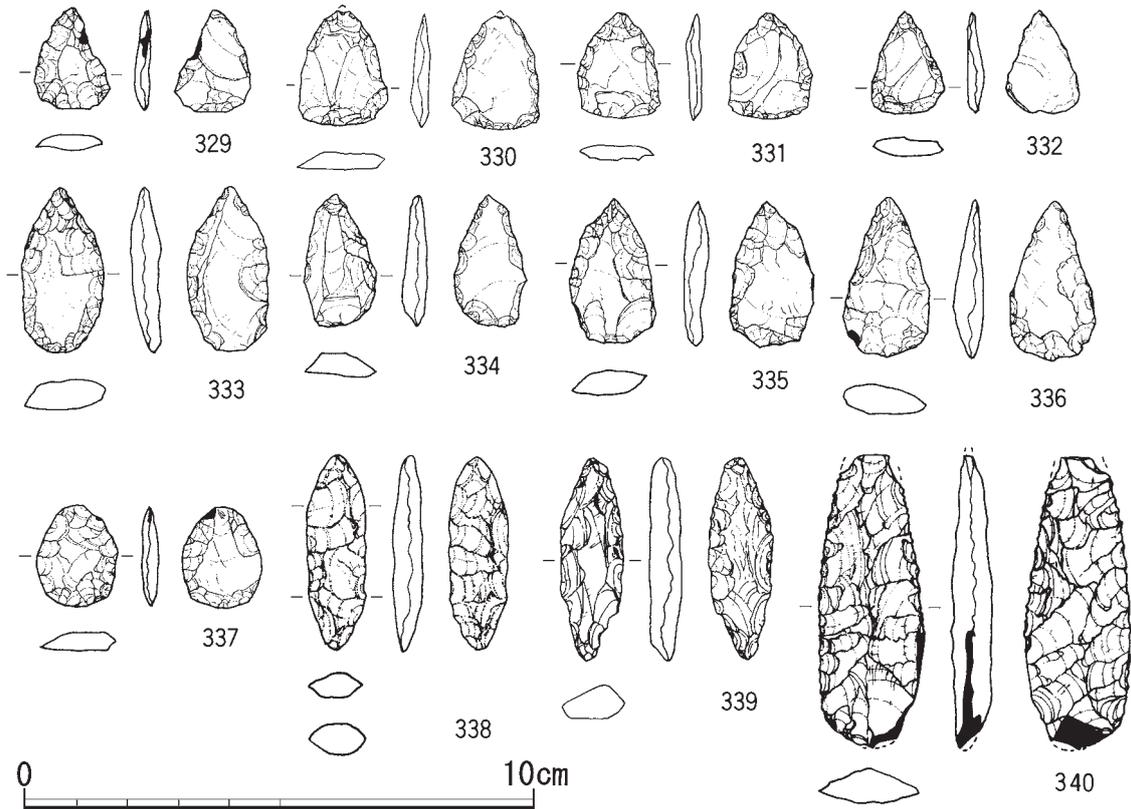
A-35類 (第37図311、図版第23) A-33類の308に類似するが、基部は深い「U」字状の抉りを施すものである。1点出土した。

A-36類 (第37図312、図版第23) 先がやや円く逆「U」字形を呈し、脚部端が外側に向かって突出する。両面とも加工は周縁のみに施され、体部中央に素材の剥離面を残している。抉りは、浅い弧状である。1点出土した。

A-37類 (第37図313) A-8類246に近い平面形を呈する。先端は尖らず、脚は細く、脚端部は丸く加工される。抉りは、やや深い三角形である。1点出土した。

A-38類 (第37図314、図版第23) 二等辺三角形の平面形を呈し、先端は尖る。石錐である可能性もあるが、基部がわずかに凹むことから凹基式鏃とした。1点出土した。

A-39類 (第37図315～317) 平基式鏃ともとれるが、基部にわずかながらも凹みが認められることから、凹基鏃とした。315・316は側縁がやや内湾気味のものである。4点出土した。



第38図 出土遺物実測図(12) 石鏃

B-1類(第37図318~321、図版第23) 基部に抉りをもたない平基鏃である。平面形が、二等辺三角形を呈し、320は大型品である。6点出土した。

B-2類(第37図322、図版第23) 五角形の平面形を呈し、薄い剥片素材を利用したもので、表裏面とも先端・周縁のみ加工を施すものである。1点出土した。

B-3類(第37図323~325、図版第23) 正三角形に近い平面形を呈するものである。323は大型品である。4点出土した。

B-4類(第37図326~328、図版第23) 釣鐘状の平面形を呈するものである。327・328はほぼ全面にわたり細かく丁寧な加工が施されている。5点出土した。

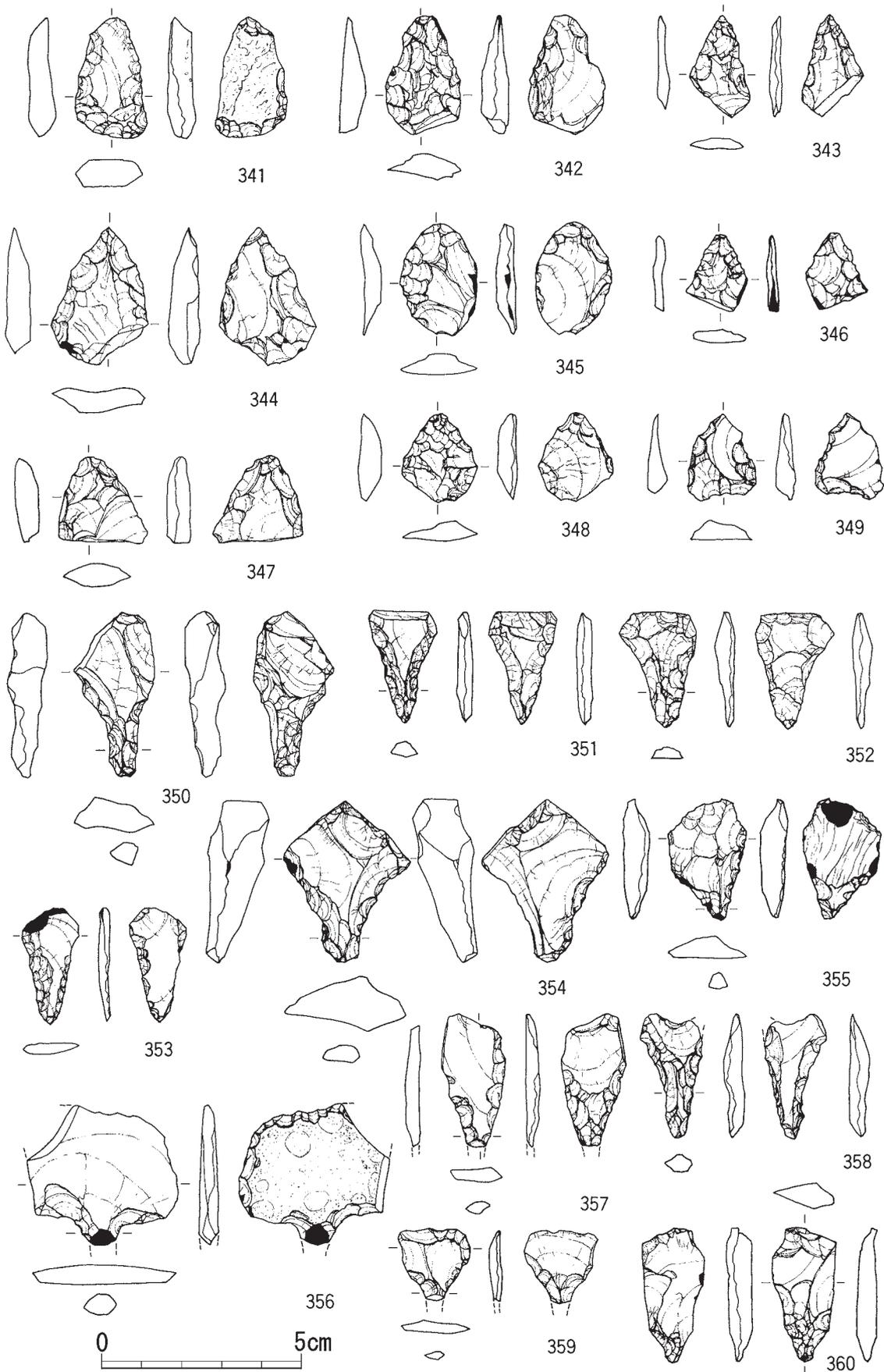
C-1類(第38図329~332、図版第23) 小型・中型のもので釣鐘状、二等辺三角形、不定形な平面形を呈する。いずれも、素材剥片の剝離面が残る。基部の形状がやや丸味を帯びる。6点出土した。

C-2類(第38図333~336、図版第23) やや大型品で、C-1類同様、素材剥片の剝離が多く残る。厚手のものが多い。先端は尖り、周縁に細く連続した平坦な剝離が施される。333・336は他のものに比して整った平面形を呈する。4点出土した。

C-3類(第38図337、図版第23) 楕円形を呈し、裏面には剥片素材の剝離面が残る。1点出土した。

(増田孝彦)

D類(第38図338・339、図版第23) 2点ある。338は厚みのある両面加工で、中央部から周縁部にかけて入念に調整されている。石材は石英を用いている。339は周縁部に加工が施され、表



第39図 出土遺物実測図(13)

裏中央には調整剥離は及ばない。石材はサヌカイトである。

b) 尖頭器 (第38図340、図版第23)

元の古い素材の剥離面がわからないほど両面に丁寧な剥離が施され、縁辺から中軸に斜め方向の細長い剥離面がのびている部分もある。先端部および基部端を若干欠損するが、基部端がやや「U」字形となる尖頭器である。縄文時代草創期のものであろう。石材はサヌカイトである。

c) 石鏃未成品 (第39図341～349、図版第24)

9点図示している(341～349)。横長寸づまり剥片、貝殻状剥片、不定形剥片などを素材とする。周縁部に調整加工を施している過程のもの(341・342・345・349)や、先端部がほぼ完成しているもの(343・344・346・348)、製作中の折損品(347)などがある。9点ともサヌカイトである。

d) 石錐 (第39図350～360、図版第24)

合計11点ある。楔形石器の製作過程で生じた肉厚の剥片を用い、機能部のみに入念な調整加工をほどこしたもの(350・354・360)、薄い剥片を素材とする細長い二等辺三角形で、機能部およびつまみ部の縁辺に調整加工を施したもの(351・352・359)、つまみ部先端部にあまり調整加工がおよばず、機能部との境が不明瞭なもの(353・357・358)、幅広の不定形剥片を素材とするもの(355)、両側から抉り出されたような機能部をもつもの(356)などがある。356は片面を礫表とする大きなつまみ部の破片である。355は機能部にあまり鋭さがなく、左側縁辺に加工を施す前の未成品であろう。すべてサヌカイトを石材とする。

e) 石匙 (第40図361・362、図版第24)

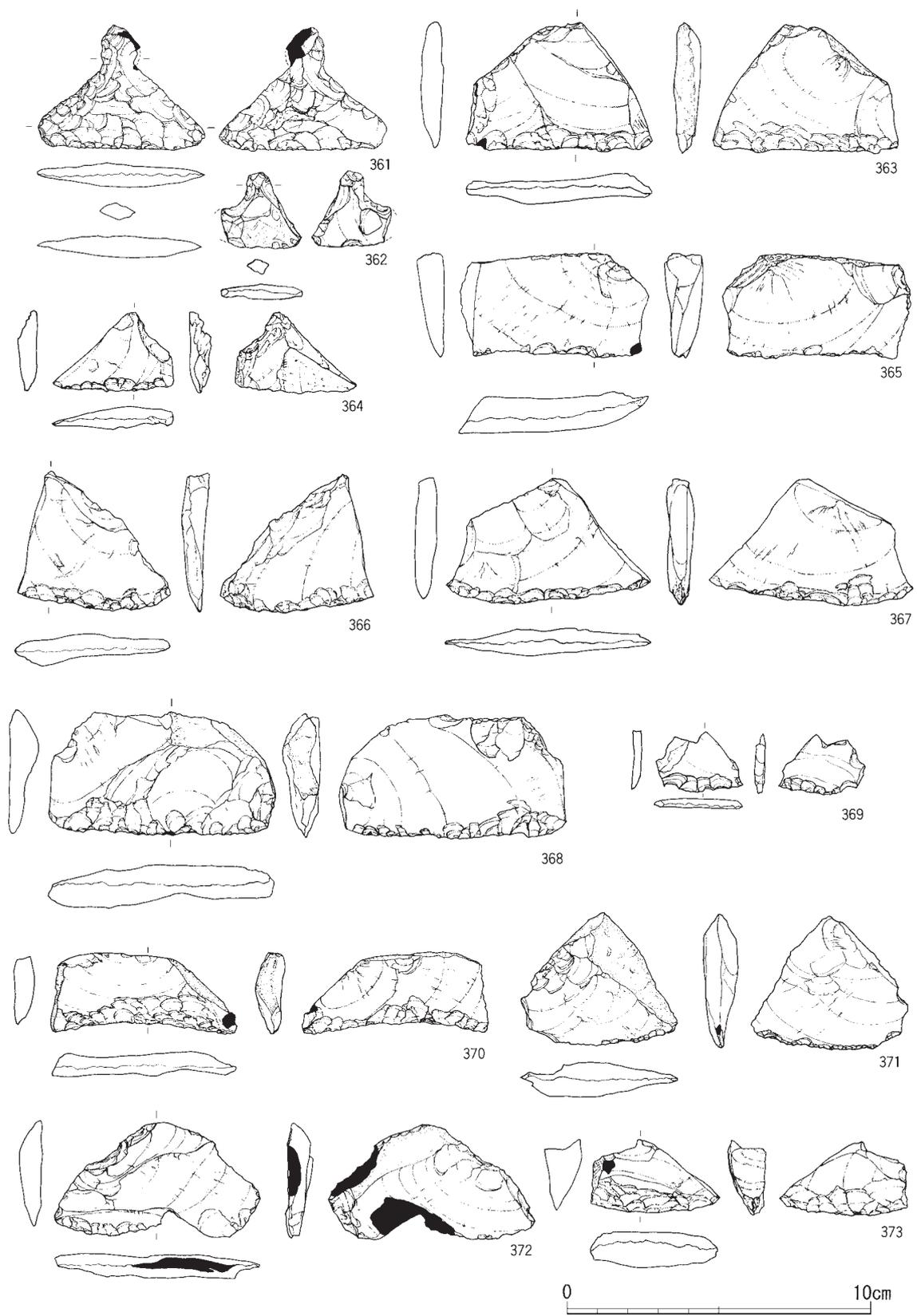
対象物を切り・削り・搔くための万能利器で2点出土している(361・362)。2点ともサヌカイト製である。361は三角形に近い横長剥片を素材とする両面加工である。つまみ部を明瞭に作り出し、下辺には特徴的な連続剥離による鱗状のスクレーピング・エッジが形成されている。362は薄い剥片を素材に、機能部の表面右端を欠損する小型の石匙である。明瞭に作り出されたつまみ部と縁辺部は丁寧に調整されている。下端の刃部となる部分に361のようなスクレーピング・エッジはなく、わずかな加工がみられる程度である。製作途中の失敗のため、仕上げを放棄したものであろう。

f) 削器 (第40図363～373、図版第24)

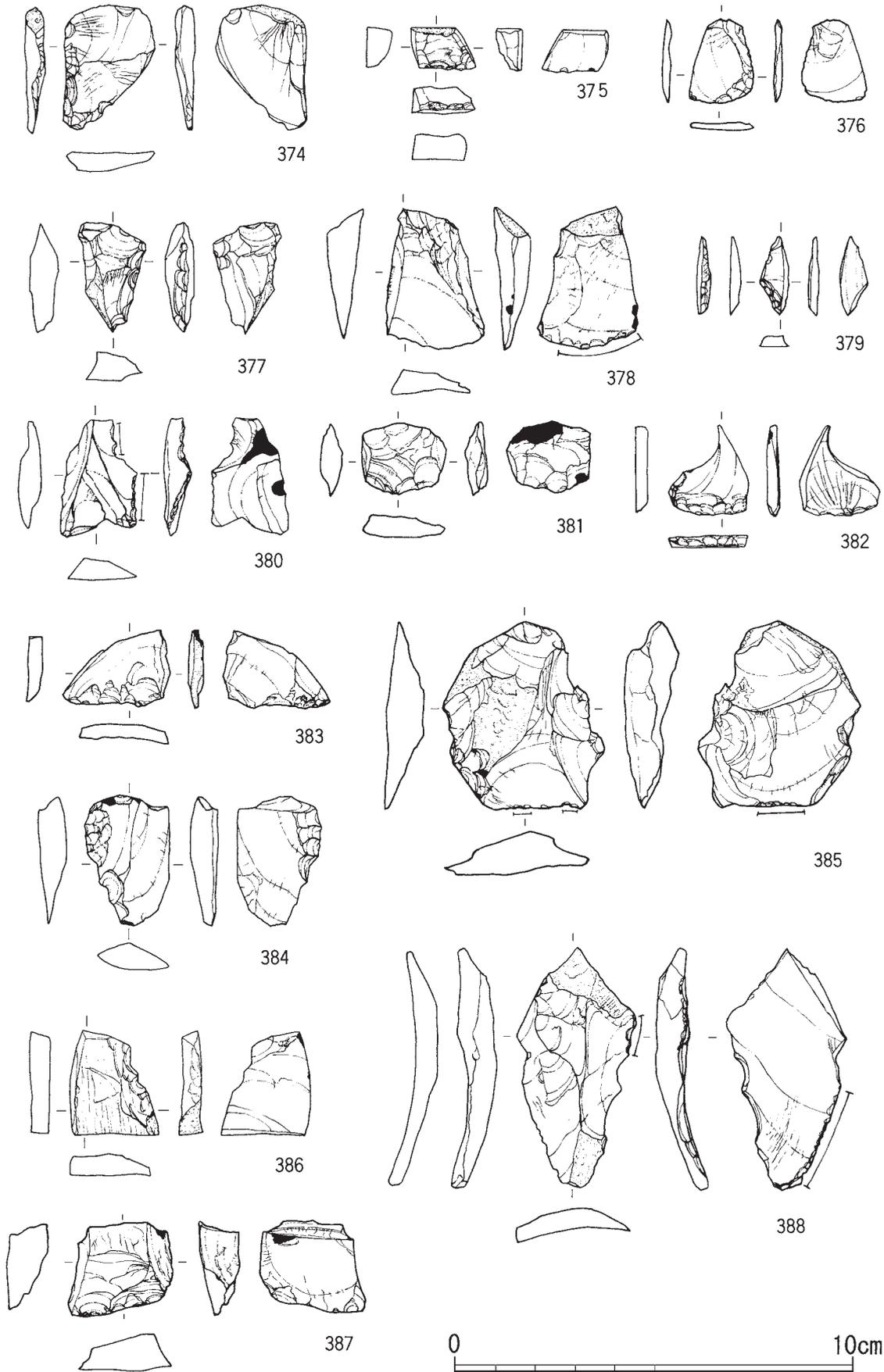
すべてサヌカイトを石材とする。石匙と同じく、対象物を切削する作業に使用したものである。11点を図示している。素材となる剥片には、主軸を傾ける横長剥片(363～367・370・372)、幅広の縦長剥片(368)、三角形に近い幅広寸づまり剥片(371)がある。両極打法により得られた石鏃の素材剥片とは違い、大きさも剥離方法も排他的である。

素材剥片の形状を大きく変えることなく、刃部の加工は基本的に腹面・背面の両方から施されている。調整剥離が比較的浅く少ない365・371も、刃こぼれ的な痕跡ではなくあくまでも削器の刃部形成を意図している。刃部形は、直刃のもの(363～365・368・369)、やや外側にカーブするもの(366・367・371・372・373)や内湾するもの(370)がある。

g) 加工痕ある剥片 (第41図374～379・381～384・386・387、第42図389～391、図版第25)



第40図 出土遺物実測図(14)



第41図 出土遺物実測図(15)

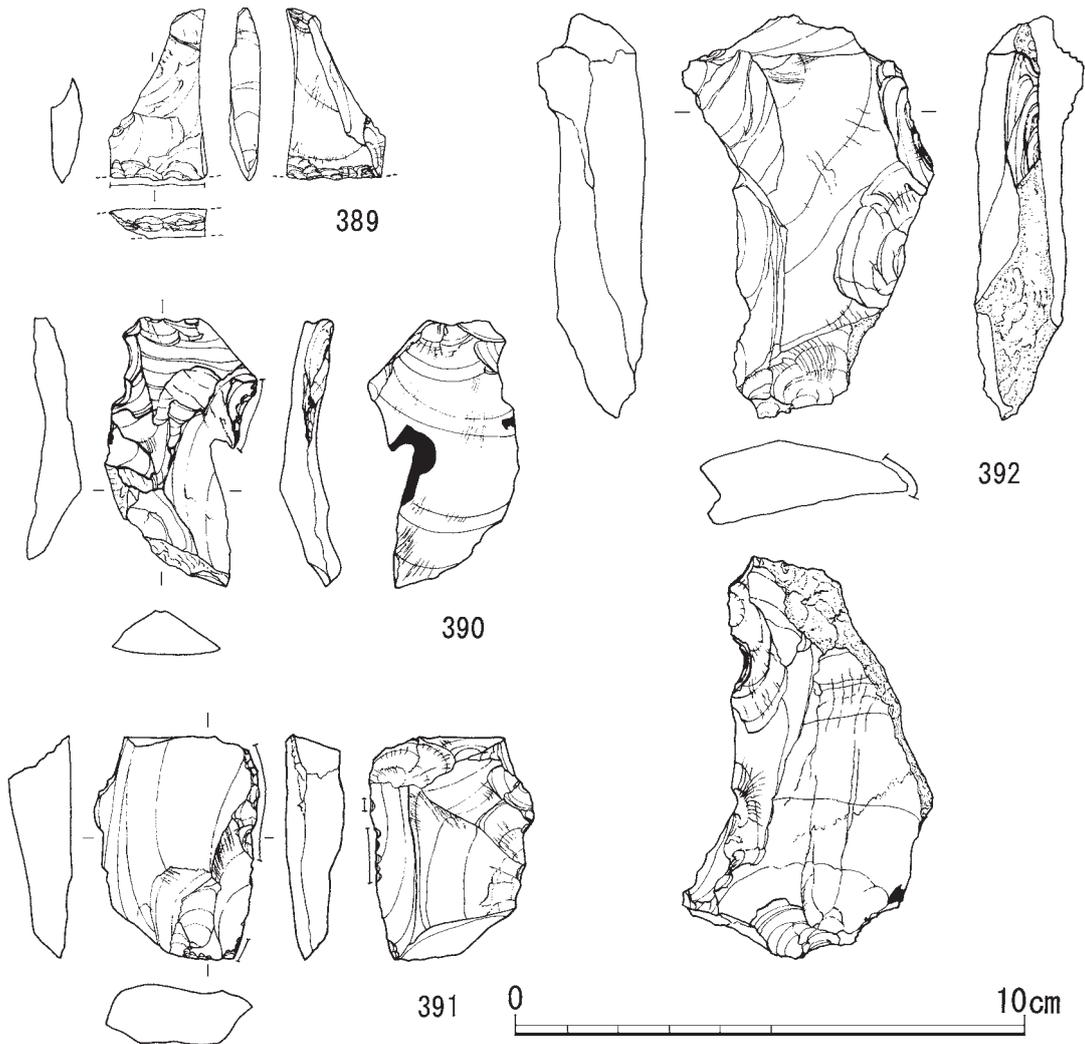
すべてサヌカイトを石材とする。15点を図示している。不定形剥片、貝殻状剥片、横長剥片の縁辺部に加工痕を有するものである。加工痕は縁辺部の一部にとどめるもの(374・376・384・386・387・390・391)や、長く連続して形成されているもの(375・377~379・381・382・383・389)がある。後者の多くは削器の断片とみられる。また、側縁部に裁断面を有するもの(375・381・387)があり、両極打法の影響がうかがえる。381は両面加工石器で、石鏃の素材ともいえる。

h) 使用痕ある剥片(第41図380・385・388、図版第25)

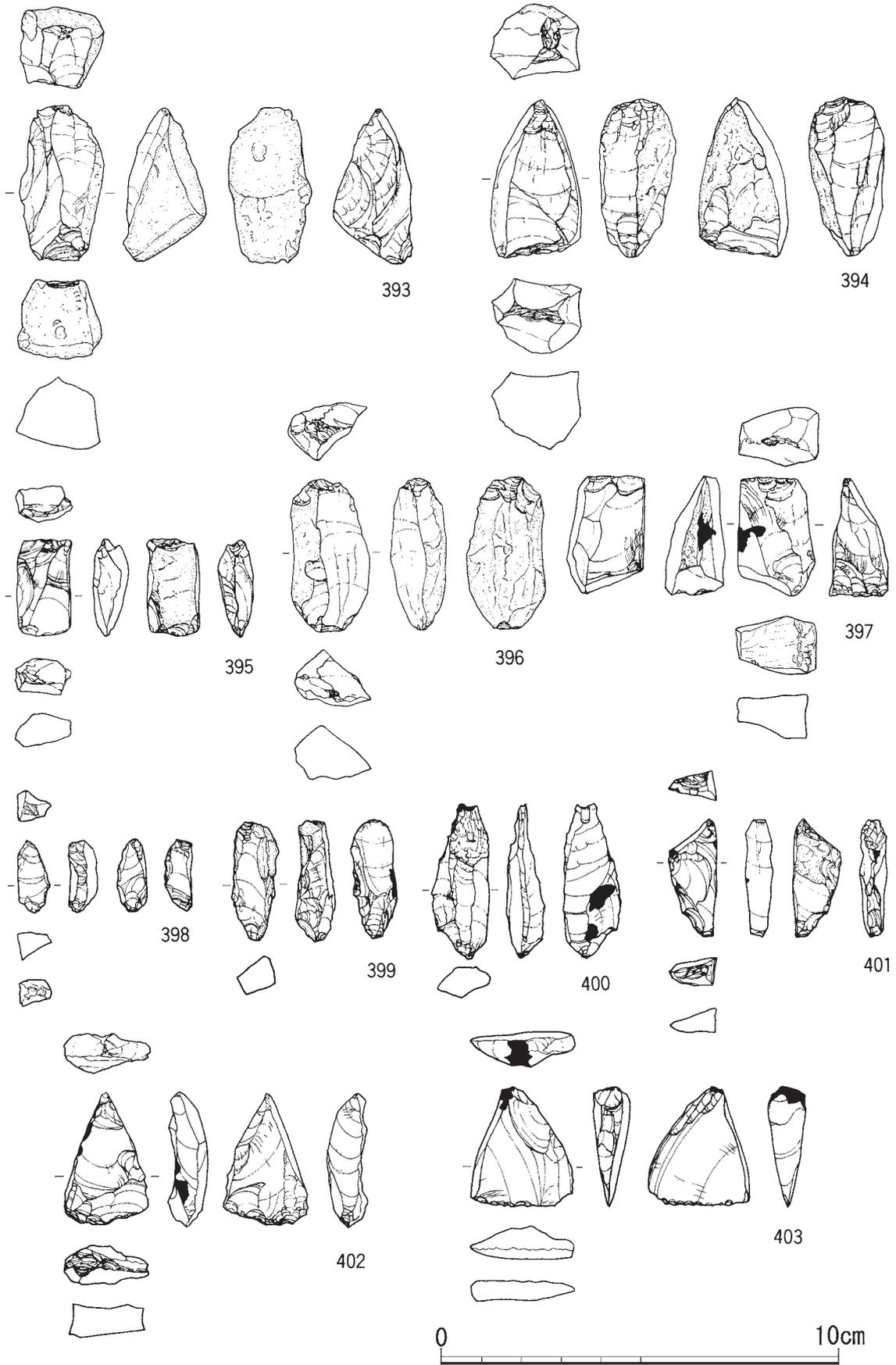
さまざまな形状の剥片を素材に、その薄く鋭利になった縁辺部に、刃こぼれ状の使用痕をとどめるものである。3点(380・385・388)あり、加工痕ある剥片に比べて出土点数は少ない。すべてサヌカイトを石材とする。

i) 搔器(第42図392、図版第25)

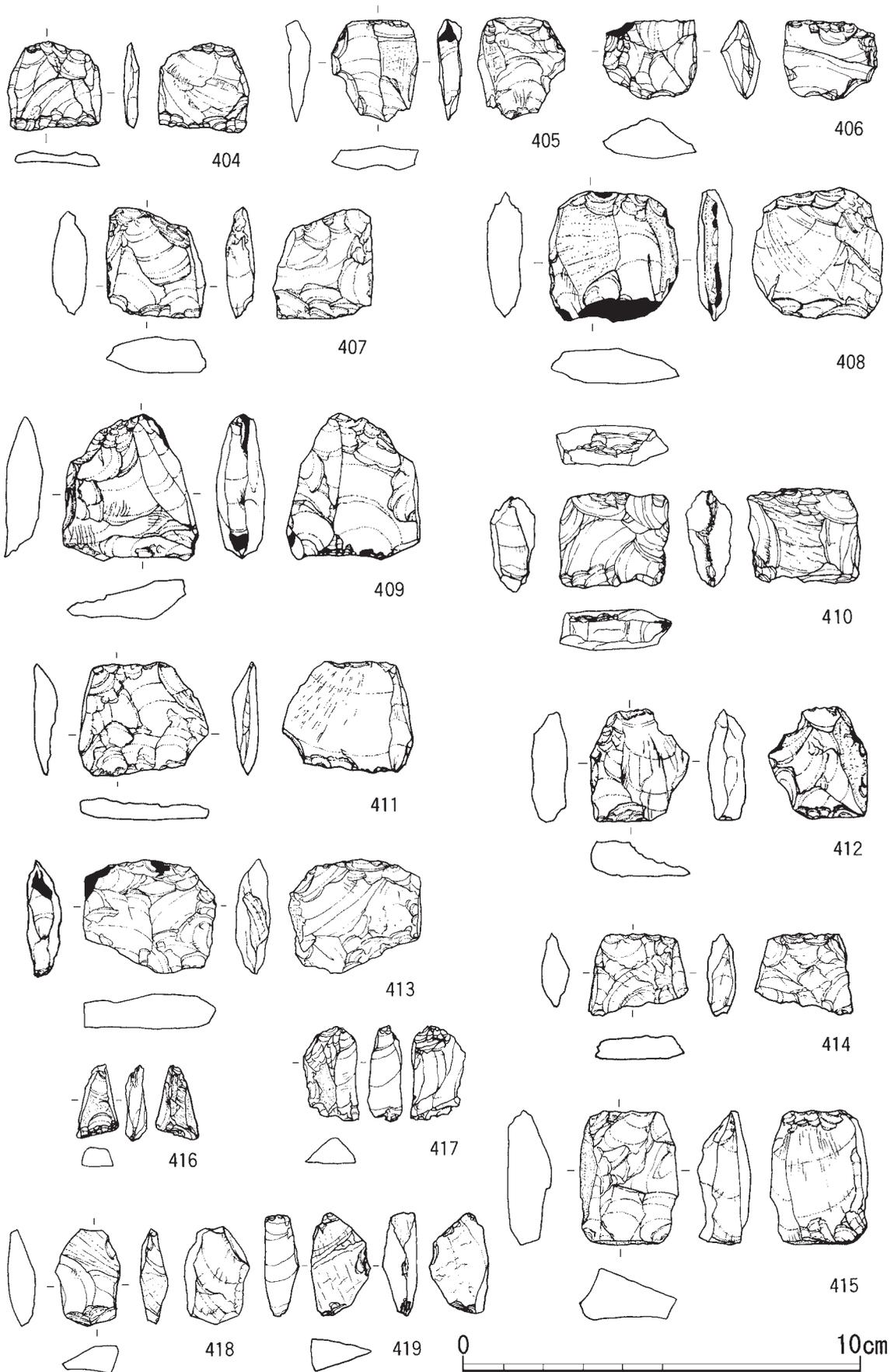
板状の不定形剥片を用い、刃部の断面が鋭角となる削器に対して、長軸に沿う縁辺の一部に鈍い角度で立ち上がる機能部をもつものである。獣皮の脂肪を掻き取る用途と考えられるものである。搔器とみられるものはこれ1点のみである。サヌカイト製である。



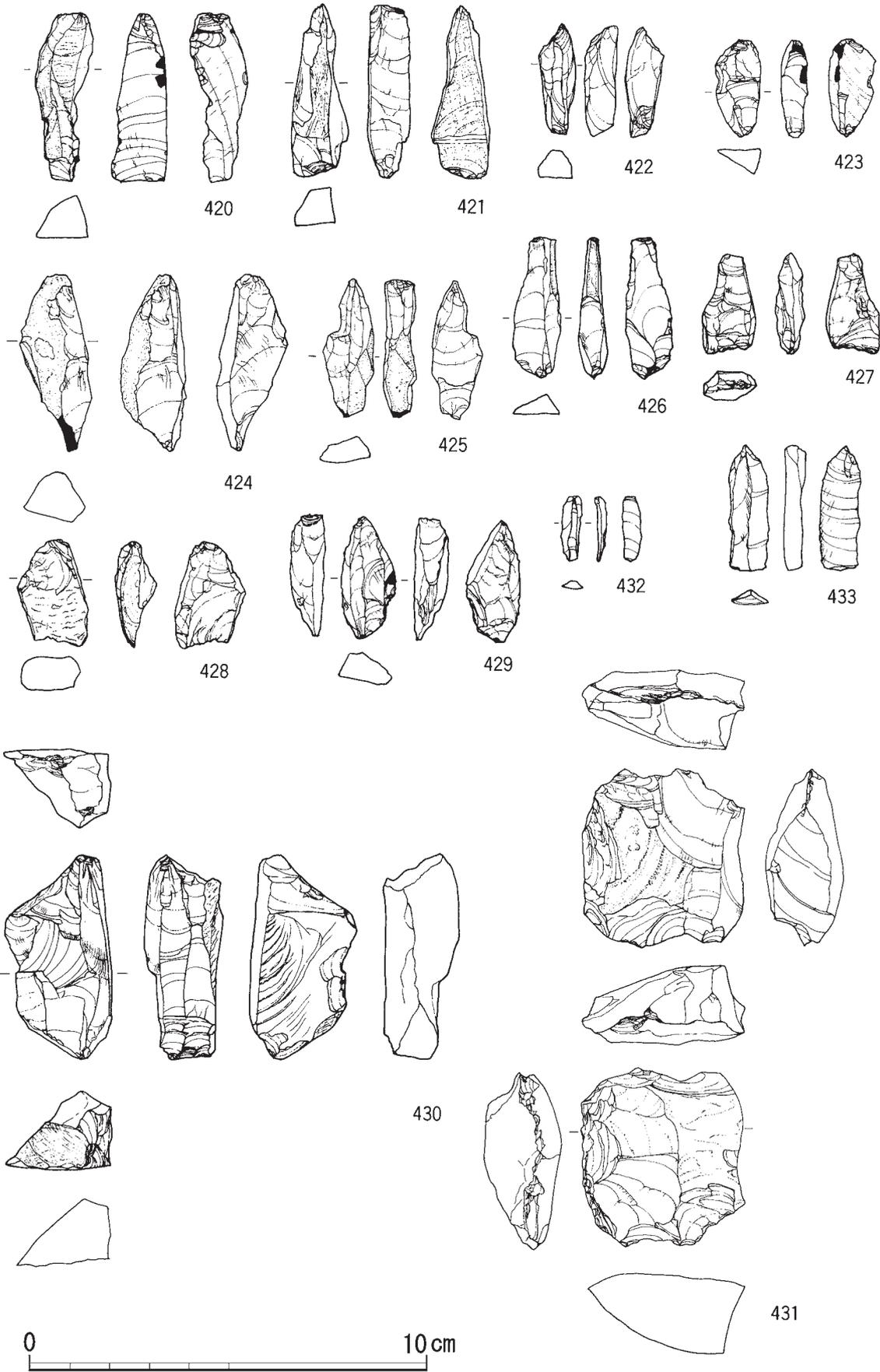
第42図 出土遺物実測図(16)



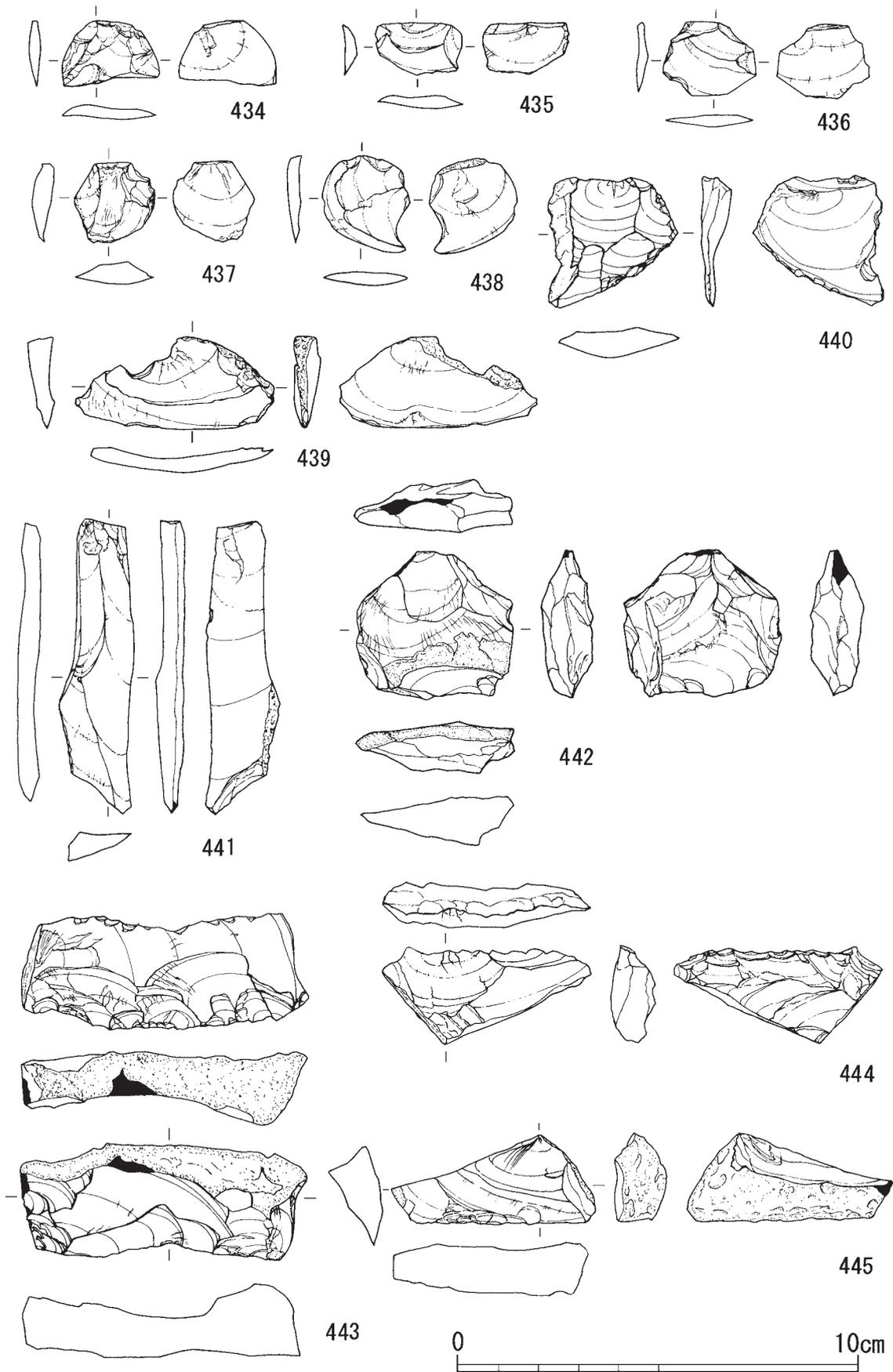
第43図 出土遺物実測図(17)



第44図 出土遺物実測図(18)



第45図 出土遺物実測図(19)



第46図 出土遺物実測図(20)

j) 楔形石器(第43図393～403、第44図404～416、第45図427・429～431、図版第25)

主に四辺形の相対する辺に強い打撃による階段状剥離痕やあばた状の潰れ痕を形成する剥片石器である。27点を図示した。階段状剥離が主に相対する二辺にみられ、長方形の短辺に形成され縦に長いもの(393～397・415)、正方形の相対する辺や長方形の長辺に形成されているもの(404～414・431)がある。さらに打撃による潰れ・剥離痕が三角形の頂点と底辺に形成されたもの(401～403・416・427)、四辺形の1対の頂点に潰れ痕が点的に形成されたもの(430)、紡錘形で小型の残核状のもの(398・399・429)がある。石材はすべてサヌカイトである。縦に長いものには肉厚な剥片が、横に長いものや正方形に近いものには相対的に薄い剥片が素材となっている。両端の階段状剥離のある辺を含めて切った断面形は紡錘形となり、側縁部に槌状剥離面や裁断面を形成するものが高い割合で存在する。

楔形石器は旧石器時代からみられるが、縄文時代になって激増し、弥生時代まで存続するといった悠久な時間幅をもつ石器でもある。地面に置かれた台石の上に素材となる剥片や礫核を置き、それらを敲石でほぼ垂直に打撃する両極打法で生じたものとされる。

用途については、両極打法で発生した剥片の中から石鏃などの製作に適したものを得るという、楔形石器を素材とみる見解と、楔形石器を敲石とともに使用し、対象物(石・骨・木など)を割り砕くための工具とみる見解^{注7}などがある。

k) 楔形石器の剥片・碎片(第44図417～419、45図420～426・428・432・433、図版第25)

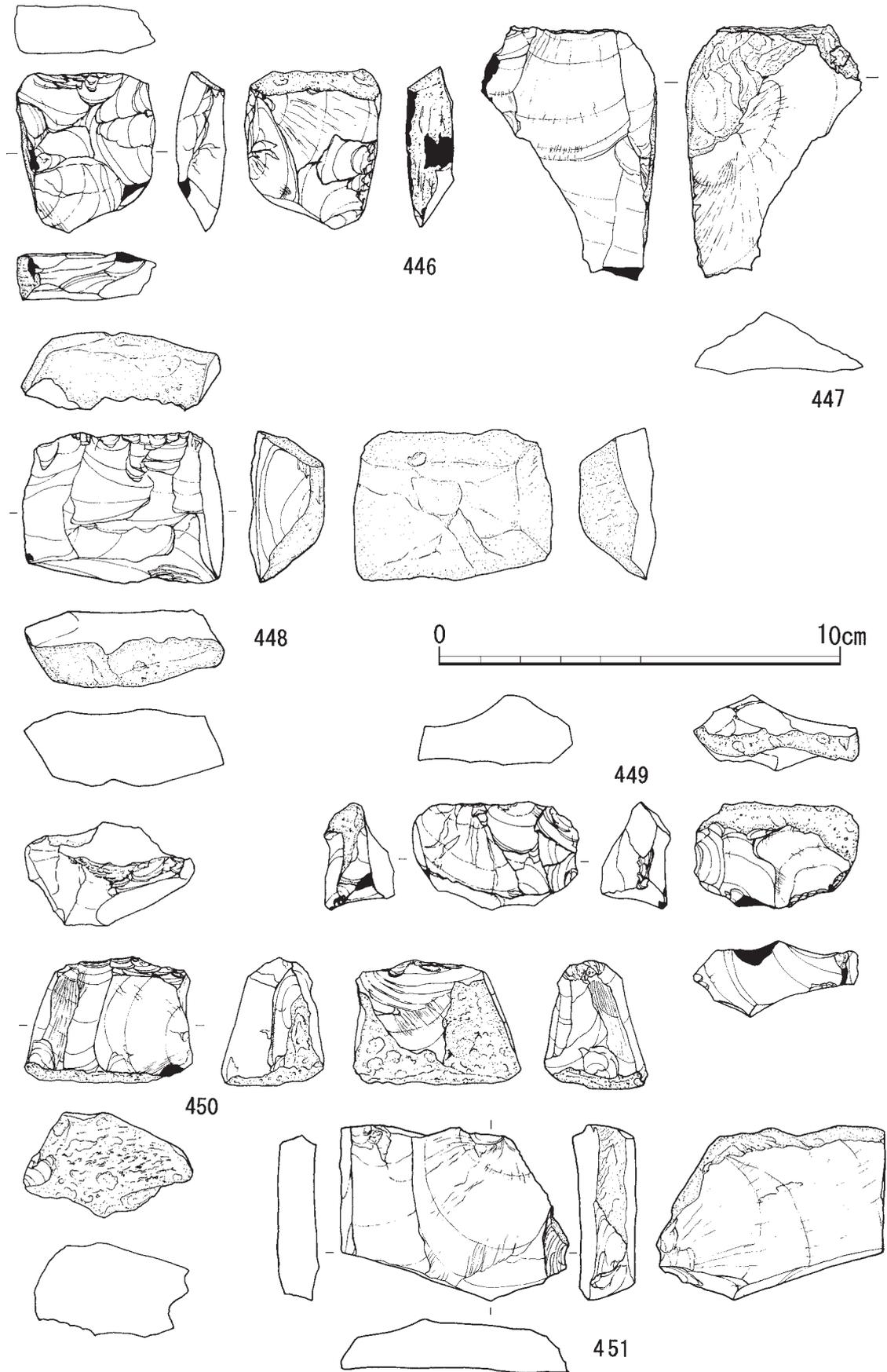
楔形石器の製作または使用に関連する剥片・碎片である。13点図示した。不定形剥片を素材とするもの(417～419・423・428)、断面三角形や台形で、強い打撃によりねじれたように剥離された細長い削片(420～422・424～426)などがある。さらに432・433は細長い縦長剥片で、特に432は細石刃と見紛うようなものであるが、ともに楔形石器由来の剥片である。

l) 剥片(第46図434～441、第49図459、図版第26)

剥片には楔形石器の影響を受けたものが目立つが、その他にも、寸つまりの貝殻状剥片、縦長および横長の剥片、幅広剥片などがある。434～438は横長または貝殻状剥片である。両面加工石器などの加工に伴うポイント・フレーク状の剥片といえる。5点のみ図化した^{注7}が他にも多量にある。441は自然面を打面とする細長い縦長剥片である。背面の頂部には調整剥離がみとめられる。きめの粗い淡灰色のサヌカイトである。439は自然面打面をもつ横長の剥片である。459は礫表を打面に、440は剥離面を打面として剥離された幅広剥片である。最終的に剥離される前に、幅広剥片を剥離した痕跡をとどめている。440は濃青黒色のチャートを石材としている。

m) 石核(第46図442～445、第47図446～451、第48図452～456、第49図457・458、図版第26)

両極打法を用いて剥片剥離作業が想定される、楔形石器以外の石核についてみる。主なもの17点を図示した。大きく見ると、Ⅰ類：板状および不定形の剥片を素材に、その縁辺部から直線状または求心的に横長、幅広、不定形などの剥片を剥離したもの、Ⅱ類：厚みのある礫核の縁辺部より同じく求心的な剥離を施したもの、Ⅲ類：打面転移を繰り返しながら幅広剥片や縦長剥片を採った残核などである。全体的に、打面は自然面が多く、打面調整はほとんどみられない。



第47図 出土遺物実測図(21)

I類(442～447・451・457・458)

442は下端および表面に自然面を残し、腹面側で打点を移しつつ求心的な剥片剥離が行われ、背面側の上端から幅広の縦長剥片が1枚得られている。443は表面中央に稜がはしり、断面三角形を呈する。自然面を打面として直線状に剥片剥離を試み、腹面側で貝殻状剥片やすづまり剥片を得ている。444・445は厚みのある三角形に近い素材の頂部や縁辺部から横長剥片を剥離したものである。445は自然礫面を打面とする。444はネガ面で構成された裏面の縁辺に調整剥離がみられる。446は厚手の四角形に近いもので、側縁3辺に自然面を残す。背面の長軸に沿う縁辺から幅広の横長剥片および貝殻状剥片が採られている。腹面右縁辺に細かな階段状剥離が認められる。447は自然面を大きく残す不定形剥片を素材に、腹面側で幅広縦長剥片を剥離している。451は板状の幅広縦長剥片を素材に、表面の長辺縁部から自然面を打面として幅広剥片を剥離したものである。

457は大型の板状の剥片素材である。自然面を打面に表面で三角形の縦長剥片が採られ、それに先行して左下半で横長剥片がとられた痕跡がある。削器などの素材を得たものであろう。458は厚手の礫表皮剥片で、礫面を打面に幅広の横長剥片を採ったものである。

II類(448～450・454～456)

448は裏面を自然面とし、上端から打点を移しつつ不定形剥片や幅広剥片を剥離している。上端の縁辺部には強い打撃による細かな階段状剥離痕がみられる。449は厚手で不定形な船底形に近い形態で、表面側には自然面を打面に、裏面には下端のポジ面を打面に剥離された痕跡がある。いずれも小型の横長剥片や貝殻状剥片をそれぞれ1～2枚得たとみられる。

450は下面および片面に広く礫面が残る。上辺から縦長剥片が、側縁から幅広横長剥片が剥離されている。

454は目的的な剥片はとられておらず、分割された礫核または残核である。礫表を下面および一縁辺にとどめている。455は厚い素材の片面に求心的な剥離痕をとどめ、中・小型の横長剥片および幅広剥片を得ている。456は厚みのある亀甲形で、片面に自然面を大きく残し、腹面側にて求心的な剥片剥離をおこなった痕跡をとどめる。幅広剥片や貝殻状剥片などが採られている。

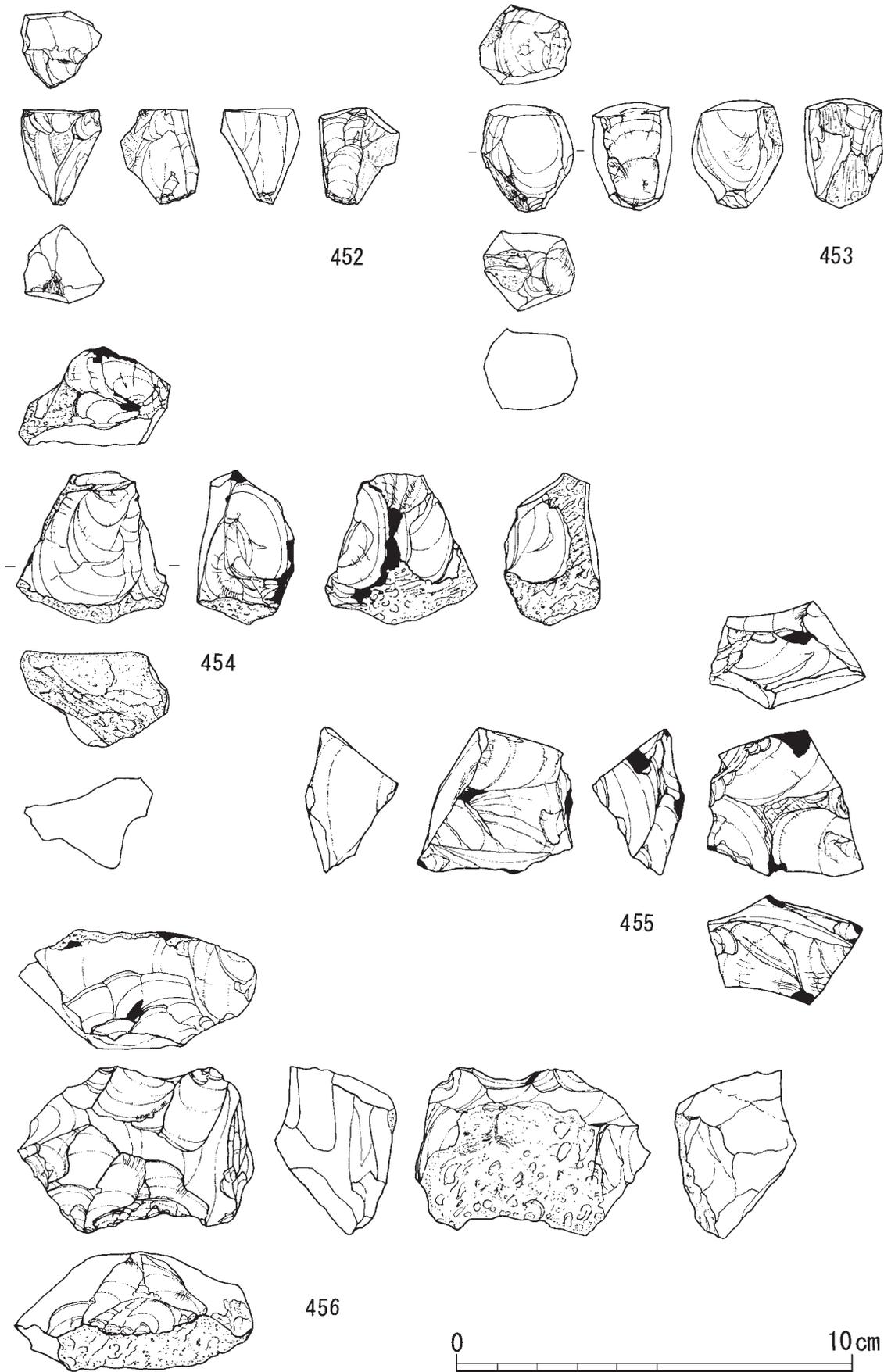
III類(452・453)

452は、円錐形に近い剥離打面をもつ小型の残核である。尖った下端部は硬いものに強く押し付けられたことによるあばた状の潰れ痕をとどめ、両極打法の痕跡もある。小型の縦長および不定形剥片などを剥離している。453は打面転移を繰り返しつつ、剥片剥離作業の最終段階を示すサイコロ形の残核である。幅広・縦長剥片が得られたのであろう。

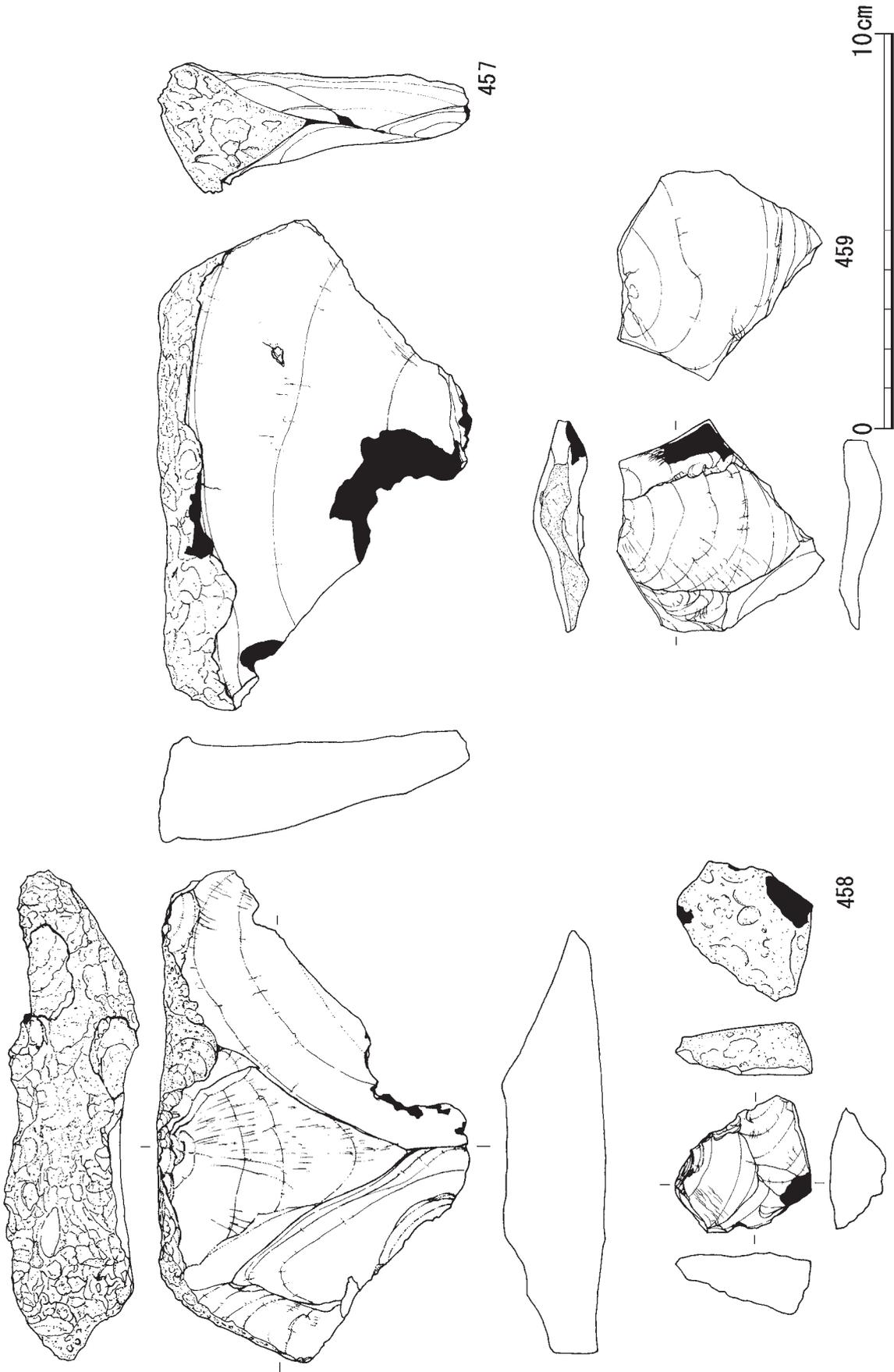
n) サマカイト素材礫核(第50図460・461、図版第26)

2点ある(460・461)。460は表裏面を粗く整形して亀の甲形にしたものである。216gを測る。

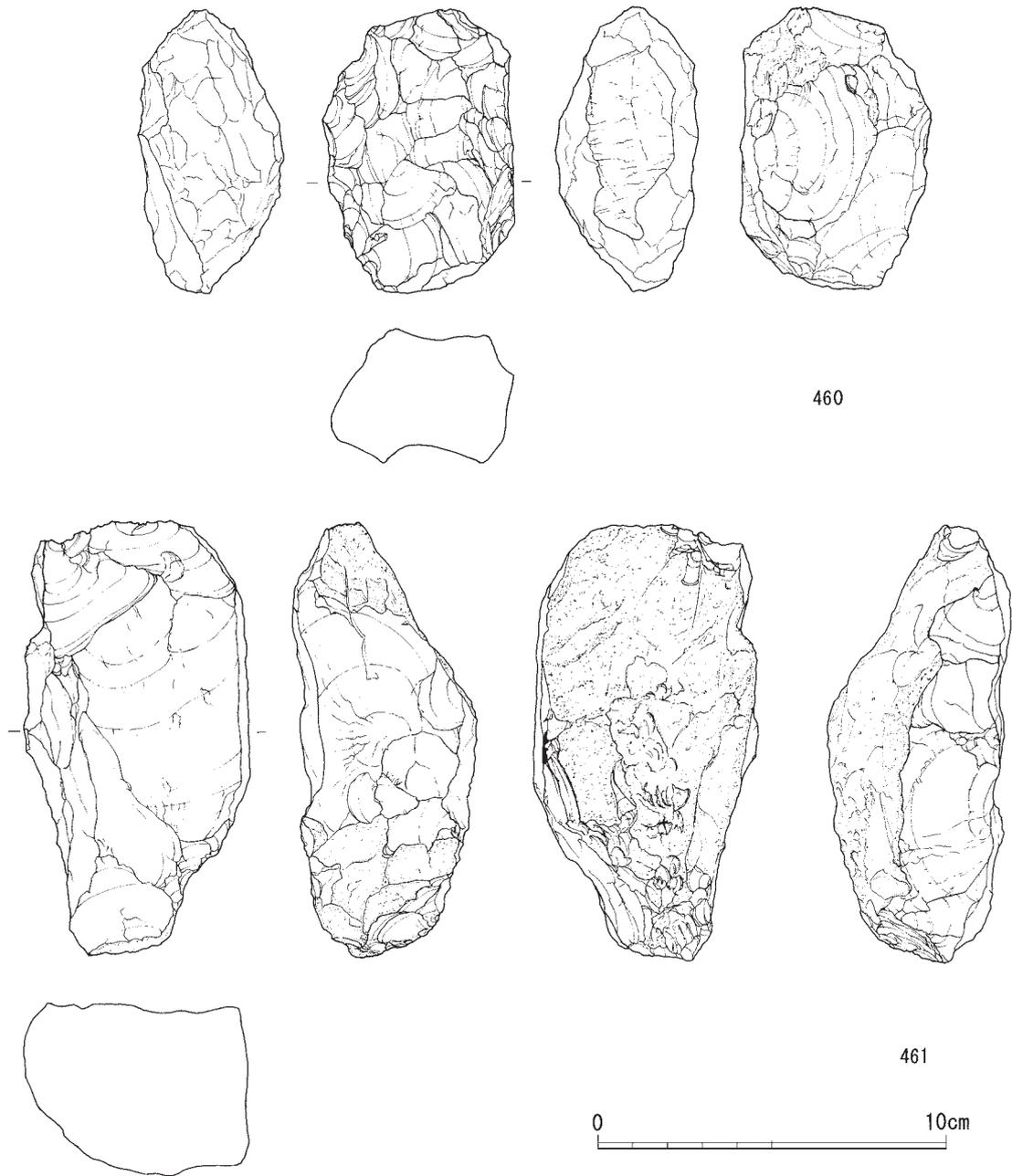
461は片面に礫表を大きく留めた大型のもので、もう片面と1側面は分割面となっている。断面形が鋭角となる片側先端部で大きく2枚の剥片が剥離されているが、歪みが大きく目的素材は得られていない。525gを測る。2点の礫核は大きく、消費地にもち込まれた素材として注目さ



第48図 出土遺物実測図(22)



第49図 出土遺物実測図(23)



第50図 出土遺物実測図(24)

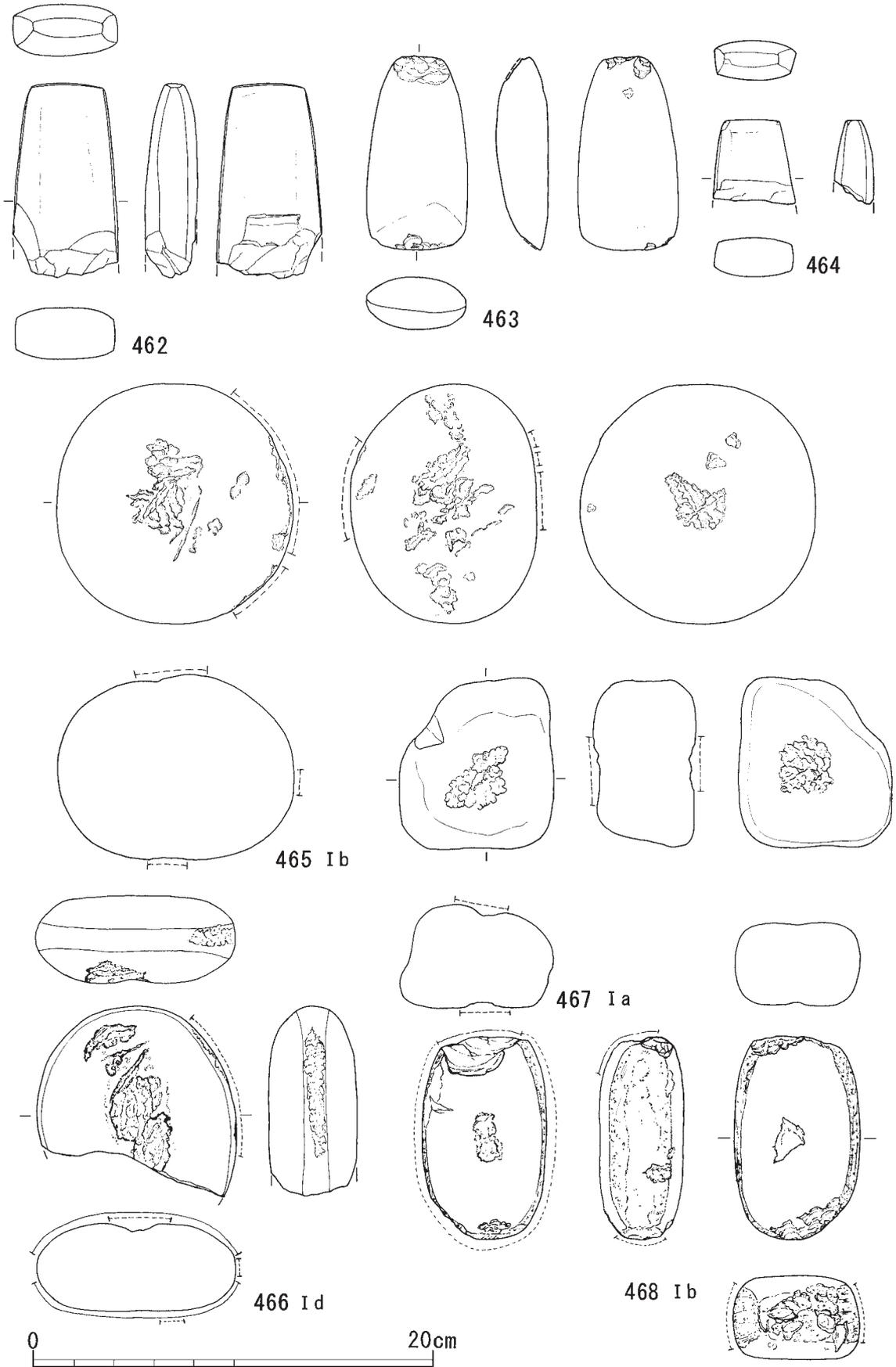
れる。

(増田孝彦・黒坪一樹)

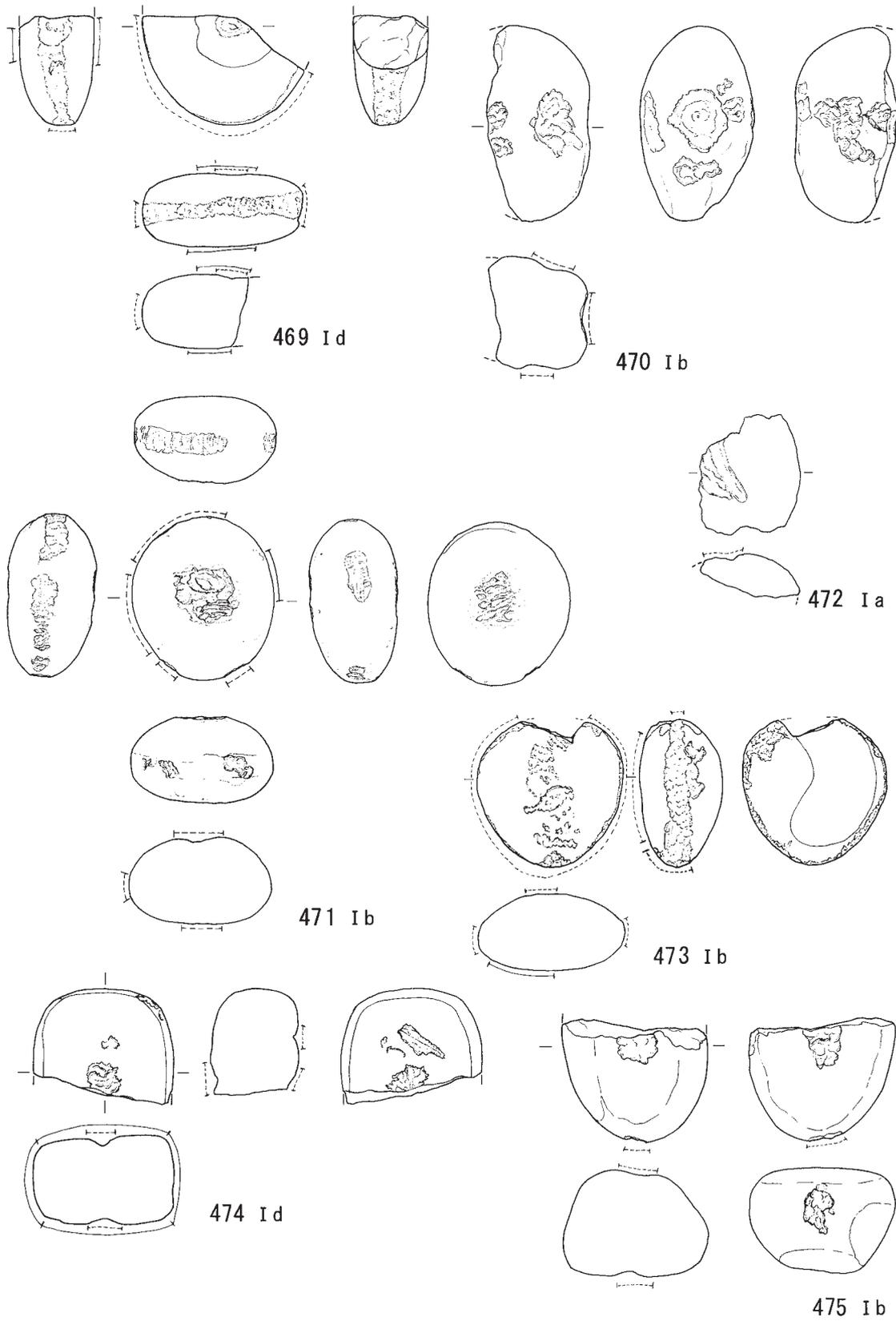
b. 礫石器

a) 石斧(第51図462~464、第56図510・511・514、図版第27)

磨製石斧は3点ある。462は全体をよく研磨された扁平な素材を用いている。刃部を激しい打撃により破損している。基部と両側縁は明瞭に面取りされている。463は厚みのある礫を用いた片刃の石斧である。基部端面に剝離痕・潰れ痕がついている。464は刃部から中間部までを欠損している。462と同じく扁平素材のよく研磨された石斧である。基部端面および両側縁の面取りは顕著で完成されている。



第51図 出土遺物実測図(25)



第52図 出土遺物実測図(26)

打製石斧に関するものは、完形品が1点(514)、破片が2点(510・511)ある。510と511は節理で薄く剥がれた破片で、端部に打撃によるつぶれ痕や剝離痕が形成されている。514は扁平な楕円形の自然礫を素材に、その周縁部を部分的に調整加工し、円い端部を土掘り具の先端(刃部)として使用したものであろう。3点とも頁岩または粘板岩を石材としている。

b) 敲石類(第51～55図465～500、図版第27・28)

礫石器で敲石および磨石を包括して敲石類とした。法量(長さ・幅・厚さ・重さ)はさまざまで、形態は、扁平(楕)円、卵型、細長い棒状のものがある。石材は砂岩・花崗岩を主とする。礫形、使用痕、使用部位により、以下のように分類した。

I a類：(楕)円礫の表裏面に敲打による凹み・あばた痕をとどめるもの

I b類：(楕)円礫の表裏面の凹み・あばた痕+周縁部の敲打痕・剝離痕

I c類：(楕)円礫の表裏面の凹み・あばた痕+表裏面の磨面

I d類：(楕)円礫の表裏面の凹み・あばた痕+周縁部の敲打痕・剝離痕+表裏面の磨面

II a類：(楕)円礫の表裏面に滑らかな磨面が形成されたもの

II b類：(楕)円礫の表裏面の磨面+周縁部の敲打痕

III a類：円礫の側縁部の全周または一部に敲打痕をとどめるもの

III b類：楕円礫に側縁部の全周または一部に敲打痕をとどめるもの

IV類：細長い礫の両方または片方に敲打によるあばた痕や剝離面をとどめるもの

敲石類のなかでもっとも顕著な出方をみせるのはI類の凹石である。

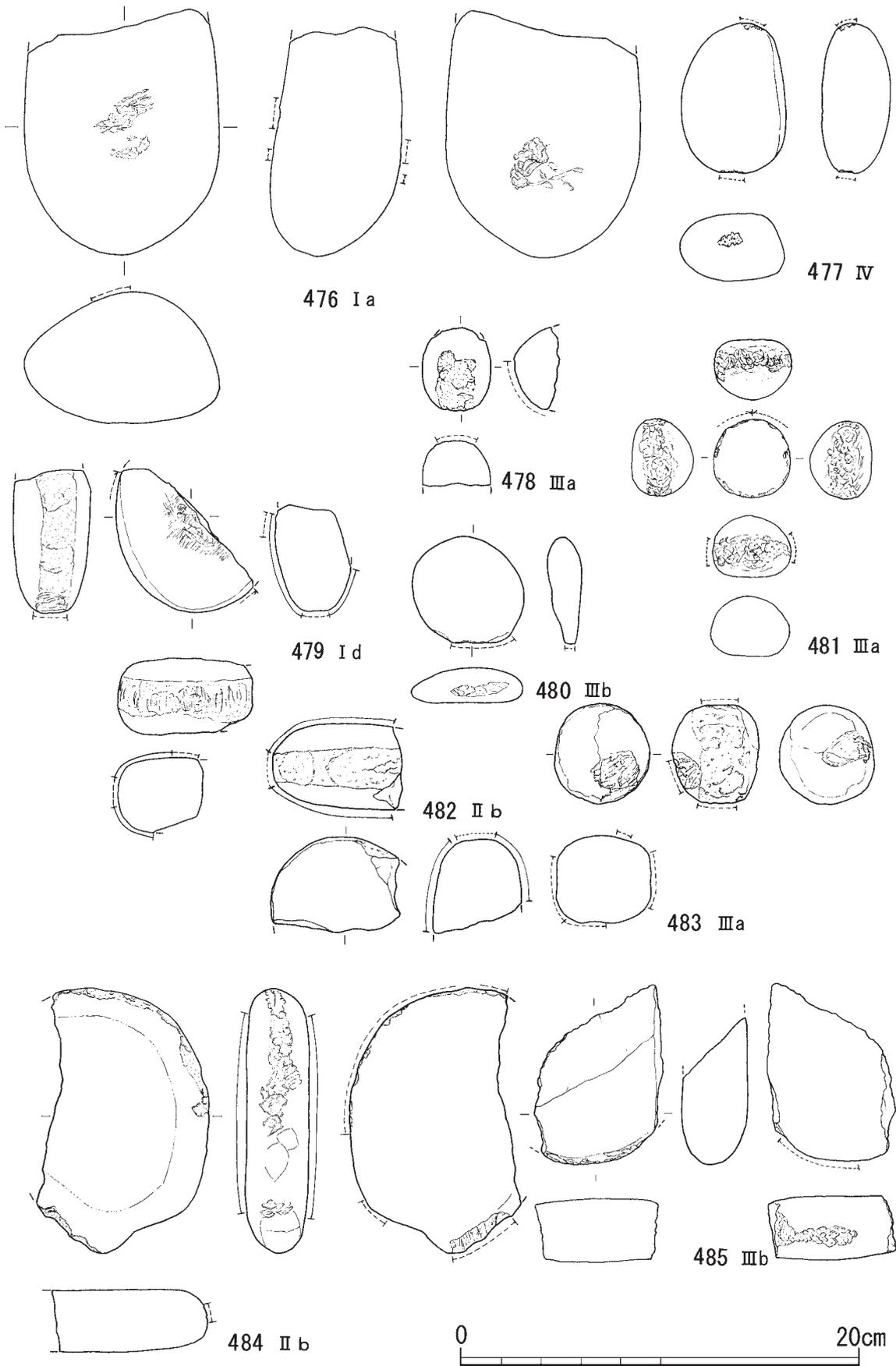
I類は(楕)円礫の表裏面または片面に敲打による凹みやあばた痕を有するいわゆる凹石で、その他の使用痕や形成部位を複合的に有するものを考慮して上記のとおり4つに細分した。

II類はいわゆる磨石の類である。表裏面に敲打による凹みをもたないものである。表裏面に滑らかな磨面のみが形成されているものをII a類、加えて周縁部に面的な敲打痕をとどめているものをII b類とした。このII類は植物食利用具の一つとして、石皿とともに堅果類などのすり潰しに使われた可能性が高いと考えられる。ただ、破損割合が高く、かつ表裏面を磨っただけの単一機能の磨石(II a類)は493の1点のみという点から、本地点においては石器製作具への転用が進んだか、あるいは植物食利用は低調であったことがうかがえよう。

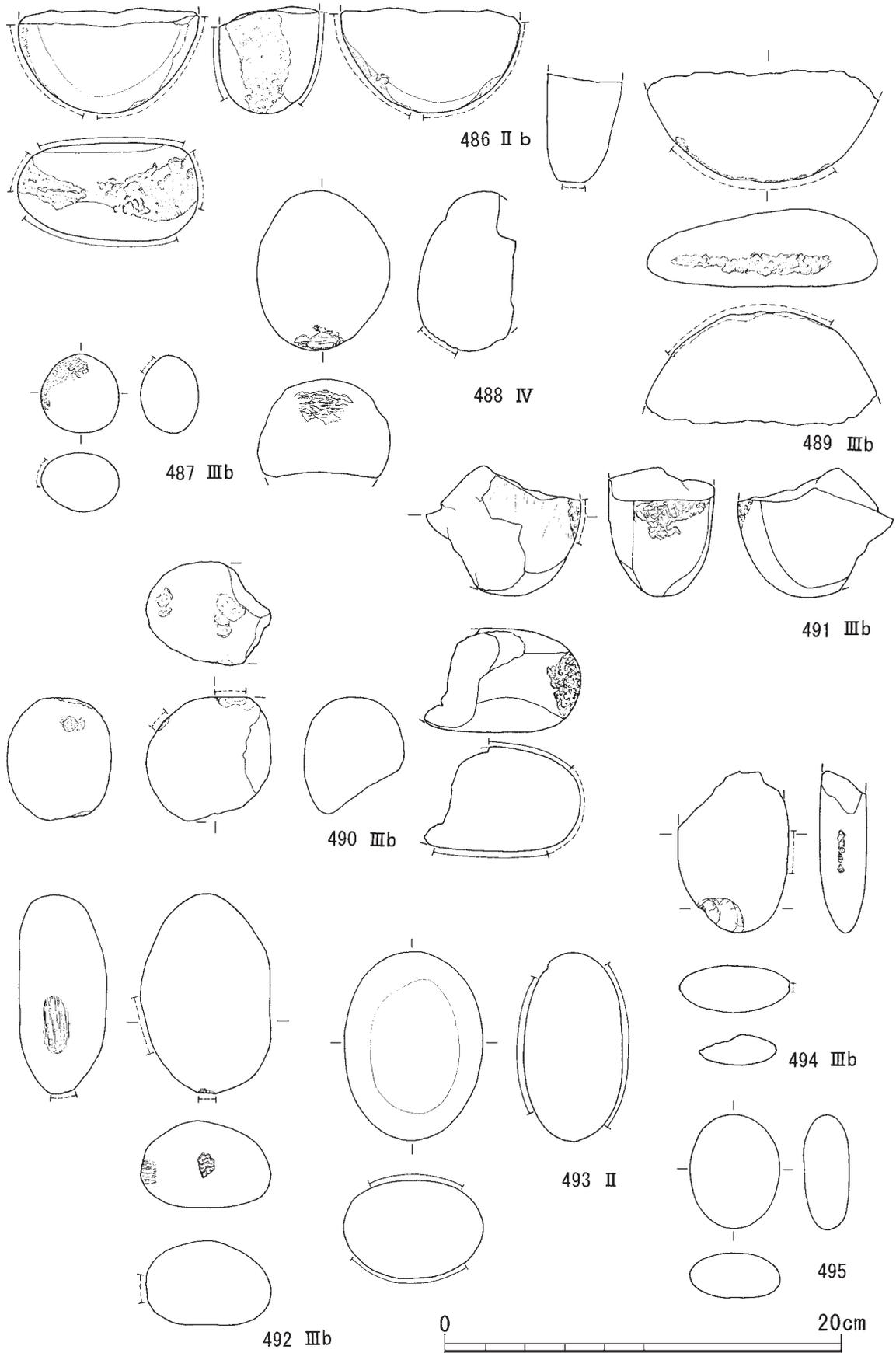
III a類は円礫の周縁部にあばた状の敲打痕をとどめるもので、200g以下の小型のものが目を引く。石器製作のハンマーとして特徴的なものである。III b類は、石器製作用のものおよび植物食利用具としても考えられるものを含み、大きさに幅がある。

IV類は楕円礫や細長い礫の端部を使用するもので、旧石器時代以来、石器製作や堅果類の殻割りなどに用いられたものであろう。今回のものは477を除き、激しい打撃による剝離・打裂痕や中間からの折損など、石器製作具としての色合いが濃いものである。

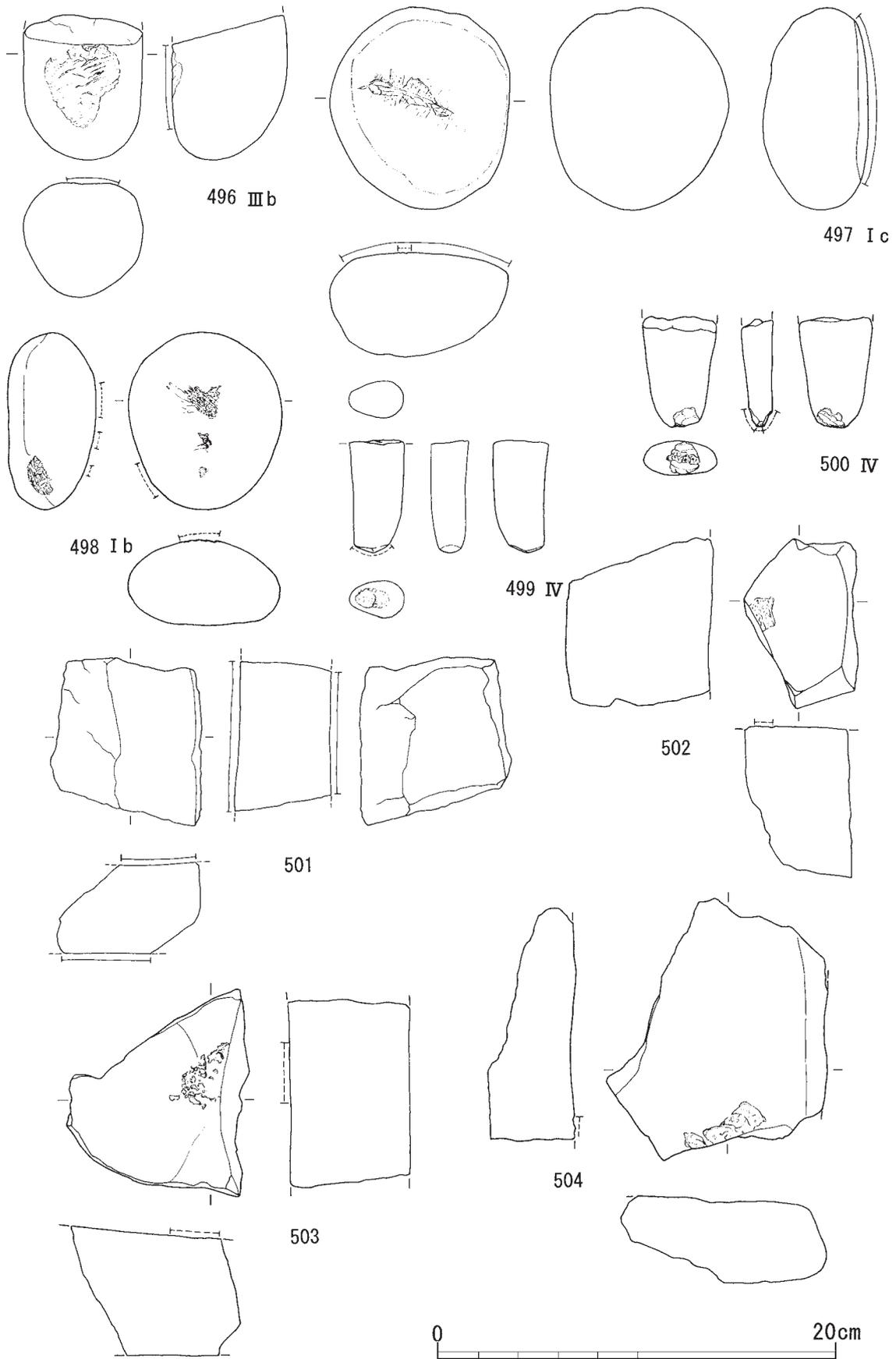
一般的に敲石類は植物食糧の調理加工具、石器製作具、朱や毒の精製関連具、皮なめし具などの用途が考慮されている。今回の資料はほとんど石器製作具と考えられるものである。根拠としては、楔形石器や、大量の剝片・碎片が出土している状況から両極打法や石器製作ハンマーの存



第53図 出土遺物実測図(27)



第54図 出土遺物実測図(28)



第55図 出土遺物実測図(29)

在を如実に示す資料が多いこと、調理作業ではあまり発生しない激しい剝離・打裂痕や破損が顕著であること、後述する堅果類の磨り潰し用の石皿がほとんど皆無であることなどがあげられる。両極打法の痕跡は、線條の敲打や押圧による潰れをもつものが敲石類Ⅰ類に多いことから、石器製作ハンマーの存在はⅢa類・Ⅳ類の顕著な存在から明らかである。使用による剝離・アバタ痕および摩滅による減りではなく、半割や折損など、機能が大きく損なわれているものを破損とみると、図化した敲石類36点のうち、破損しているものは23点を数える。高い破損率といえる。

c) 台石・石皿(第55図501～504、第56図505～508、図版第27・28)

いずれも敲石類とのセットで使用されたと考えられるものである。台石は平坦な広い面にあばた状の敲打痕、線條の凹み、さらに磨痕などの明瞭な使用痕をとどめるもの、石皿は主に磨面を広く有し、使用により皿状に滑らかな凹みが形成されているものとした。

501・507・508の表面は、自然面とするにはやや平滑なため、使用部としたものである。502～504は表面中央部にあばた状の潰れ痕をとどめ、505はややいびつな円礫の凸面中央部に押し付けたような線條の凹みがみられるものである。台石はいずれも楔形石器と関連している可能性はあるが、楔形石器の縁辺を想起させる線條の凹みをもつ505は特徴的である。

506は、扁平な礫の片側表面がやや滑らかなへこみをもつことで石皿とした。しかし、磨面の状態および範囲が安定していないことや、大きく破損していることから、堅果類の磨り潰し用とは思えないものである。敲石類同様、台石・石皿についても破損率を示してみる。台石・石皿の総数8点はすべて破損している。植物食利用の台石・石皿では考えにくい高い破損率である。石器製作に代表されるような非常に激しい使われ方が窺い知れよう。

d) 石錘(第56図509、図版第27)

1点のみ出土した。扁平な自然礫の両先端部を打ち欠き、明瞭な繫り部を作っている。加工のための打撃は表裏両面から入っている。

e) 砥石(第56図513、図版第27)

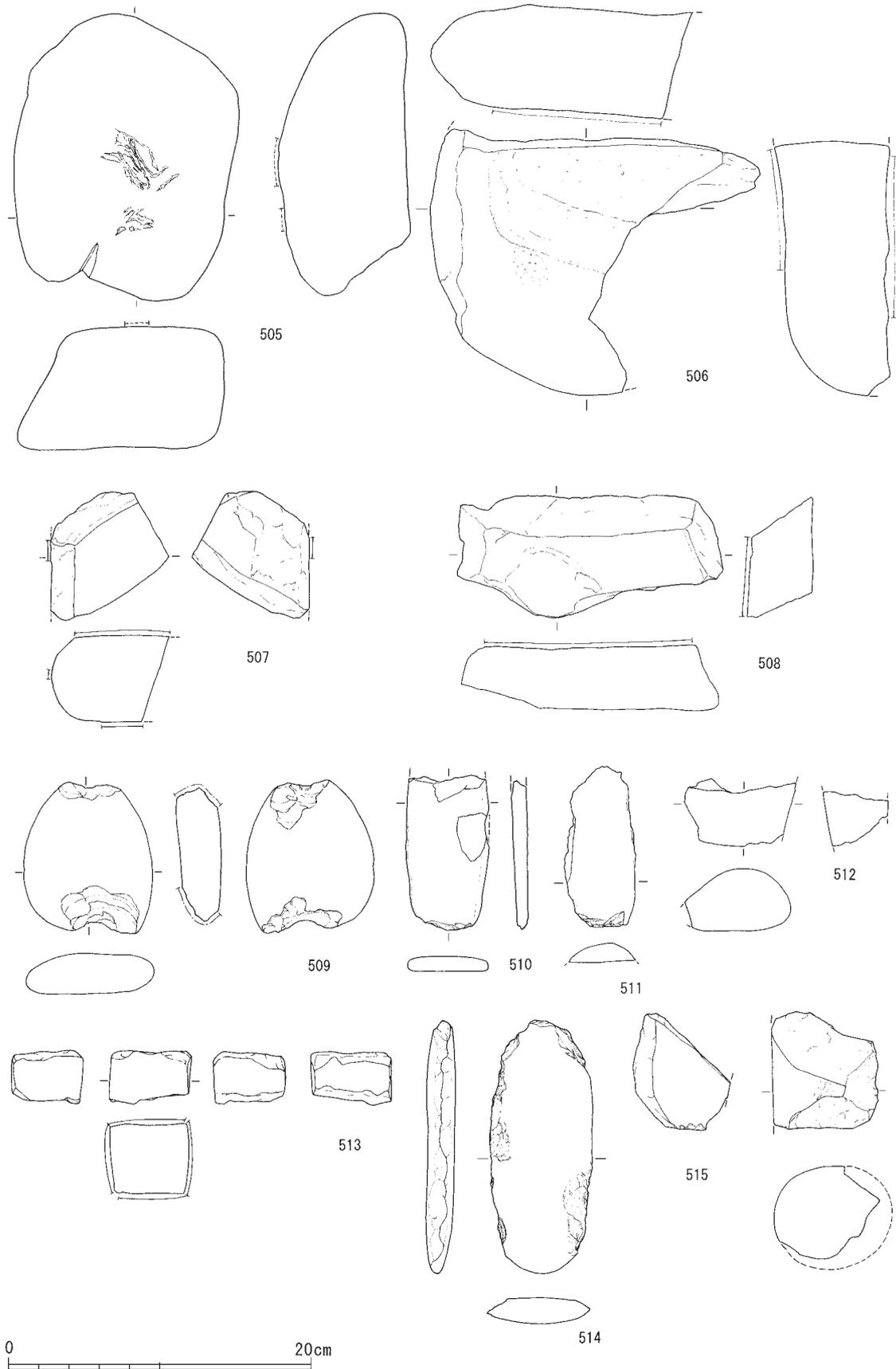
1点ある。下半は欠損しているが、上面・四側面すべて使用により研磨され、非常に滑らかとなっている。石材は砂岩である。所属時期は不明であるが弥生時代以降のものであろう。

f) 搬入礫(第54図495、第56図512・515)

遺跡に持ち込まれたであろう礫は多量にある。それらのうち3点(495・512・515)を示した。495は敲石類Ⅲ類としたものと同質の礫素材、512・515は珪質の硬い石材で、ハンマーやその他の石器への加工用であらう。(黒坪一樹)

c. 小結(石器のまとめ)

今回の主に8トレンチからは多量の石器関係資料が出土した。多くの器種があり、定形的な剥片石器では石鏃・尖頭器・石錐・石匙・削器・使用痕ある剥片(UF)・加工痕ある剥片(RF)・搔器・楔型石器がある。これらの製作・使用に伴う剥片・石核も多く、剥片は定型的な石器のおよそ10倍の量がある。石材はほとんどサヌカイトであるといってよい。チャート・頁岩・石英などはごく少ない。



第56図 出土遺物実測図(30)

剥片石器および剥片・石核についての特徴をみていくと、まず、石鏃と楔形石器の多さがあげられる。石鏃はもっとも多く出土した石器である。基部がくぼむいわゆる凹基式鏃が多いが、微妙な形態上の変異を捉えるために細分した。石核から素材剥片が形成される時の予測不可能な剥離の振幅の大きさや作り手の好みなどが反映され、形態の微妙なカーブや先端部の加工に差が生じた。形態の多様さとともに、肉厚なものから薄く軽量のものまである石鏃の重さは、殺傷効果や飛距離に大きく関係していると推測され、狩猟対象により使い分けられたのであろう。

縄文時代になって、主に石鏃の製作に関し飛躍的に普及した技術に、楔形石器による両極打法がある。実際、石鏃と楔形石器の増加は正比例し密接な関係が指摘されている。台石などの上に楔形石器を置き、上から垂直に敲石で打撃を加えて素材剥片を得るものである。この場合、楔形石器は素材となる。^{注13}本地点においても、石鏃製作のための素材剥片(ポイントフレークなど)を多量に得るため、両極打法が採用された結果、楔形石器が台石・敲石とともに多く用いられた。

さらに、短辺に階段状剥離やつぶれ痕を有する、形の整った楔形石器(393～396など)については、文字通り骨や木を割るために打ち込まれた楔として用いられた可能性がある。この場合、楔形石器は工具となる。^{注14}

素材、工具のいずれであっても、打撃作業中に相対する端部に細かな剥離痕が生じ、その結果として小剥片や微細な石屑が多く生成されるため用途の限定は難しい。素材か工具か、複数の用途を視野に入れておく必要がある。^{注15}石鏃・楔形石器が多出し、本遺跡と時期が重なる遺跡に、^{注16}向出遺跡(大阪府阪南市)がある。

削器の多さも留意すべき事象である。定形的な削器以外にも加工痕のある剥片には削器の刃部片的なものが多い。削器の素材は石鏃・楔形石器の素材とは特に大きさに差があり、削器の方が大きい。両極打法との排他的な関係がみてとれる。

両極打法以外にも石器製作に関係する多種多様な石核・剥片がある。石核には主に自然面を打面とする板状の剥片を素材とするもの(I類)や、礫核素材のもの(II・III類)などがあり、多くは打点を横方向に移動させつつ求心的な剥片剥離をおこなっているものである。自然面を打面とするものが多く、打面調整や打面再生はほとんどみられない。生まれた剥片には横長・縦長剥片、寸づまり剥片、貝殻状剥片などがある。

礫石器については、磨製石斧・打製石斧・敲石類・台石・石皿・石錘がある。石斧・石錘は少ない。もっとも顕著な出方を示すのは敲石類と台石である。敲石類はいわゆる凹石の形態が非常に多い。その使用痕を観察すると、線條に長いものが押し付けられたり、擦過したりして形成されている。これらの使用痕は両極打法による楔形石器の使用によるものであろう。本来、植物食利用の調理具としても考えられる遺物であるが、ここではその使用痕の状態や高い破損率さらに石皿の欠如などから石器製作具の色彩が濃厚である。

こうした多用な器種の石器、多量の剥片や、石核・素材礫核などの大部分は、縄文時代中期～後期の時期とみられるが、今回のおびただしい縄文期の遺構群(住居跡・土壇墓)に伴うものではなく、後世の人あるいは自然の営為により本地区に残されたものである。したがって、今回の遺

構群と同時ではないが、縄文時代後期のある時期に、本地区あるいはその周縁で石器製作が行われていたとみられ、石器製作空間の一角を掘り当てていることは明らかである。

(黒坪一樹)

4. まとめ

長岡京期

長岡京期の溝 S D 368・369は東西方向よりも約7～8°ほど北に振っている。現在残る水田畦伴と重なるが、長岡京跡の復原条坊には合致しないものである。両溝に挟まれた空間部分は3.2～3.5mあり、築地等の施設を想定することは可能だが問題が残る。幅が広く、空間部分には柱穴も存在しない。両溝とも底面は凹凸があり、溝掘削後に必要な土砂を確保するために再掘削した可能性がある。そのため、空間部分の外側の掘形の幅が一定でない。溝 S D 369の延長部にあたる右京第927次調査地の S D 01では、この溝上に建物跡が推定される部分があり、この部分より北側には南北方向の水田畦畔が残っており、なんらかの区画の存在が想定される。一方、東側の低位段丘上にも延長部分に相当する畦畔が存在することから、区画が台地上にも延びていると考えられる。

低位段丘上の調査で検出した掘立柱建物跡 S B 40・120、溝 S D 02・30については、正方位を示すもので、溝 S D 368・369とは方向が異なる。長岡京期の建物配置や土地利用を考える上で重要な資料となる。同じく、鍛冶生産関連の遺構・遺物のは、中世の邸宅内に付随する鍛冶工房を推定したが、今回出土した鍛冶滓は、中世の遺物が確認されなかったことや、右京第70次調査で竪穴式住居跡から鉄滓が出土していることなどから、古墳時代～長岡京期の可能性も考えられる。

古墳時代

古墳時代の遺構としては、6世紀中頃を中心とする竪穴式住居跡が8基検出された。規模的には大差ないものであるが、竈の有るものと無いものがある。竈を有するものでは、時期により竈の方向が異なるようで、古い段階では北東方向、新しい段階では北西方向を向く。低位段丘上では、6世紀後半～7世紀前半の竪穴式住居跡が検出されており(右京第70・910次調査、8トレンチ周辺ではこの時期の住居跡は認められず、6世紀後半以降には集落の中心は台地上に移動したものと考えられる。

縄文時代

検出した遺構は、後期の竪穴式住居跡8基、中期・後期の土坑(柱穴等を含む)約220基がある。竪穴式住居跡に関しては、不整形なものが多く、支柱穴の位置も住居の辺に沿わず、その位置が極端にズレたりしているものが多い。内部から出土する遺物も少ない傾向があった。また、石器の出土は、ごく少量の石鏃・敲石・石斧片が出土する程度である。サヌカイト剥片の出土も検出面付近に限られており、石器の製作は、竪穴式住居が廃絶した後に開始されたと考えられる。

検出された土坑(柱穴等を含む)は、礫の有無・形状・遺物出土状況などで3種に分けられる。

a.土坑内部から焼骨片が検出されたもの

いずれも、焼骨片は数mm～1cm程度の細片であり人骨かどうか不明である。他にもこれらの土坑とよく似た形状、遺物の出土状況のものがあるため、掘削中に微細な焼骨片を見落としている可能性もある。南側約40mの右京第943次調査では、火葬人骨を埋納した土坑が見つまっているため関連性が問われる。焼骨が検出されたものは、S P 436・S K 540・S T 560・S T 620があり、S P 436・S T 620は中期の土坑であり、S K 540・S T 560は後期の土坑である。このうち、礫を伴うもの(S K 540)、土器・石鏃1点を伴うもの(S P 436)、石鏃を伴うもの(S K 540)、台石を伴うもの(S P 436)がある。剥片の出土量は、S T 560が46点と多いものの、検出面からの出土である。その他の土坑は、最大でも3点までであることから、石器製作以前に設けられた土坑と考えられる。

b.土坑内部に礫が入るもの

さらに2種類に分けることができる

(1) 検出段階で集積状に礫が見えているもの。S X 346(石鏃1点、剥片59点)、S K 530(剥片石器1点、剥片22点)、S K 588(石鏃1点)がある。

(2) 土坑中位に礫が出土するもの。S P 503(剥片28点)・S K 507(剥片3点)に分けられる。

(1)については墓である可能性も考えられるが、焼骨等の出土は認められなかった。(2)については、礫が角礫で大きい、または円礫(小泉川の礫)を土坑内に並べており、S P 503のように断面が袋状になるものも認められることから、貯蔵穴の可能性もある。

いずれも後期の土坑であるが、細片化した縄文土器とともに、石鏃、剥片石器、サヌカイトの剥片の出土量に多寡が認められる。このような剥片出土量の違いは、石器製作以前と以後に設けられた土坑の違いと考えられる。

c.a・bともに該当しないもの

大半の土坑がこれに相当する。ほとんどの土坑は、底面からは遺物が出土せず、遺物は土坑の深さの約2/3より上半に限られる傾向がある。このことから、土坑外面を覆っていた土砂とともに小片化した土器が土坑内に落ち込んだとも推定される。ゴミ穴の可能性もある。いずれの土坑にも、サヌカイト剥片類の出土が1～7点みられる。

これに対して、石鏃1点(S P 403・486・600、S K 506・527・697、S T 545)、その他の定形的な石器が出土するものでも、サヌカイト剥片の出土は1～2点と少ない。堆積状況からすると、浅い窪みに堆積したものと考えられるS K 506・527を除くと、大半が墓である可能性もある。

上記したもの以外に石鏃・剥片・剥片石器・礫石器が飛びぬけて多いものには、S T 545(石鏃1点、礫石器1点、剥片32点)、S K 506(剥片23点、礫石器1点)、S K 544(石鏃1点、剥片石器2点、礫石器3点、剥片32点)、S K 621(剥片石器1点、剥片11点)、S X 373(剥片15点)、S X 617(剥片石器1点、剥片27点)がある。堆積状況から浅い窪みに堆積したものと考えられるS X 617の除くと、石器製作に関係する土坑と考えられる。

8トレンチにおける包含層や縄文時代遺構検出面で出土したおびただしいサヌカイト製石鏃、剥片は、この地が石器製作場所となっていたことを裏づける。このことから、遺構群の推移をみ

ると、中期段階では土坑が広がっており、後期段階で竪穴式住居が営まれるとともに、前後して土坑が作られる。その直後、SH440埋土にみられるように、遺構面全体に広がっているサヌカイトの剥片の出土から石器製作の場となり、石器製作後、再び土坑が設けられたと考えられる。出土した土器から、中期末の土坑は北白川C式、石器製作以前と考えられる竪穴式住居跡および前後する土坑は後期中葉～後葉の元住吉山Ⅱ式、石器製作およびその後の土坑の時期は元住吉山Ⅱ式～宮滝式の段階に比定できる。

今回の調査で出土した碧玉製の玉、2トレンチSP04から出土した玉の原石と考えられる緑色凝灰岩、右京第943次調査の縄文時代後期の火葬墓壙SK26から出土している加工痕のある碧玉製玉破損品、平成21年度に8トレンチ南側で長岡京市教育委員会で実施された右京第975次調査でも穿孔途上の破損品の碧玉が多数検出されており、縄文時代後期には石器製作とともに玉作りも行われていたと考えられる。

今回の調査では、長岡京の復元条坊に合致しない溝や、古墳時代後期・縄文時代中期末、後期後葉の各時期における土地利用の様相が明らかとなった。

(増田孝彦)

注1 高橋美久二ほか「長岡京跡右京第70次(7ANOIR地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第9集 長岡京市教育委員会) 1982

注2 増田孝彦「4. 長岡京跡右京第910次(7ANOIR-5、NNT-3地区)・941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

注3 中川和哉ほか「京都第二外環状道路関係遺跡 平成19年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第131冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

岩松保ほか「3. 大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

注4 注2に同じ

注5 都出比呂志・増田富士夫・泉拓良・千葉豊・富井眞

注6 松下道子・山本弥生・荒川仁佳子・村岡弥生・井上聡・山川幸乃

注7 寄生虫卵分析業務は、株式会社パレオ・ラボに委託し分析を行った。

注8 代表的なものを実測した。実測図における剥片石器の黒く塗りつぶした部分は新しい破損部である。石鏃は機能的な差を表すものではないが、微妙な形態の違いを示すため細かく区分している。加工痕ある剥片、使用痕ある剥片・搔器は使用部位と使用痕を実線で表示している。礫石器は石材の質感を表すための自然面を描き出さず、使用痕・使用部位のみを記入している。さらに敲石類は形態区分の類型を記し、あわせて使用痕の部位と種類を示すため、破線(敲打痕・擦過痕)、実線(磨痕)、一点破線(剝離痕)を肉眼および触感によりわかる範囲で添えた。

注9 礫石器の石材は砂岩・花崗岩・頁岩・粘板岩などが主とみられるが、精確な鑑定を行っておらず、今回、一覧表には記載できなかった。

注10 剥片は便宜的に長さが5mm以上と以下に分けた。5mm以下のものは4,003点のうち110点あり、そ

のなかには1mm程度の碎片も含んでいる。

- 注11 サヌカイトにはいくつかの質の違いがみられる。肉眼観察から、破砕面は黒くて質感の滑らかなもの・破砕面は黒灰色で質感がガラス質を帯びてややざらつくもの・破砕面は淡緑灰色で石理が発達し白いスジの多く入るものなどがある。最後の淡緑灰色で白いスジの多く入るものについては石材欄にサヌカイト淡緑と記した。二上山産や金山産(香川県)など、産地の違いを反映するものと思われる。
- 注12 一部、縄文時代草創期の尖頭器や、弥生土器の出土はないが、弥生時代の可能性を示すもの(石鏃・砥石など)もごく少量ある。
- 注13 田中英司「縄文時代における剥片石器の製作について」(『埼玉考古』第16号 埼玉考古学会) 1977、33~47頁
田中英司「付編 縄文時代の剥片石器製作」(『風早遺跡』庄和町風早遺跡調査会) 1979、187~190頁
- 注14 岡村道雄「ピエス・エスキーユについて-岩手県大船渡市碁石遺跡出土資料を中心として-」(『東北考古学の諸問題』東北考古学会) 1976、75~96頁
- 注15 藤山龍造「3)石鏃の普及と石器製作」(『環境変化と縄文時代の幕開け』雄山閣) 2009、84~85頁
- 注16 山元建・仁王浩司・岡田憲一ほか「向出遺跡 一般国道26号(第二阪和国道)建設に伴う発掘調査報告書」(『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第55集 (財)大阪府文化財調査研究センター) 2000、253~255頁

付表1 石器観察表

定形的な剥片石器と礫石器について作成し、剥片(楔形石器以外)・石核・サヌカイト礫核は割愛した
()は欠損品の残存部および重さを計測したものである

石鏃一覧表

遺物番号	包含層・遺構	石材	形態分類	遺存状況	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
218	包含層	サヌカイト	A-1	先端部欠損	(2.05)	1.5	0.4	(0.9)	第35図
219	包含層	サヌカイト	〃	先端部欠損	(2.5)	1.6	0.45	(1.2)	第35図
220	包含層	サヌカイト	〃	基部片側欠損	2.3	(1.7)	0.3	(0.9)	第35図
221	S K 506	サヌカイト	〃	基部片側欠損	2.15	(1.35)	0.29	(0.5)	第35図
222	包含層	サヌカイト	〃	基部片側欠損	2.15	(1.5)	0.29	(0.5)	第35図
223	包含層	サヌカイト	〃	先端部欠損	(2.25)	(1.7)	0.35	(0.7)	第35図
224	S D 368	サヌカイト	〃	基部片側欠損	(2.25)	(1.3)	0.3	(0.5)	第35図
225	S H 580	サヌカイト	〃	完形	1.95	1.5	0.38	0.7	第35図
226	S D 368	サヌカイト	A-2	基部片側欠損	2.2	(1.55)	0.6	(1.4)	第35図
227	包含層	サヌカイト	〃	先端、基部片側欠損	(2.35)	(1.25)	0.4	(1.2)	第35図
228	S H 440	サヌカイト	A-3	先端部欠損	(1.9)	1.55	0.4	(0.7)	第35図
229	包含層	サヌカイト淡緑	〃	基部片側欠損	1.7	(1.2)	0.25	(0.5)	第35図
230	包含層	サヌカイト淡緑	A-4	基部片側欠損	2.5	(1.9)	0.35	(1.8)	第35図
231	包含層	サヌカイト淡緑	A-5	先端部欠損	(2.35)	1.55	0.3	(0.9)	第35図
232	包含層	サヌカイト	〃	完形	2.1	1.3	0.2	0.4	第35図
233	包含層	サヌカイト淡緑	〃	完形	2.75	1.65	0.32	0.9	第35図
234	包含層	サヌカイト	〃	完形	2.4	1.4	0.35	0.7	第35図

遺物番号	包含層・遺構	石材	形態分類	遺存状況	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
235	包含層	サヌカイト	〃	基部片側欠損	2.0	(1.1)	0.25	(0.4)	第35図
236	包含層	サヌカイト	〃	基部片側欠損	(2.0)	1.2	0.2	(0.4)	第35図
237	S P 436	不明	A-6	完形	1.15	0.9	0.1	0.1	第35図
238	包含層	サヌカイト	〃	完形	1.75	1.25	0.2	0.4	第35図
239	包含層	サヌカイト	〃	完形	1.8	1.2	0.2	0.5	第35図
240	包含層	サヌカイト	〃	完形	1.6	1.1	0.15	0.3	第35図
241	包含層	サヌカイト	〃	完形	(1.25)	1.25	0.23	(0.4)	第35図
242	包含層	サヌカイト	〃	完形	2.0	1.45	0.33	0.8	第35図
243	包含層	サヌカイト淡緑	A-7	完形	2.5	2.1	0.45	1.4	第35図
244	包含層	サヌカイト	〃	完形	2.2	1.65	0.5	1.4	第35図
245	包含層	サヌカイト	〃	先端・基部片側欠損	(1.5)	(1.35)	0.23	(0.4)	第35図
246	S H 400	サヌカイト	A-8	基部片側欠損	2.05	(1.5)	0.2	(0.7)	第35図
247	包含層	サヌカイト	〃	完形	2.2	1.7	0.4	1.3	第35図
248	包含層	サヌカイト	A-9	基部両側欠損	(2.5)	(1.5)	0.3	(0.8)	第35図
249	S K 527	サヌカイト	〃	完形	3.95	1.5	0.25	0.7	第35図
250	S K 544	サヌカイト	A-10	完形	1.55	1.2	0.2	0.2	第35図
251	包含層	サヌカイト	A-11	先端・基部片側欠損	(1.4)	(1.4)	0.3	(0.5)	第36図
252	S D 369	サヌカイト	〃	先端・基部片側欠損	(1.55)	(1.55)	0.31	(0.5)	第36図
253	包含層	サヌカイト淡緑	〃	基部片側欠損	1.6	(1.5)	0.25	(0.5)	第36図
254	S H 384	サヌカイト	A-12	基部片側欠損	3.1	(1.9)	0.3	(1.8)	第36図
255	S D 368	サヌカイト	A-13	基部片側欠損	2.0	(1.1)	0.35	(0.6)	第36図
256	包含層	サヌカイト	A-14	完形	2.0	1.9	0.3	0.8	第36図
257	包含層	サヌカイト淡緑	〃	先端欠損	(2.0)	1.6	0.5	(1.3)	第36図
258	包含層	サヌカイト	A-15	先端欠損	(1.1)	1.8	0.4	(0.7)	第36図
259	S H 370	サヌカイト	〃	完形	1.15	1.45	0.3	0.4	第36図
260	S D 368	サヌカイト	A-16	完形	1.1	1.4	0.25	0.3	第36図
261	S H 380	サヌカイト	〃	完形	1.35	1.35	0.3	0.5	第36図
262	包含層	サヌカイト淡緑	〃	先端部欠損	(1.4)	1.3	0.2	(0.4)	第36図
263	包含層	サヌカイト淡緑	A-17	完形	1.5	1.55	0.3	0.6	第36図
264	包含層	サヌカイト	A-18	完形	2.15	2.0	0.5	1.8	第36図
265	包含層	サヌカイト	A-19	完形	2.15	1.75	0.5	2.2	第36図
266	S D 369	サヌカイト淡緑	〃	基部片側欠損	1.75	(1.6)	0.3	(0.7)	第36図
267	包含層	サヌカイト淡緑	A-20	完形	1.2	1.65	0.25	0.3	第36図
268	S K 347	サヌカイト	A-21	完形	1.6	1.55	0.5	0.9	第36図
269	S P 403	サヌカイト	A-22	完形	1.55	1.15	0.35	0.6	第36図
270	包含層	サヌカイト	〃	完形	1.7	1.0	0.2	0.3	第36図
271	S H 400	サヌカイト	〃	基部片側欠損	2.2	(1.0)	0.15	(0.4)	第36図
272	包含層	サヌカイト淡緑	〃	先端部欠損	(1.95)	1.25	0.3	(0.6)	第36図
273	包含層	サヌカイト	A-23	完形	1.7	1.3	0.35	0.7	第36図
274	S D 369	不明	〃	先端部欠損	(1.25)	1.05	0.2	(0.7)	第36図
275	S H 384	サヌカイト	A-24	先端・基部片側欠損	(1.8)	(1.5)	(0.42)	(1.1)	第36図
276	包含層	サヌカイト	〃	先端部欠損	(1.8)	1.4	0.3	(0.8)	第36図
277	S H 370	サヌカイト淡緑	A-25	完形	1.4	1.1	0.2	0.4	第36図
278	包含層	サヌカイト淡緑	〃	完形	1.55	1.4	0.2	0.4	第36図
279	S H 370	チャート	A-26	完形	1.72	1.4	0.35	0.5	第36図
280	包含層	サヌカイト淡緑	A-27	完形	1.7	1.55	0.3	0.6	第36図
281	S H 370	サヌカイト淡緑	〃	完形	1.5	1.3	0.2	0.3	第36図
282	包含層	サヌカイト淡緑	A-28	先端部欠損	(1.9)	1.4	0.35	(0.7)	第36図
283	S K 522	サヌカイト	〃	先端部欠損	(1.7)	1.6	0.32	(0.8)	第36図
284	S D 368	サヌカイト	〃	基部片側欠損	2.2	(1.1)	0.29	(0.6)	第36図
285	包含層	サヌカイト淡緑	〃	基部両側欠損	(1.45)	(1.0)	0.2	(0.3)	第36図
286	包含層	サヌカイト	A-29	基部片側欠損	1.8	(1.3)	0.2	(0.5)	第36図
287	包含層	サヌカイト	〃	完形	2.05	1.5	0.31	0.8	第36図
288	包含層	サヌカイト	〃	完形	2.05	1.55	0.21	0.6	第36図
289	包含層	サヌカイト	〃	完形	1.80	1.4	0.3	0.6	第36図
290	S H 384	チャート	〃	先端・基部片側欠損	(1.75)	(1.45)	0.38	(0.9)	第36図
291	包含層	サヌカイト	〃	先端部欠損	(1.3)	1.4	0.3	(0.4)	第36図
292	S P 660	サヌカイト	A-30	完形	2.5	1.5	0.2	0.7	第36図
293	包含層	サヌカイト	〃	基部片側欠損	2.1	(1.8)	0.3	(0.6)	第36図

長岡京跡右京第941次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告

遺物番号	包含層・遺構	石材	形態分類	遺存状況	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
294	包含層	サヌカイト	A-31	完形	2.75	1.7	0.4	1.1	第37図
295	S D 368	サヌカイト	〃	先端部欠損	(2.3)	1.65	0.4	(1.4)	第37図
296	包含層	サヌカイト	〃	基部片側欠損	2.4	(1.7)	0.5	(1.4)	第37図
297	包含層	サヌカイト	〃	先端部欠損	(1.4)	1.7	0.3	(0.6)	第37図
298	包含層	サヌカイト	A-32	完形	1.6	1.4	0.25	0.4	第37図
299	包含層	サヌカイト淡緑	〃	基部片側欠損	1.8	(1.4)	0.3	(0.4)	第37図
300	包含層	サヌカイト	〃	基部片側欠損	(2.05)	(1.55)	0.35	(0.7)	第37図
301	S D 369	サヌカイト	〃	完形	1.8	1.7	0.3	0.6	第37図
302	S D 369	サヌカイト淡緑	〃	先端・基部片側欠損	(2.02)	(1.6)	0.3	(0.6)	第37図
303	S D 369	サヌカイト	〃	先端・基部片側欠損	(1.5)	(1.15)	0.24	(0.3)	第37図
304	S H 370	サヌカイト	A-33	先端部欠損	(1.85)	1.4	0.25	(0.5)	第37図
305	S H 370	サヌカイト淡緑	〃	完形	2.0	1.6	0.35	0.8	第37図
306	S D 368	サヌカイト	〃	基部片側欠損	2.85	(1.9)	0.3	(1.0)	第37図
307	包含層	サヌカイト淡緑	〃	基部片側欠損	2.8	(2.0)	0.5	(1.7)	第37図
308	包含層	サヌカイト	〃	基部片側欠損	2.4	(1.15)	0.4	(0.7)	第37図
309	包含層	サヌカイト淡緑	〃	先端・基部片側欠損	(2.22)	(1.35)	0.3	(0.6)	第37図
310	包含層	サヌカイト	A-34	完形	1.9	1.4	0.2	0.4	第37図
311	包含層	サヌカイト	A-35	先端部欠損	(1.2)	1.2	0.25	(0.3)	第37図
312	S D 369	サヌカイト	A-36	完形	1.55	1.3	0.2	0.5	第37図
313	S D 368	サヌカイト	A-37	基部片側欠損	1.7	(1.3)	0.27	(0.5)	第37図
314	包含層	サヌカイト	A-38	完形	2.2	1.6	0.35	0.7	第37図
315	S H 400	サヌカイト	A-39	基部片側欠損	2.3	(1.95)	0.5	(2.0)	第37図
316	包含層	サヌカイト	〃	基部片側欠損	2.25	(1.65)	0.3	(1.1)	第37図
317	包含層	サヌカイト淡緑	〃	先端部欠損	(1.4)	1.5	0.35	(0.7)	第37図
318	包含層	サヌカイト	B-1	先端部欠損	(1.9)	1.9	0.6	(2.2)	第37図
319	包含層	サヌカイト	〃	完形	2.05	1.55	0.3	0.9	第37図
320	S H 370	サヌカイト	〃	完形	2.85	2.0	0.5	2.8	第37図
321	S K 367	サヌカイト	〃	先端部欠損	(2.15)	1.85	0.6	(2.3)	第37図
322	包含層	サヌカイト淡緑	B-2	完形	1.8	1.2	0.25	0.5	第37図
323	包含層	サヌカイト	B-3	先端部欠損	(2.45)	2.4	0.6	(2.9)	第37図
324	S D 368	サヌカイト淡緑	〃	完形	2.20	2.05	0.45	1.7	第37図
325	包含層	サヌカイト淡緑	〃	基部片側欠損	1.35	(1.4)	0.25	(0.5)	第37図
326	S P 486	サヌカイト	B-4	完形	2.45	1.5	0.5	2.4	第37図
327	包含層	サヌカイト	〃	完形	2.0	1.55	0.3	1.0	第37図
328	包含層	サヌカイト	〃	完形	1.75	1.5	0.45	0.9	第37図
329	S K 588	サヌカイト	C-1	完形	2.0	1.5	0.3	1.0	第38図
330	包含層	サヌカイト	〃	完形	2.2	1.55	0.35	1.7	第38図
331	包含層	サヌカイト	〃	完形	2.1	1.6	0.3	1.3	第38図
332	S D 368	サヌカイト	〃	完形	2.05	1.45	0.35	1.1	第38図
333	S H 500	サヌカイト	C-2	完形	3.25	1.65	0.6	4.0	第38図
334	S H 440	サヌカイト	〃	完形	2.6	1.4	0.5	2.1	第38図
335	S K 697	サヌカイト	〃	完形	2.85	1.7	0.5	2.5	第38図
336	S D 368	サヌカイト淡緑	〃	完形	3.15	1.7	0.6	3.0	第38図
337	包含層	サヌカイト	C-3	完形	2.0	1.6	0.35	1.5	第38図
338	包含層	石英	D	完形	3.85	1.2	0.6	9.5	第38図
339	包含層	サヌカイト	D	完形	4.0	1.2	0.65	4.2	第38図
340	S D 369	サヌカイト	尖頭器	先端・基部片側欠損	(5.8)	2.1	0.8	10.8	第38図
341	S H 370	サヌカイト	C-2?	未製品	3.1	1.5	0.7	4.4	第39図
342	S D 368	サヌカイト	C-2?	未製品	3.0	1.9	0.7	3.7	第39図
343	S D 369	サヌカイト	不明	未製品	2.6	1.5	0.3	0.9	第39図
344	包含層	サヌカイト	不明	未製品	3.5	2.4	0.6	5.7	第39図
345	包含層	サヌカイト	C-3?	未製品	2.8	1.9	0.5	2.7	第39図
346	S H 370	サヌカイト	不明	未製品	1.8	1.4	0.3	0.7	第39図
347	包含層	頁岩	折損品	未製品	2.2	2.2	0.6	3.2	第39図
348	S K 544	サヌカイト	C-3?	未製品	2.2	1.9	0.5	2.0	第39図
349	S H 370	サヌカイト	A類	未製品	2.2	1.7	0.5	1.6	第39図

石錐一覧表

遺物番号	包含層・遺構	石材	破損	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
350	S H 370	サヌカイト	無	4.2	3.0	0.8	5.8	第39図
351	S X 631	サヌカイト淡緑	無	2.9	1.8	0.4	2.0	第39図
352	包含層	サヌカイト淡緑	無	2.9	1.9	0.5	2.1	第39図
353	S X 619	サヌカイト	ツマミ	3.9	1.4	0.3	1.1	第39図
354	S H 373	サヌカイト	無	4.1	3.2	1.4	12.0	第39図
355	包含層	サヌカイト	未	3.1	2.0	0.6	3.1	第39図
356	包含層	サヌカイト	機能部	(3.6)	3.8	0.5	(8.2)	第39図
357	S H 370	サヌカイト	先端	(3.4)	1.7	0.4	(2.3)	第39図
358	S H 370	サヌカイト淡緑	無	3.2	1.6	0.6	2.3	第39図
359	S D 369	サヌカイト	機能部	(1.8)	1.8	0.4	(1.1)	第39図
360	S H 380	サヌカイト	無	3.4	1.6	0.6	3.3	第39図

石匙・削器・搔器一覧表

遺物番号	包含層・遺構	器種	素材剥片	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
361	包含層	石匙	横長	サヌカイト	4.1	5.5	0.8	12.8	第40図
362	包含層	石匙	横長	サヌカイト	2.5	(2.6)	0.5	(3.0)	第40図
363	S D 369	削器	横長	サヌカイト	4.3	6.1	0.7	22.4	第40図
364	包含層	削器	横長	サヌカイト	2.7	4.0	0.6	5.3	第40図
365	包含層	削器	横長	サヌカイト	3.5	6.2	0.9	28.8	第40図
366	S H 370	削器	横長	サヌカイト淡緑	4.6	5.0	0.7	15.9	第40図
367	S H 370	削器	横長	サヌカイト淡緑	4.2	6.7	0.7	22.1	第40図
368	包含層	削器	縦長	サヌカイト	4.1	7.5	1.0	40.4	第40図
369	S H 520	削器	横長	サヌカイト	2.0	2.9	0.3	2.3	第40図
370	包含層	削器	横長	サヌカイト	2.7	6.1	0.6	13.1	第40図
371	S X 570	削器	幅広	サヌカイト	4.4	5.1	1.1	16.7	第40図
372	S K 697	削器	横長	サヌカイト	3.4	6.8	0.8	17.1	第40図
373	S D 368	削器	横長	サヌカイト	0.4	4.2	1.2	11.2	第40図
389	S H 370	削器	不明	サヌカイト	3.4	1.9	0.6	4.2	第42図
392	S P 364	搔器	縦長	サヌカイト	8.0	4.4	1.4	56.4	第42図

R F・UF一覧表

遺物番号	包含層・遺構	石材	加工・使用部位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
374	SH370	サヌカイト	左側縁	3.1	2.3	0.5	3.5	第41図
375	SD369	サヌカイト	下辺	1.1	1.6	0.6	1.4	第41図
376	SD369	サヌカイト	右下端	2.1	1.6	0.2	0.9	第41図
377	包含層	サヌカイト	右側縁	2.8	1.7	0.7	3.2	第41図
378	SH370	サヌカイト淡緑	下辺	3.6	2.5	0.9	5.7	第41図
379	包含層	サヌカイト	左側下半	2.0	0.7	0.2	0.4	第41図
380	SP493	サヌカイト	右側縁	3.0	1.9	0.6	2.3	第41図
381	SK544	サヌカイト	周縁	1.8	2.1	0.6	2.4	第41図
382	包含層	サヌカイト	下辺	2.3	2.0	0.3	1.4	第41図
383	包含層	サヌカイト	下辺	2.0	2.7	0.4	2.1	第41図
384	SH370	サヌカイト	左側上半	3.2	2.2	0.7	4.7	第41図
385	SH370	サヌカイト	下辺	4.7	4.1	1.0	17.1	第41図
386	SD368	サヌカイト淡緑	右側縁	2.6	2.2	0.5	4.7	第41図
387	SH347	サヌカイト淡緑	下辺	2.4	2.7	1.0	6.1	第41図
388	SH370	サヌカイト	両側一部・下半	6.1	3.0	0.6	11.4	第41図
390	SD368	サヌカイト	右側一部	5.3	3.0	0.9	11.1	第42図
391	包含層	サヌカイト	右側縁	4.4	3.2	1.2	22.3	第42図

楔形石器一覧表

遺物番号	包含層・遺構	石材	階段剥離	裁断面	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
393	包含層	サヌカイト	短辺	有	3.9	2.1	2.1	16.6	第43図
394	包含層	サヌカイト	短辺	有	4.0	2.3	1.4	20.8	第43図
395	S H 440	サヌカイト	短辺	有	2.5	1.4	0.9	4.3	第43図
396	包含層	サヌカイト	短辺	有	3.9	2.0	1.5	11.6	第43図
397	包含層	サヌカイト	短辺	有	3.0	2.0	1.5	10.2	第43図
398	包含層	サヌカイト	両端点状	有	1.8	0.8	0.7	1.2	第43図
399	包含層	サヌカイト	両端点状	有	3.1	1.1	0.8	3.4	第43図
400	包含層	サヌカイト	両端点状	有	3.9	1.5	0.8	4.0	第43図
401	包含層	サヌカイト	両端点状	有	3.0	1.2	0.8	2.9	第43図
402	S D 368	サヌカイト	端点・下辺	有	3.4	2.2	1.0	6.9	第43図
403	S H 500	サヌカイト	上端・点状	有	3.0	2.6	0.9	6.0	第43図
404	S H 370	サヌカイト	正方2辺	有	1.3	1.4	0.4	2.7	第44図
405	包含層	サヌカイト	正方2辺	有	2.6	2.2	0.6	4.2	第44図
406	S D 368	サヌカイト	正方4辺	有	2.0	2.4	1.0	4.6	第44図
407	S H 440	サヌカイト	正方2辺	有	2.8	2.5	0.7	6.9	第44図
408	S D 368	サヌカイト	正方2辺	無	3.3	3.3	0.9	12.8	第44図
409	包含層	サヌカイト	正方2辺	有	3.7	3.4	1.2	15.4	第44図
410	包含層	サヌカイト	長方2辺	有	2.8	2.4	1.0	9.9	第44図
411	S D 368	サヌカイト	正方2辺	有	2.9	3.3	0.6	6.2	第44図
412	S H 440	サヌカイト	正方2辺	無	2.9	2.5	1.0	6.9	第44図
413	包含層	サヌカイト	正方2辺	有	2.9	3.4	0.9	11.0	第44図
414	包含層	サヌカイト	長方上辺	有	2.1	2.5	0.7	4.4	第44図
415	包含層	サヌカイト	短辺	有	3.4	2.5	1.3	13.3	第44図
427	包含層	サヌカイト	上端・下辺	有	2.6	1.3	0.7	2.4	第45図
429	S H 440	サヌカイト	上端・点状	有	3.1	1.4	0.7	3.4	第45図
430	S H 440	サヌカイト	上端・点状	有	5.2	2.7	2.0	26.1	第45図
431	S D 369	サヌカイト	正方3辺	有	4.6	4.1	2.0	42.3	第45図

楔形石器剥片・碎片一覧表

遺物番号	包含層・遺構	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
416	包含層	サヌカイト	1.9	1.1	0.5	1.0	第44図
417	S D 368	サヌカイト	2.4	1.4	0.7	2.4	第44図
418	包含層	サヌカイト淡緑	2.5	1.6	0.7	3.0	第44図
419	包含層	サヌカイト淡緑	3.2	1.0	0.4	1.4	第44図
420	S D 368	サヌカイト	4.3	1.3	1.1	6.8	第45図
421	包含層	サヌカイト淡緑	4.4	1.5	0.9	6.6	第45図
422	包含層	サヌカイト	2.8	1.9	0.7	2.3	第45図
423	S H 380	サヌカイト	2.5	1.1	0.6	1.7	第45図
424	S H 440	サヌカイト	4.5	1.2	1.2	8.6	第45図
425	包含層	サヌカイト	3.6	1.8	0.6	3.3	第45図
426	S D 368	サヌカイト	3.6	1.2	0.5	1.2	第45図
428	S H 347	サヌカイト	2.7	1.6	0.9	4.0	第45図
432	包含層	サヌカイト	1.7	0.6	0.2	0.2	第45図
433	包含層	サヌカイト	3.2	1.0	0.4	1.4	第45図

石斧一覧表

遺物番号	包含層・遺構	器種	破損	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
462	S K 544	磨斧	有	(9.7)	(5.2)	(2.6)	(214.8)	第51図
463	包含層	磨斧	無	9.8	5.0	2.6	198.8	第51図
464	S H 500	磨斧	有	(4.3)	(4.1)	(2.0)	(54.1)	第51図
510	S X 390	打斧片	有	(10.3)	5.4	1.0	(105.0)	第56図
511	包含層	打斧片	有	(10.8)	(4.7)	(1.3)	(840.0)	第56図
514	S H 384	打斧	有	16.8	6.8	1.8	330.0	第56図

敲石類一覧表

遺物番号	包含層・遺構	形態分類	破損	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
465	S X 570	I b	無	12.1	11.8	9.3	1830	第51図
466	S H 440	I d	有	(9.65)	9.95	4.4	(595.0)	第51図
467	S H 580	I a	無	8.6	7.7	5.2	550	第51図
468	包含層	I b	無	10.25	6.5	4.2	455	第51図
469	S K 544	I d	有	(5.4)	(8.3)	3.65	(193.8)	第52図
470	S D 369	I b	有	9.7	5.0	5.55	380	第52図
471	包含層	I b	無	8.05	6.95	4.3	340	第52図
472	包含層	I a	有	(5.95)	(5.05)	(2.15)	(80.8)	第52図
473	包含層	I b	有	(7.15)	7.05	3.75	(274.9)	第52図
474	S K 697-1	I d	有	(5.7)	(6.9)	4.4	(243.2)	第52図
475	S D 368	I b	有	(6.0)	(7.1)	5.2	(32)	第52図
476	包含層	I a	有	(12.5)	9.8	6.3	(110)	第53図
477	S H 370	IV	無	7.6	5.3	3.4	193.7	第53図
478	包含層	III a	有	4.2	3.45	(2.3)	(42.8)	第53図
479	包含層	I d	有	(7.2)	(6.8)	(3.9)	(204.2)	第53図
480	包含層	III b	無	5.4	5.5	1.75	69.4	第53図
481	包含層	III a	無	3.95	3.95	3.05	71	第53図
482	S H 370	II b	有	(6.5)	(4.8)	4.4	1921	第53図
483	包含層	III a	無	5.0	4.75	4.4	165.2	第53図
484	包含層	II b	有	(13.45)	(7.75)	3.2	570	第53図
485	包含層	III b	有	(9.55)	(6.4)	3.25	260	第53図
486	S H 550	II b	有	(5.3)	9.0	5.0	(340.0)	第54図
487	S D 368	III b	無	4.0	3.9	2.9	60.5	第54図
488	包含層	IV	有	8.1	(6.7)	4.7	(365.0)	第54図
489	包含層	III b	有	(11.5)	(5.5)	(4.0)	(110.0)	第54図
490	S D 369	III b	有	(6.3)	(6.2)	(5.3)	(244.4)	第54図
491	S K 544	III b	有	(6.6)	(7.8)	(5.3)	(355.0)	第54図
492	S H 370	III b	無	10.2	6.4	4.4	420.0	第54図
493	包含層	II a	無	9.7	7.0	5.0	460.0	第54図
494	包含層	III b	有	(8.2)	5.5	2.4	(132.6)	第54図
496	S D 368	III b	有	(7.3)	6.0	5.8	(350.0)	第55図
497	S D 368	I c	無	10.3	9.0	5.3	695.0	第55図
498	包含層	I b	無	9.2	7.7	4.3	445.0	第55図
499	S D 369	IV	有	(6.7)	(2.8)	(1.9)	(40.0)	第55図
500	S H 347	IV	有	(5.6)	3.7	1.6	(41.6)	第55図

台石・石皿一覧表

遺物番号	包含層・遺構	器種	破損	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
501	包含層	台石	有	(7.5)	(7.2)	4.5	(450.)	第55図
502	包含層	台石	有	(5.5)	(7.5)	(7.7)	(545.)	第55図
503	S K 506	台石	有	(10.5)	(8.9)	(6.6)	(845.)	第55図
504	S D 436	台石	有	(13.3)	(11.)	(4.1)	(695.)	第55図
505	包含層	台石	無	19.1	14.5	8.2	2860	第56図
506	包含層	石皿	有	(21.8)	(17.5)	6.9	(1295.)	第56図
507	包含層	台石	有	(8.5)	(7.8)	5.8	(435.)	第56図
508	包含層	台石	有	(17.)	(5.2)	(4.4)	(800.)	第56図

その他の礫石器・礫一覧表

遺物番号	包含層・遺構	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
509	包含層	石錘	(10.1)	8.4	2.8	(282.)	第56図
495	S K 544	礫	5.8	4.5	2.3	89.8	第56図
512	包含層	礫	(3.6)	(7.)	(4.2)	(150.3)	第56図
515	包含層	礫	(7.8)	(7.)	(6.1)	(400.)	第56図
513	S D 369	砥石	(3.6)	3.8	3.6	(140.7)	第56図

圖 版



(1) 調査地全景(上が北)



(2) 8トレンチ全景(上が南東)



(1) 上層遺構全景(北東から)



(2) トレンチ全景(北東から)

(1) 調査前全景(北から)

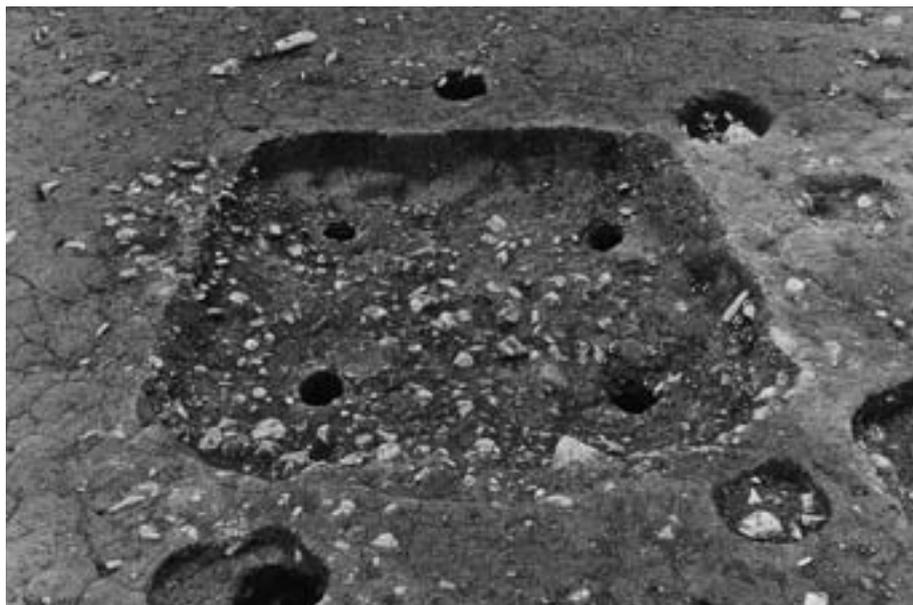


(2) 溝 SD368・369 全景(東から)



(3) 溝 SD368・369 全景(西から)





(1) 土坑 SK347(北東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH340
(北西から)



(3) 竪穴式住居跡 SH345
(北東から)

(1) 竪穴式住居跡 SH345 竈近景
(北東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH350
(南東から)



(3) 竪穴式住居跡 SH370-1・2
(南西から)

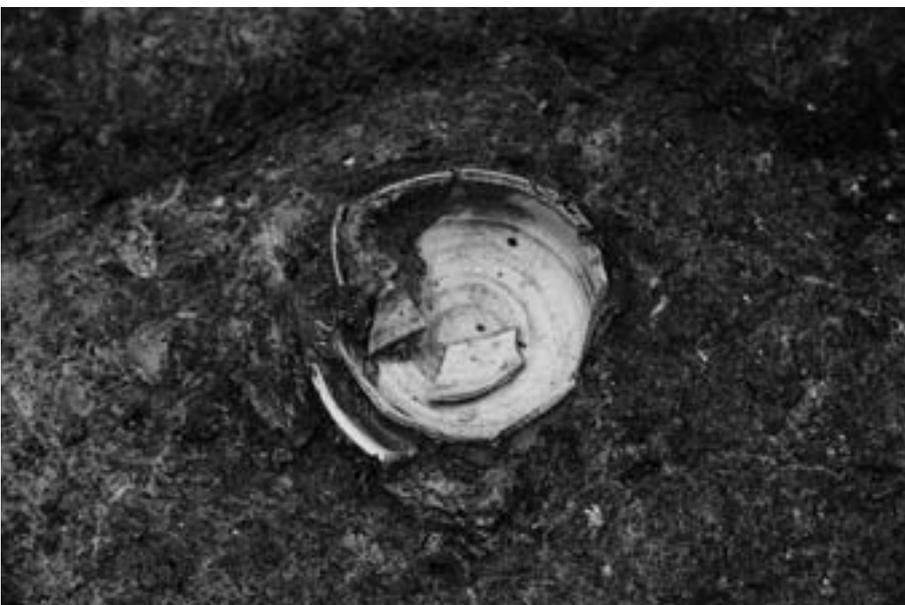




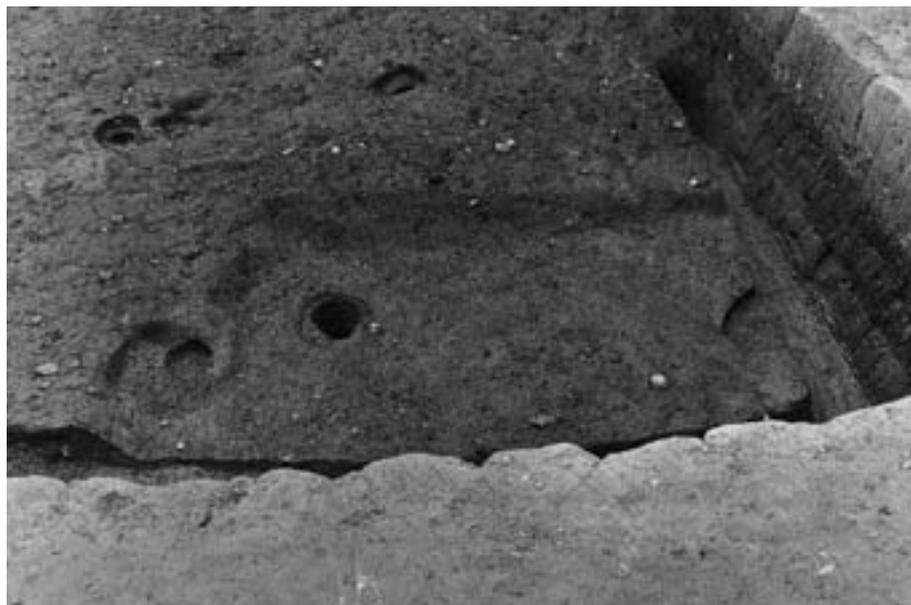
(1) 竪穴式住居跡 SH370-2 竈近景
(南西から)



(2) 竪穴式住居跡 SH370-2
遺物出土状況(北西から)



(3) 竪穴式住居跡 SH370-1
遺物出土状況(北西から)



(1) 竪穴式住居跡 SH373(北東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH380(北から)



(3) 竪穴式住居跡 SH384(北東から)



(1) 竪穴式住居跡 SH384 竈近景
(北東から)



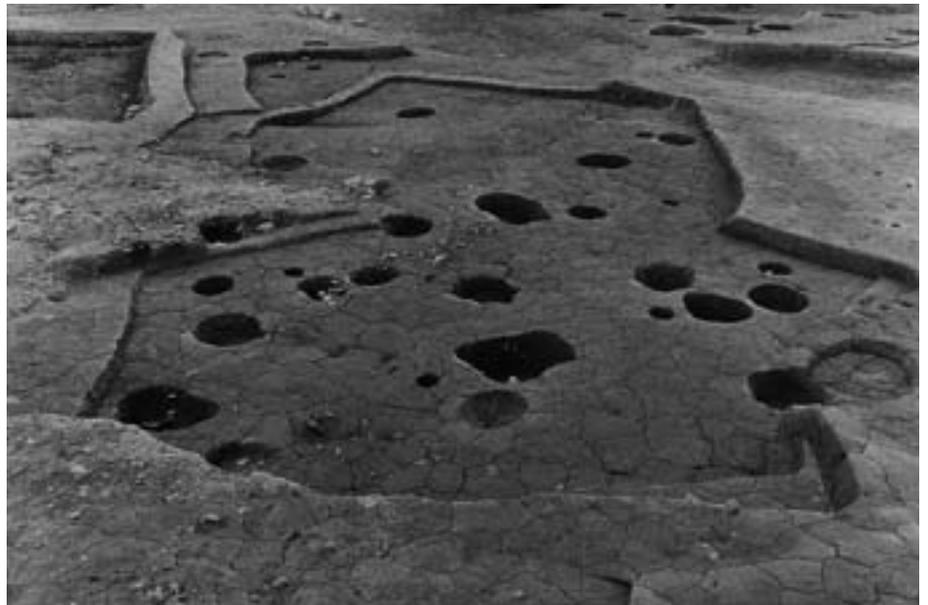
(2) 竪穴式住居跡 SH384 柱穴遺物
出土状況(南東から)



(3) 掘立柱建物跡 SB490(北西から)



(1) 竪穴式住居跡 SH450、
500-1・2 (南東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH450、
500-1・2 (北西から)



(3) 竪穴式住居跡 SH450
(北東から)



(1) 竪穴式住居跡 SH440・550・
400、土坑 SK637(北東から)



(2) 竪穴式住居跡 550・400
(東から)



(3) 竪穴式住居跡 SH440
(南東から)



(1) 竪穴式住居跡 SH520、
土坑 SK544(南から)



(2) 竪穴式住居跡 SH590、
土坑 SK588 (北東から)



(3) トレンチ南端土坑群
(南西から)



(1) トレンチ南端土坑群(東から)



(2) 土坑 SK222 断面、
竪穴式住居跡 SH520(南西から)



(3) 土坑 SK544・621(南から)

(1) 土坑 SK507 (南から)



(2) 柱穴 SP436 遺物出土状況
(東から)



(3) 柱穴 SP437 遺物出土状況
(南西から)





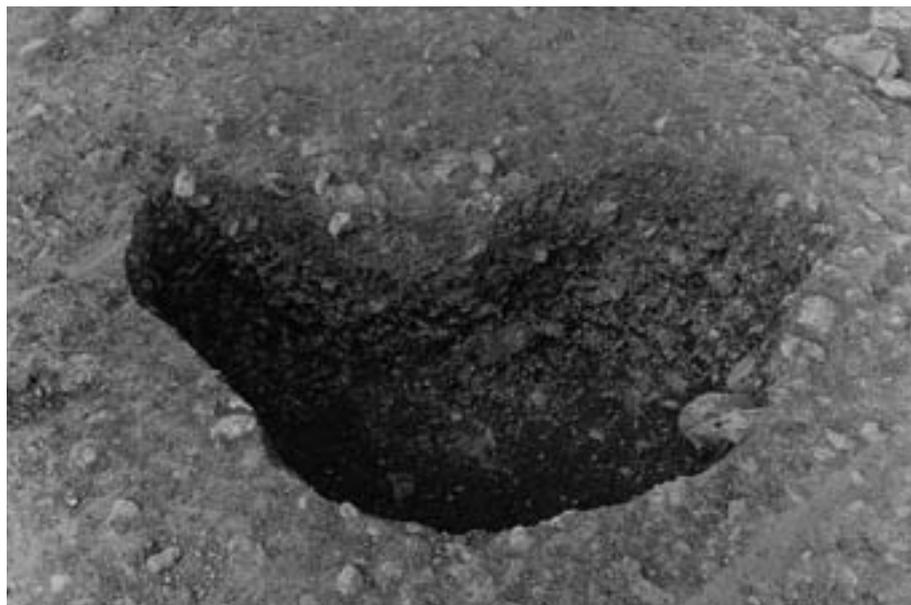
(1) 墓 ST545(南から)



(2) 墓 ST620(南東から)



(3) 墓 ST554(南から)



(1) 柱穴 SP559(南から)



(2) 土坑 SK540(南から)



(3) 不明土坑 SX346(南東から)



(1) 土坑 SK588 礫検出状況
(北西から)



(2) 土坑 SK530 礫検出状況
(南西から)



(3) 土坑 SP503 礫検出状況
(南から)





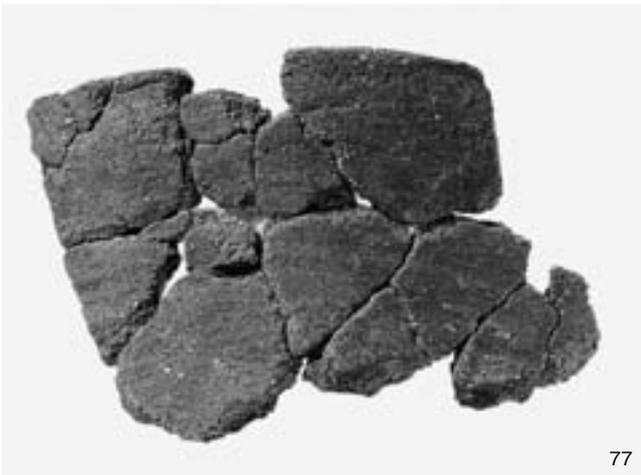
15



212



118



77



101



155



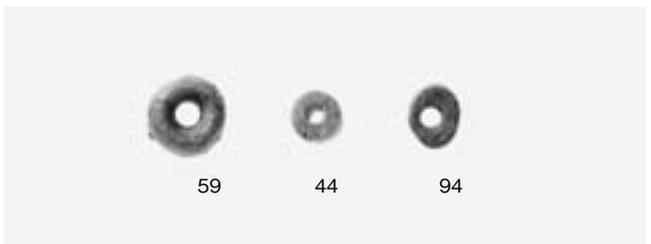
217



217



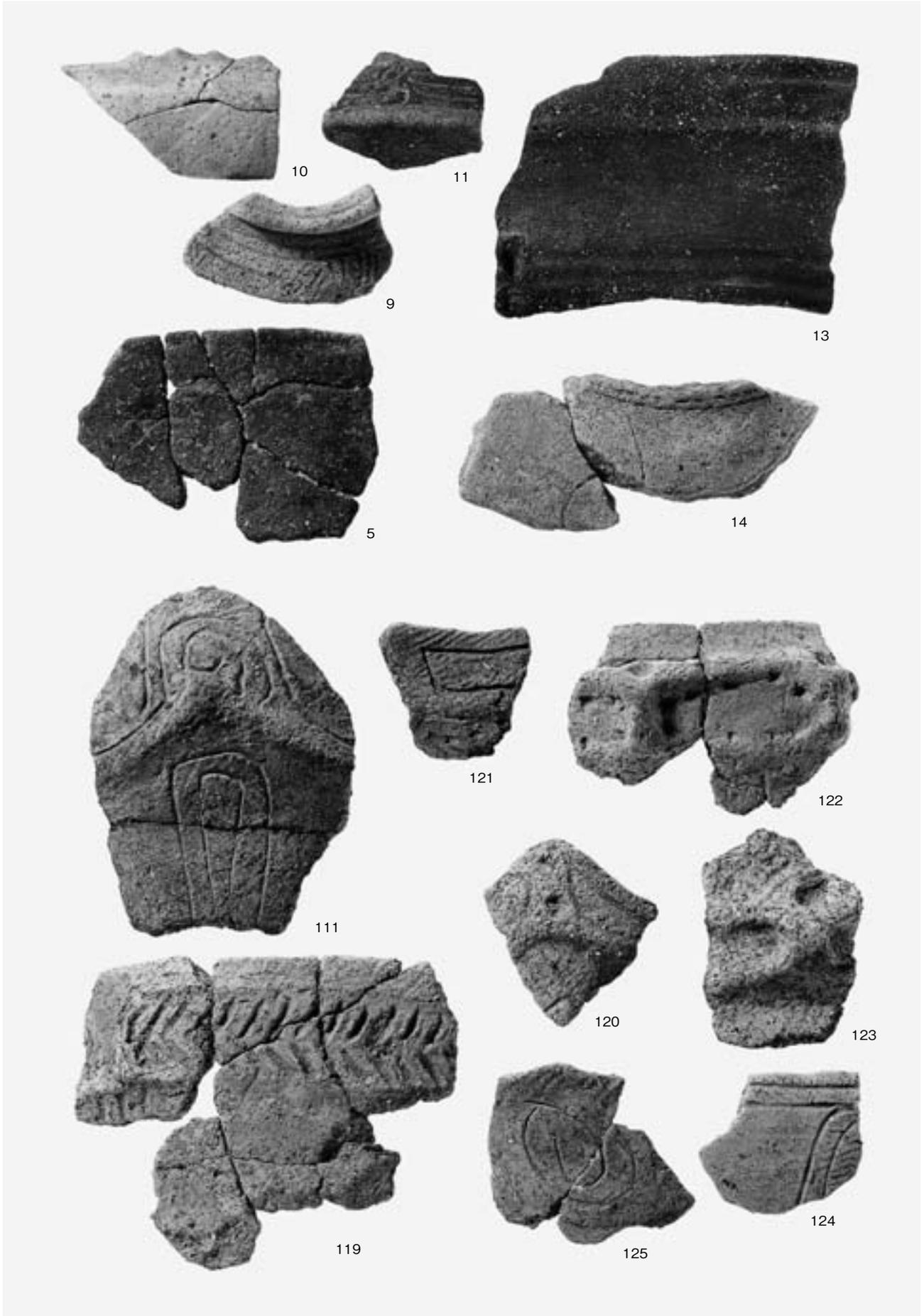
155

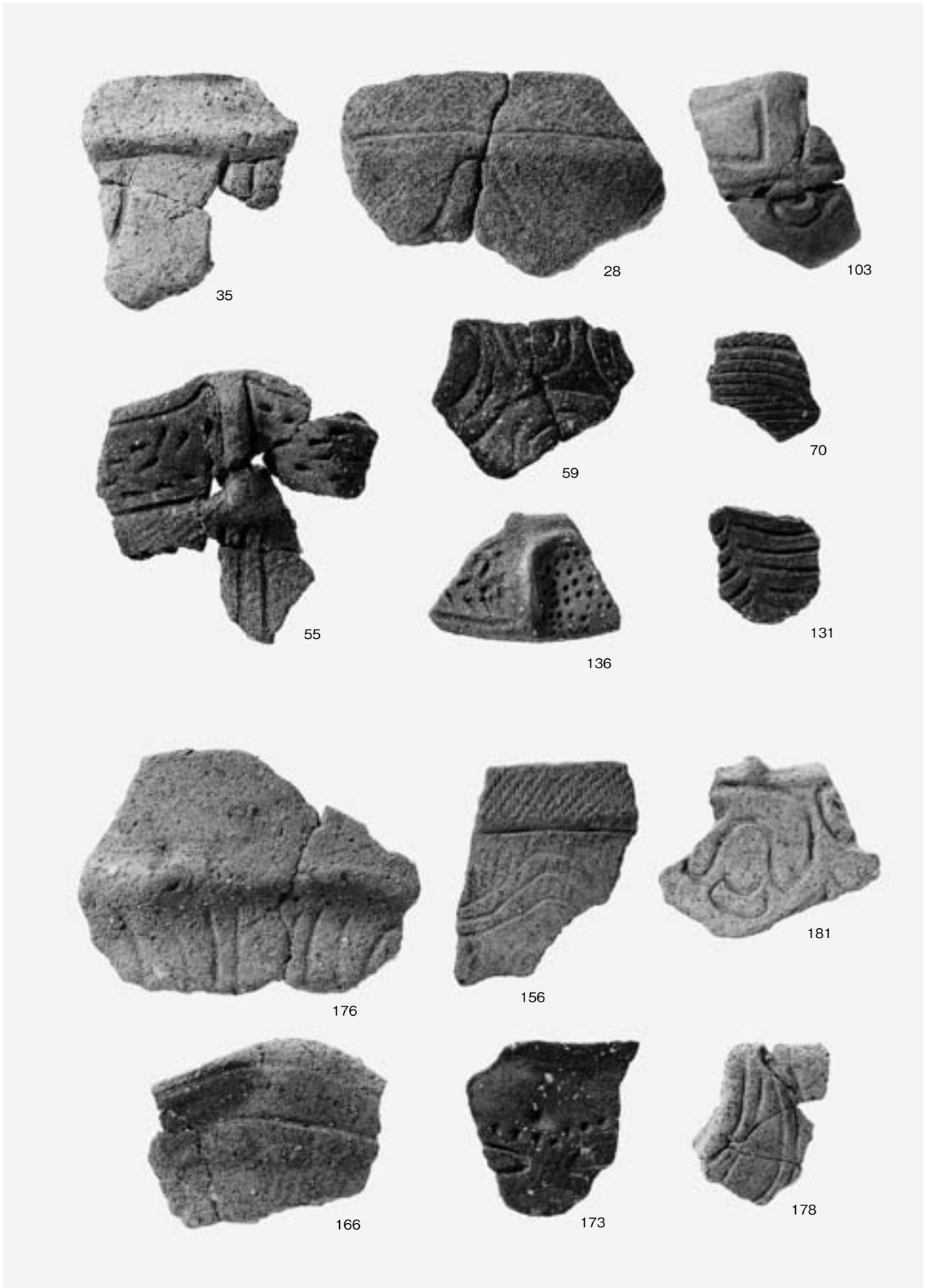


59

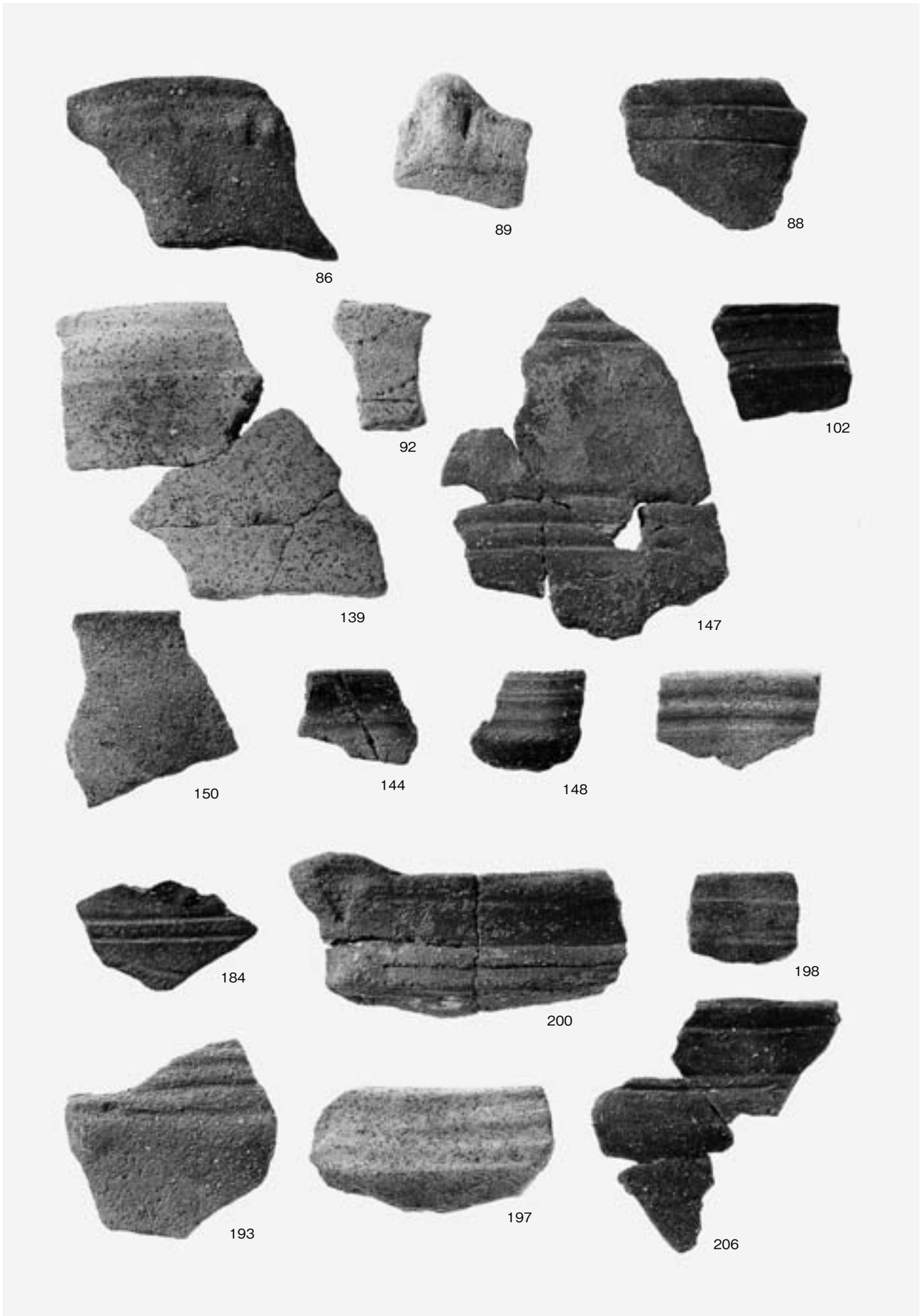
44

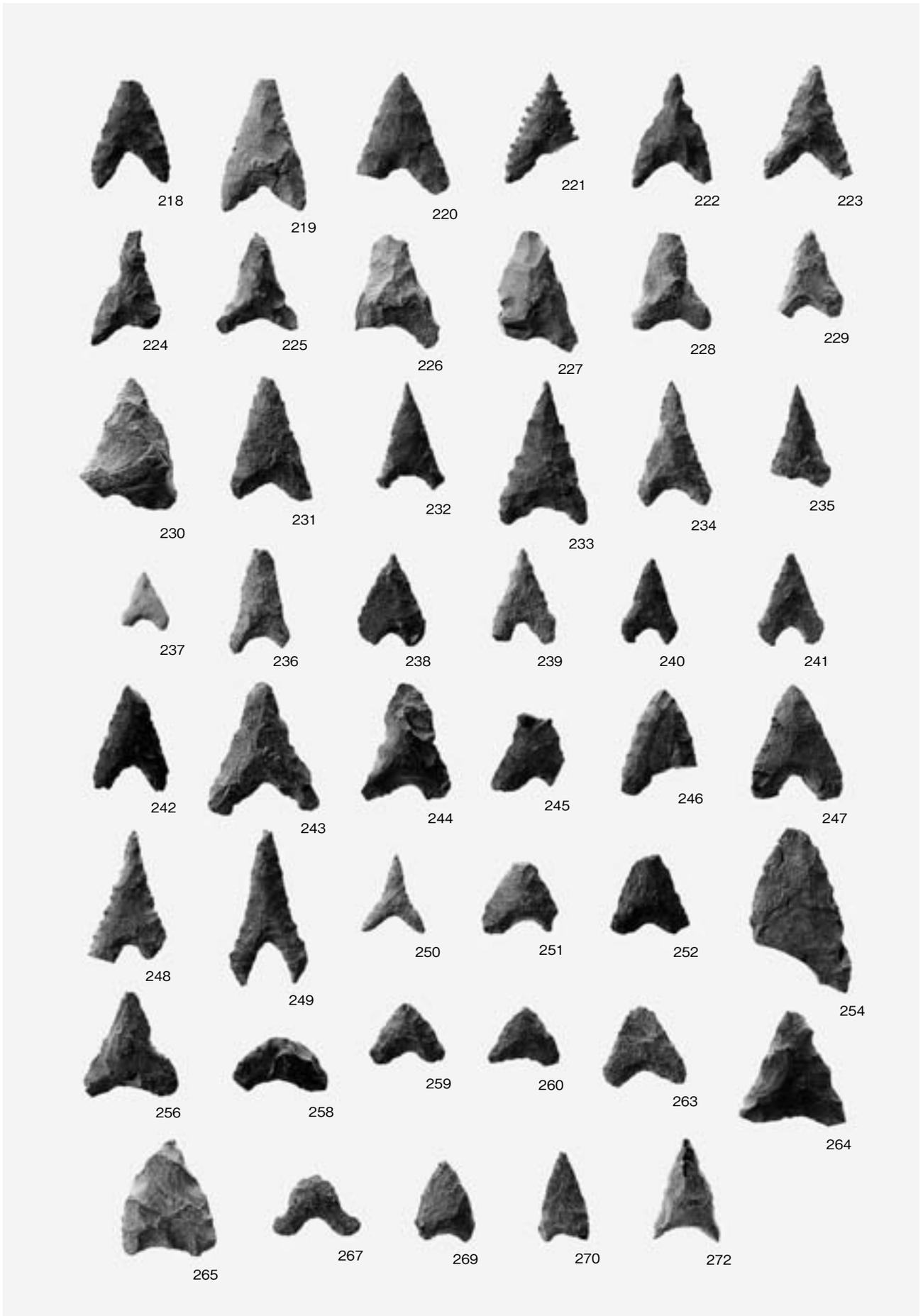
94

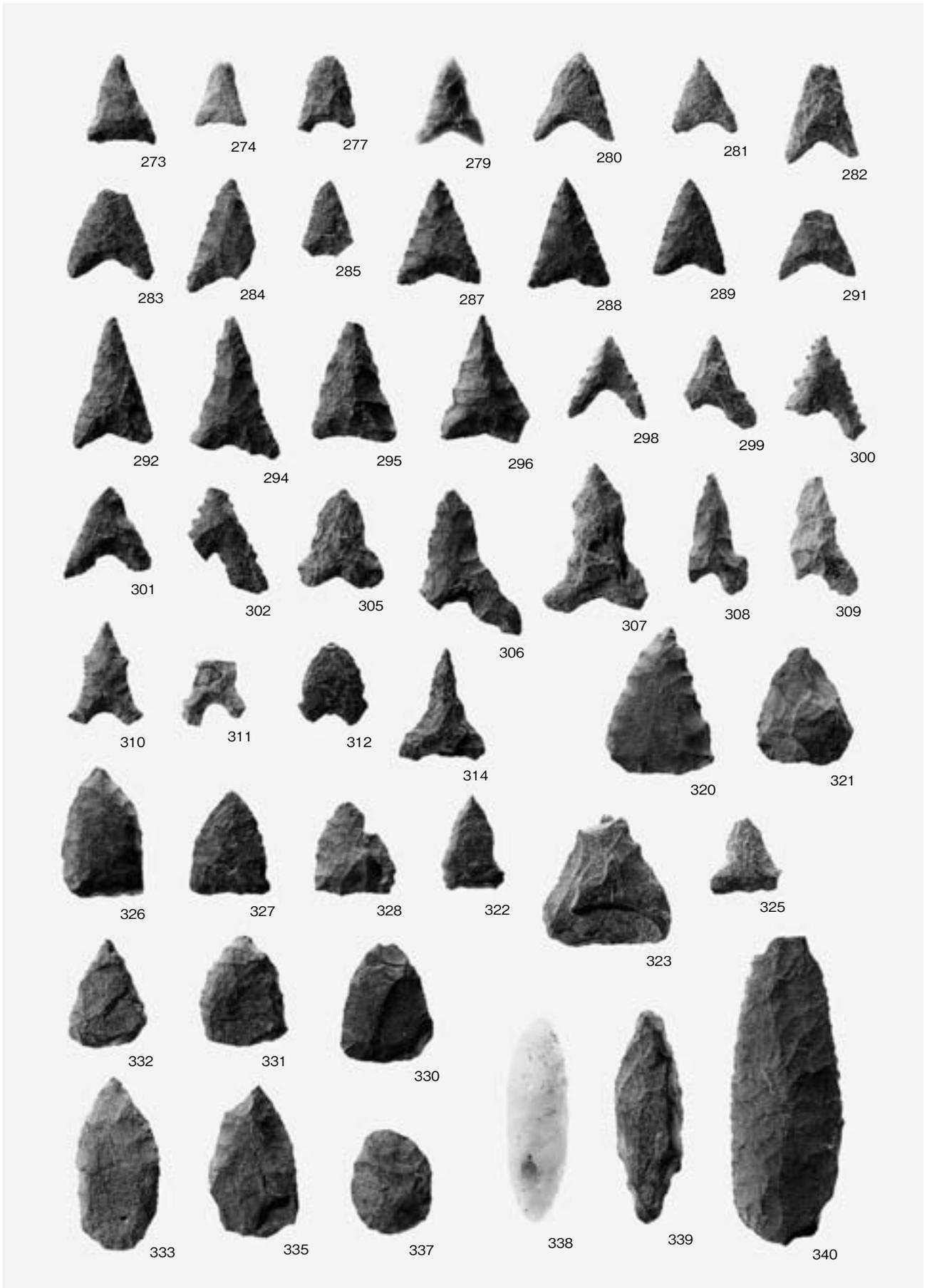


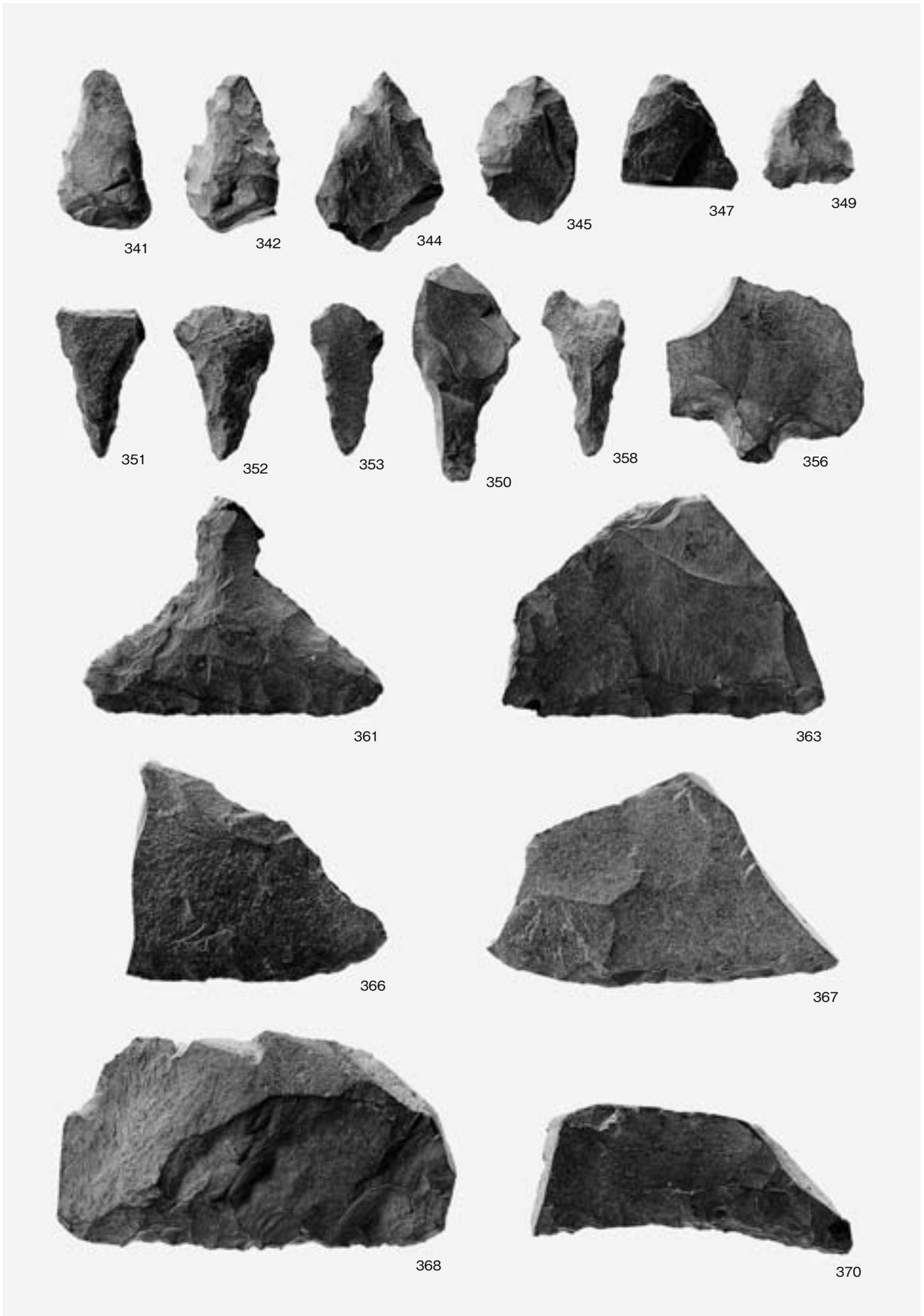


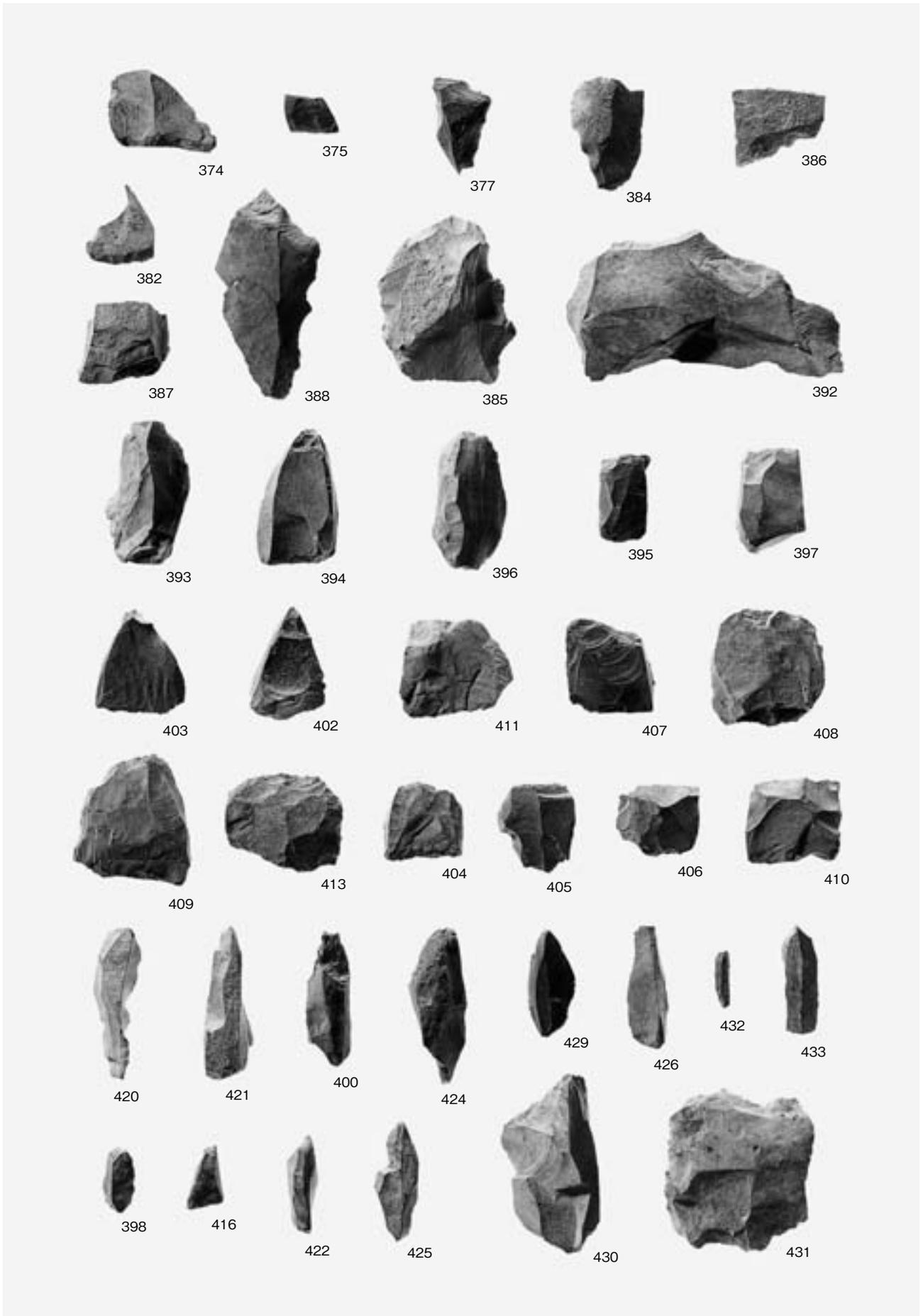
出土遺物 4

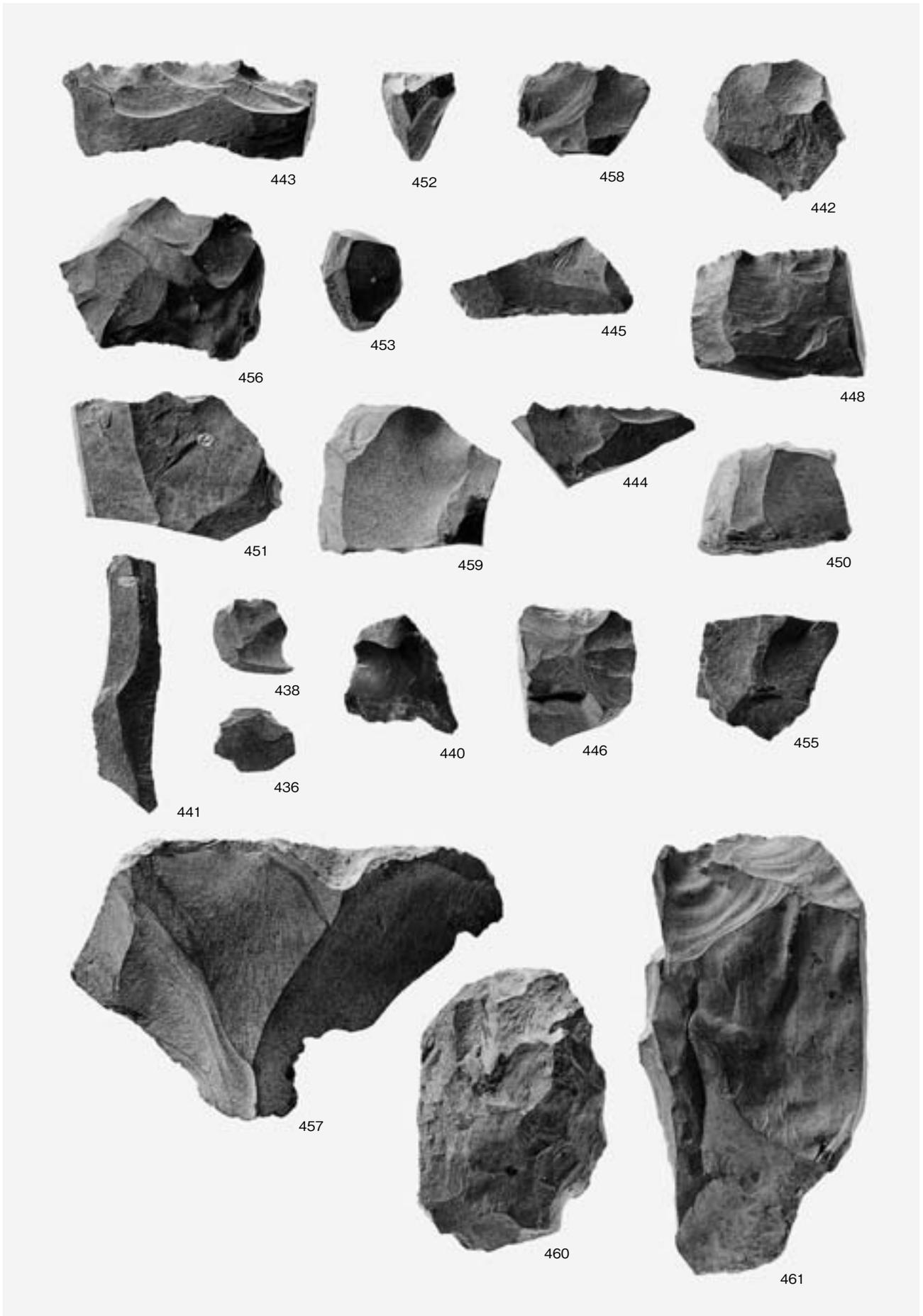


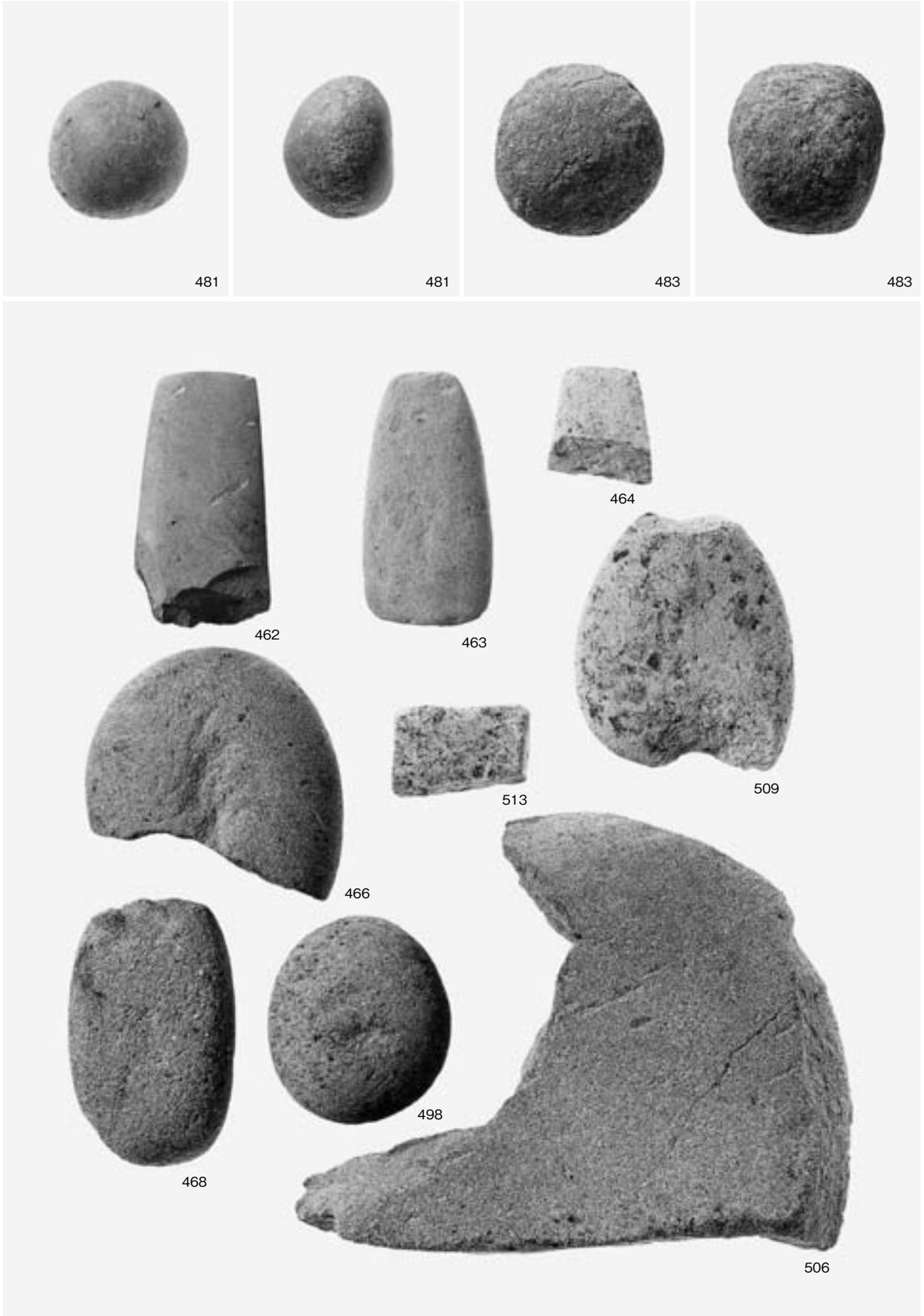


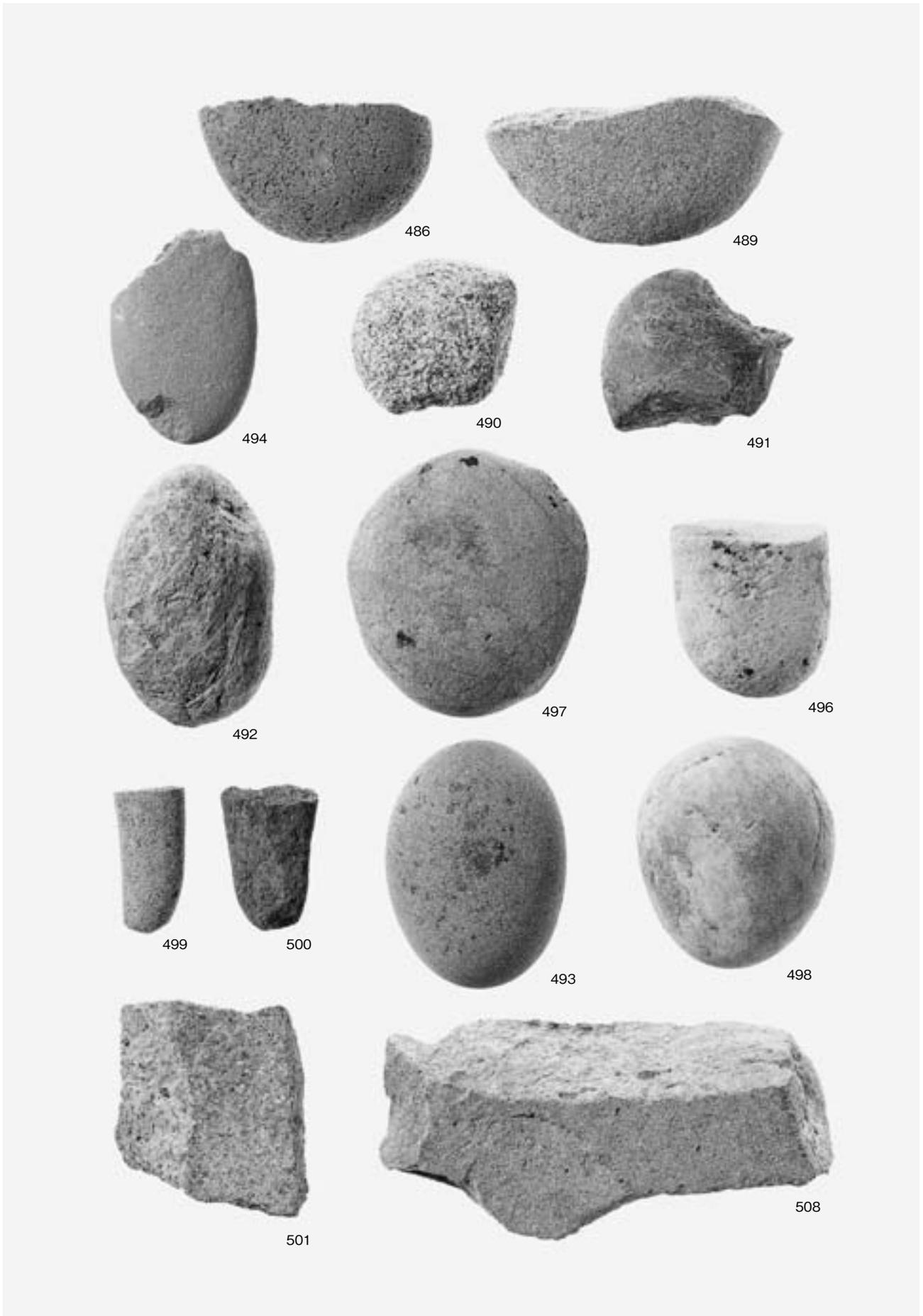












京都府遺跡調査報告集 第 137 冊

平成22年 3 月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141